緋弾のアリアVII

Aria the Scarlet Ammo

火と風の円舞（スプリング・ターン）

赤松中学

MF文庫 J
あ-05-10

緋弾のアリアVII

赤松中学

ISBN978-4-8401-3486-6
C0193 ¥580E

9784840134866

19201193005806

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

緋弾のアリアVII　火と風の円舞（スプリング・ターン）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジは、戦闘不能におちいったレキを京都に残し、東京への帰路についていた。アリアとの仲も修復できていない……そんな状態の中、再び『万武（ワンマン）』の魔の手が迫り――。理子の座席に仕掛けられた『加速爆弾（ハリー・タップ）』によって暴走特急と化した列車を舞台に、アリアとキンジの超高速リベンジバトルが始まる！そして舞い降りる、一陣の風――。大スケールアクション＆ラブコメディー第7弾!!

スクウェア・エニックスの大人気コミック誌
ヤングガンガンにて
今秋より
緋弾のアリアAA（ダブルエー）
連載開始!!
赤松中学書きおろしストーリーで生まれるもうひとつの"アリア"――
面白さ無限大!!
8th
MF文庫J 8周年フェア
8周年フェア
580

3冊買って超豪華プレゼントを当てちゃおう!
「面白さ無限大!! 8周年フェア」帯についている応募用紙に応募券を貼り、必要事項を記入したものを下記宛先にお送りください。詳しい送り方は帯の折り返しをご参照ください。
50名様
M賞　大人気ヒロインビッグバスタオル
120×60cmのビッグバスタオルが下記5種類、各10名様の合計50名様に当たります。
「あそびにいくヨ!!」／「IS〈インフィニット・ストラトス〉」／「えむえむっ!!」／「聖剣の刀鍛冶」／「緋弾のアリア」
2000名様
F賞　人気タイトル4連セット! クリアしおり
大人気4タイトルのイラストクリアしおりが当たります。
「ゼロの使い魔」／「僕は友達が少ない」／「探偵少女は働かない」／「まよチキ!!」
【応募しめきり】
2010年
9/30（木）
当日消印有効
宛先／〒150-0002 渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト（株）メディアファクトリー「面白さ無限大!! 8周年」フェア係
※記入漏れや間違い、応募券がない等の不備があった場合は、応募が無効となりますのでご注意ください。※お預かりする個人情報は、プレゼントの発送以外には使用いたしません。※当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。※プレゼントの発送は国内に限ります。ご了承ください。

【著者】

赤松中学

あかまつ・ちゅうがく

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。「アストロノト！」で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

【イラストレーター】

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。
代表作は『ぷらばん！』『E×E』『夏空カナタ』『天神乱漫』。
小説では『これはゾンビですか？』（富士見書房）の挿絵を担当。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyatsune.blog87.fc2.com/

カバーイラスト／こぶいち　装丁／百足屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

緋弾のアリアVII

Aria the Scarlet Ammo

火と風の円舞（バレット・スリング・ターン）

赤松中学

MF文庫J
あ-05-10

緋弾のアリアVII

赤松中学

MF文庫J
VI
580

9784840134866

ISBN978-4-8401-3486-6
C0193 ¥580E

1920193005806

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

緋弾のアリアVII　火と風の円舞（キャスリング・ターン）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジは、戦闘不能におちいったレキを京都に残し、東京への帰路についていた。アリアとの仲も修復できていない……そんな状態の中、再び『万武（ワンサー）』の魔の手が迫り――。理子の座席に仕掛けられた『加速爆弾（ハリー・アップ）』によって暴走特急と化した列車を舞台に、アリアとキンジの超高速リベンジバトルが始まる！そして舞い降りる、一陣の風――。大スケールアクション＆ラブコメディー第7弾!!

MF文庫J 赤松中学の本

アストロノト！ 1～3 [イラスト：bomi]

緋弾のアリア [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアII 燃える銀氷 [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアIII 焦蜜色の風 [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアIV 堕ちた緋弾 [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアV 序曲の終止線 [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアVI 絶対半径2061 [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアVII 火と風の円舞 [イラスト：こぶいち]

緋弾のアリアII

Aria the Scarlet Ammo

火と風の円舞（キャスリング・ターン）

赤松中学

P11 1弾 ケースE8

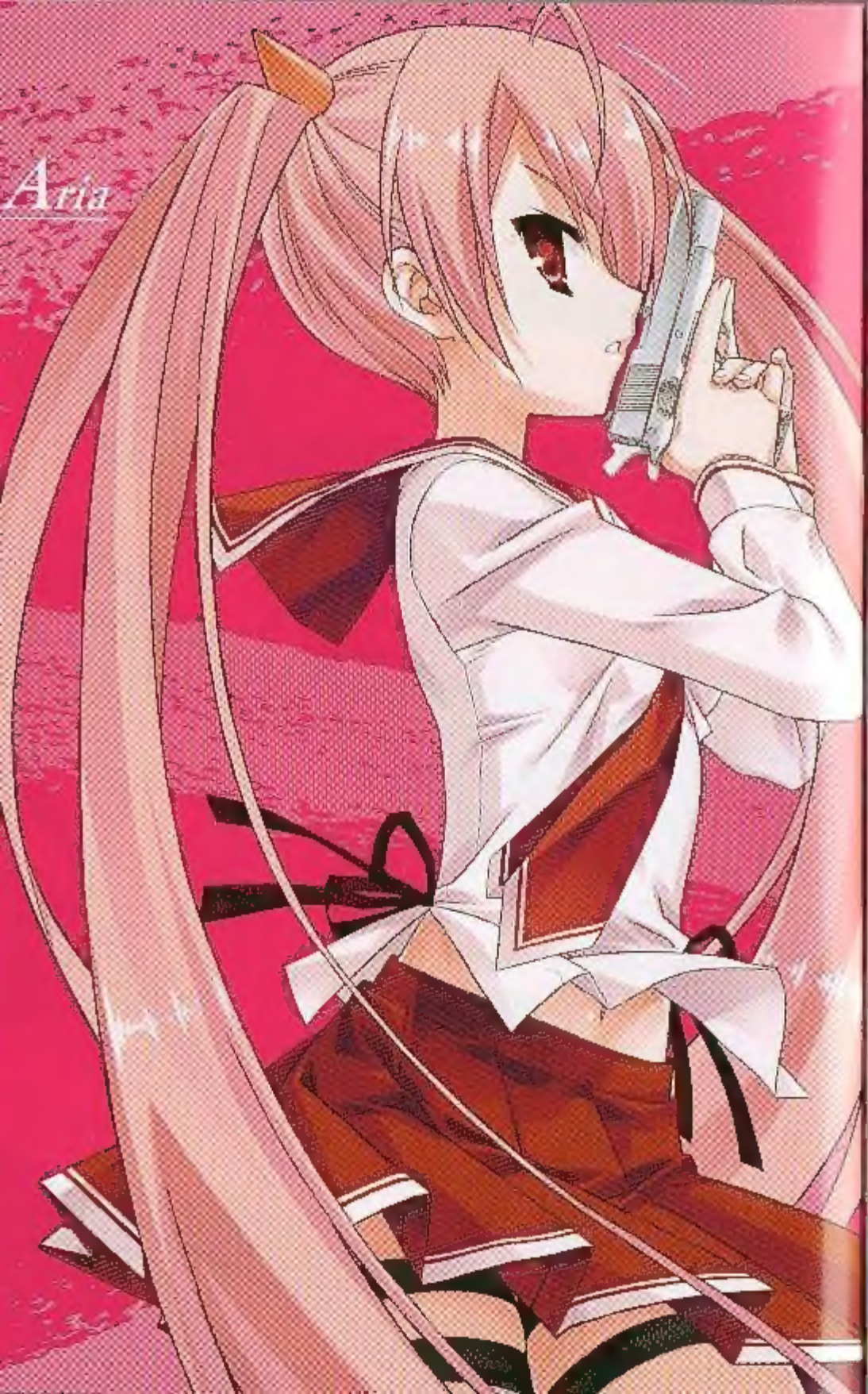
P47 2弾 HURRY UP（ハリー・アップ）

109 3弾 第三の双剣双銃（カドラ）

P193 4弾
チーム・バスカービル

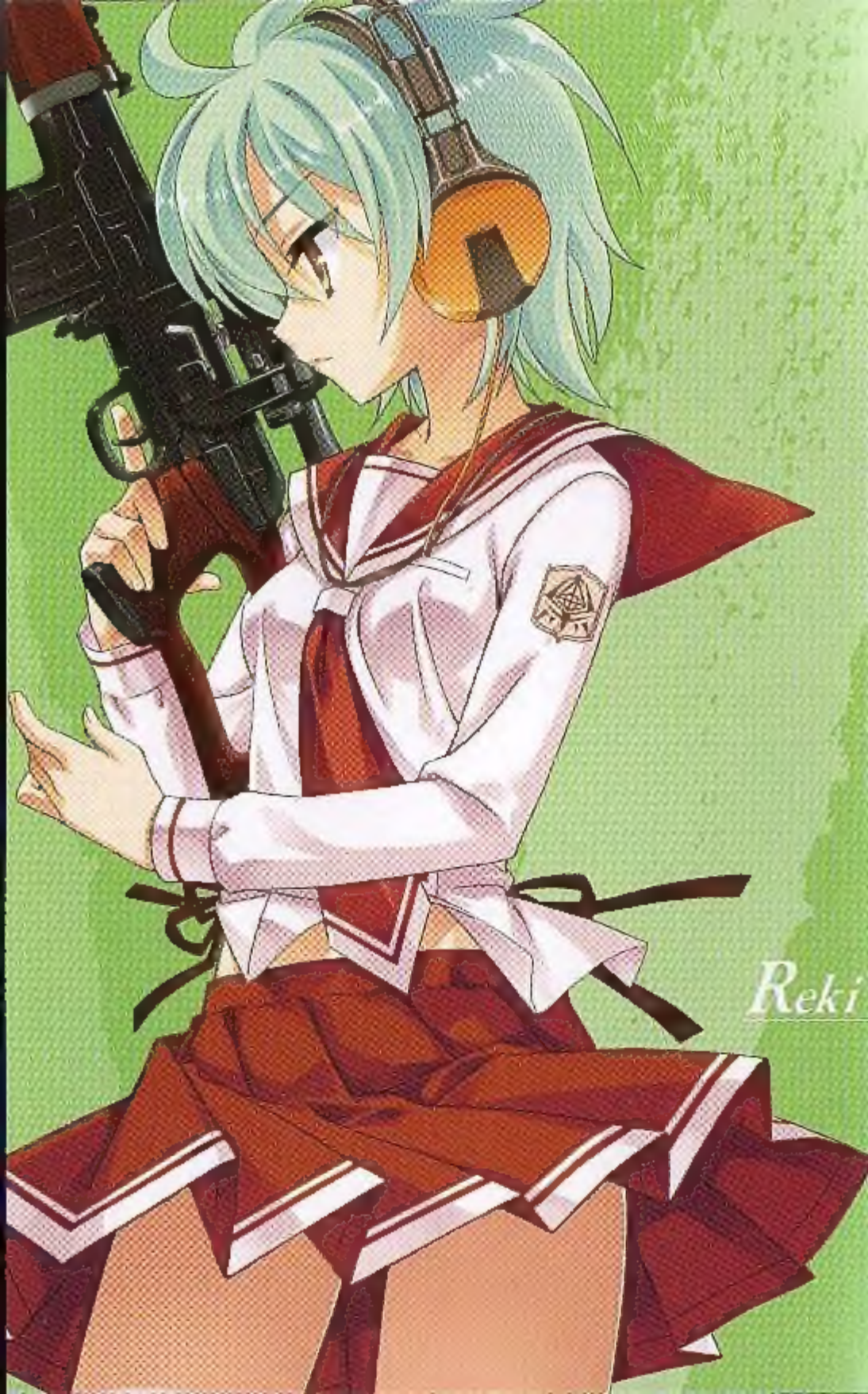
P249 Go For The NEXT!
宣戦会議（バンアトーレ）

Contents


Aria

CaoCao

Kinji


Reki

緋弾のアリアVII
火と風の円舞（キャスリング・ターン）

赤松中学

MF文庫J

口絵・本文イラスト●こぶいち

編集●笹尾明正

1弾　ケースE8

レキ。

いつも無表情、無感情で、無口なレキ。

『風』に命じられるまま、他を守るため――

たった一丁の狙撃銃を頼りに、万能の武人・コユと勇敢に戦ったレキ。

星明かりの下、そのレキが市道に倒れている。

「この傷……銃創ではありませんね」

レキの傍らに片膝をついたのは、白雪の妹・風雪だ。

さっき彼女が口走った事――俄には信じがたいレキの血筋――には、まだ驚きが残っている。

しかし、今はそんな家系の話をしてる場合じゃない。

早くレキを手当てしないと。

「レキは何だか分からない光――見えない爆弾のような物で負傷させられた。ここへ来るまでにも、かなり出血してる。白雪、お前……レキを治す術か何か、使えないのか」

縋るような他の言葉に、救援に来ていた白雪は首を横に振った。

「普段なら、少しは出来るんだけど……いま、私の力は不安定なの」

「……不安定？」

肩を寄せた俺に、風雪が横から解説してくる。

「最近、日本中：いえ、世界中であらゆる超能力が弱まり、成功率が下がる原因不明の現象が起きているのです。星伽でも、特に人の傷を癒す巫術は使わないようにしています。あれは失敗すると、人を殺めることもありますから」

俺は、S研系の話には弱いが……

どうやら白雪たちの術は、ゲームの回復魔法みたいに単純なものじゃないらしいな。

じゃあ、どうしたら——と困惑する俺の足元で、白雪がレキの熱を計る。

「大変、体温もすごく下がってる。すぐ病院に連れていかないと……」

その背後、白雪たちが乗ってきたオープンカー・卑弥呼のそばにもう一台、堅牢そうなセダン——光岡自動車・櫛撫がやって来る。

白雪たちは戦況次第で、この防弾車を退却用に使おうとしていたらしい。

ちょうどいい。コイツでレキを運ばせてもらおう。

だが——

「病院はダメだ。さっきの敵——ココは、狙撃銃が使える」

今、こっちには狙撃手がいない。

後にある病院を狙撃銃で襲われたら、丁も疋も出ないぞ
ビルの多い市街地は、狙撃手にとって最も有利な地形の一つなんだからな。
それでは、星伽分社にレキ様をお連れしましょう。そこに医師をお呼びします」
と言った風雪は、巫女服が血に濡れることも厭わずレキを抱きかかえる。
レキは御輿の後部座席に運び込まれ、それを支えながら俺も隣に同乗した。
携帯を壊されているので、助手席に乗り込んできた白雪に武偵高へ電話をかけてもらう。
俺たちの前方でエンジンを掛けたオープンカー・卑弥呼の助手席には、風雪が鋭い顔で乗り込んだ。まだ和弓を手にしてる。ココの追撃に備えてくれてるんだな。
向こうの運転手とこっちの運転手――どちらも目の覚めるような美人だ――は、辺りを警戒しながら車をスタートさせ、山道を下り始めた。
「キンちゃん、怒がったよ。教務科の宿直室、南郷先生がいるの」
と言う白雪から白い携帯を受け取ると、俺は狙撃科の南郷先生に状況を報告した。
修学旅行中に京都郊外で狙撃を受けたこと。比叡山付近で戦闘になり、レキが負傷したこと。犯人は香港からの留学生、ココを名乗っていること――
無口な南郷は、ずっと黙って俺の話を聞いていたが……
『それはケースE8だ、遠山。教務科は動かない』
最後に低い声で、そう返してきた。

ケースE8。それは「内部犯の可能性が高いので周知は出さない。信用出来る者にのみ連絡を取り、当事者の手で解決せよ」という意味の符丁だ。

南郷の判断は……正しい、のだろう。

犯人は、香港からの留学生に化けて潜入していた。生徒全員に事態を周知してしまうと、敵にも情報が筒抜けになってしまうからな。

それに武偵憲章4条――武偵は自立せよ。武偵高生も2年・3年になれば、自分の敵は自分で倒すのが原則だ。教務科が手助けするのはインターンか、未熟な1年まで――俺も昨日今日入ったワケじゃないから、そういう武偵高の教育方針ぐらいは分かってる。分かってるけど……南郷の冷血漢め。襲われたのはお前の教え子なんだぞ。少しは悩めよ。

『もし非武装の市民が巻き添えになるようなら、改めて連絡しろ。遠山』

――そうなってからじゃ遅えんだよ。

心の中でそう呟きつつ、俺は一礼して南郷との電話を切った。

2台の車は山を下る国道367号線から105号線、106号線へと走っていった。

交差点で停まる度に、風雪は矢を番えた弓を少し持ち上げて辺りを警戒している。

それを横目に見ながら、俺は白雪の携帯から……理子に電話をかけた。

（ココの手口は、部分的に理子と似ていた――）

ボーカロイドによる警告。短機関銃搭載のラジコン、逆に、武偵高駅で理子がハイマキ相手に使った格闘技が中国拳法だったのも気になる。

もしかしたら、アイツはココと何か繋がりがあるのかもしれない。

だが……電話が繋がらない。理子は圏外にいるらしい。

昨日大阪で偶然出くわしたアリアが理子と一緒に行動しているようなことを言っていたので……そっちにも掛けてみるが、アリアも圏外だ。

この一大事に、2人ともどこに居やがるんだ。ソイてないぜ。

（……ココ……）

打つ手無しの俺は、またどこかから俺たちを狙っているかもしれない敵の事を考える。

アイツは何者なんだ。

ヒステリアモード時の俺に匹敵する格闘能力、アリアと互角に戦える拳銃技、レキ並の狙撃術を兼ね備えた超人なんか…　イ・ウーの面子ぐらいしか、心当たりがないぞ。

それなら、と俺は――理子同様イ・ウー出身のジャンヌに電話をかけ直す。

深夜という事もあり寝ていたらしいジャンヌは6コール目で、

『星伽……？　どうした』

それでも比較的ハッキリした声で電話に出てくれた。

「いや、邃う。俺だ。遠山キンジだ。白雪の携帯から電話してる」

『……？　こ、こんな深夜に、なぜお前が白雪の電話を使っているのだ』

訝しむようなその声を無視して、俺は急いで事態を説明し、

「ジャンヌ、イ・ウーにレキ並の腕を持つ狙撃手は居なかったか。格闘も拳銃も出来る、バケモノみたいなヤツだ。名前は――ココ」

そう問いかけるが――

『狙撃手……ココ……？　いや。シャーロックを除けば、レキと互角に撃ち合えるような腕の狙撃手はイ・ウーにはいなかったぞ。パトラなど狙撃銃を扱える者はいたが、それも嗜み程度だったしな』

じゃあ、ココは――

イ・ウーの残党じゃないってのか。

真っ白になった俺の頭に、レキがかつて語ったセリフがリプレイされる。

『――これからの敵は、ただの力比べでは勝てない――』

これからの、敵。

（レキ……）

俺は眠るように気を失ったレキを支えながら、歯ぎしりする。

お前は、俺たちは……何と戦ってるっていうんだ。今。

レキ……

有力な神社には、会社のように本社と支社がある。その支社にあたる神社を分社という。星伽神社も京都に大きな分社を構えていて、俺たちがそこに着いた頃……白みつつある明け方の空からは、生暖かい雨が落ち始めていた。

濡れたアスファルトの匂いがする道から、待機していた寵巫女　白雪や風雪のような正規の星伽巫女に仕える、幼い巫女たちだ　が、レキを担架で運んでいく。俺と白雪、そしてタクシーで駆けつけたジャンヌは、彼女らに続いて神社へと向かう。

掃除の行き届いた石段を一がりつつ……

「遠山……ここはまるで、城のようだな。ここならレキを保護しても安全だろう」

ジャンヌが、周囲に冷静な視線を向けながら言う、

「ああ。俺も来るたびに思うが、星伽神社は本社も分社も普通の神社とちょっと違うんだ。神社のように見せた、ちょっとした砦みたいな構造をしてる」

俺達の眼下には既車殿があって、そこにさっきの車が2台とも入っていくのが見えた。そこには車だけではなく、川崎重工のOH　1……偵察ヘリまで格納されている。

星伽の京都分社、その本殿は杉の生い茂る小山の上に在る。

となると狙撃手は斜め下に陣取るしかなく、神社の内部を撃つ事はできない。

さらに周囲は入口の鳥居以外、全方向が漆喰の塀で武家屋敷のように防御されている。

その鳥居の下には先に到着していた風雪が赤い和鎧を着込み和弓を携えて立っており、守りを固めている。これならココも迂闊に迫撃してはこれないだろう。

「こっちだよ、キンちゃん」

という白雪に導かれ、鳥居をくぐった俺たちは救護殿という和風の診療所みたいな所に案内された。

その一室に運び込まれたレキは、呼び出されて来たらしい女医と何人かのナースにすぐさま取り囲まれた。彼女たちの周囲には、医療器具や薬品が所狭しと並べられている。

「おーおー、やられたなァ」

フチ無しメガネを掛け直しつつレキを迎えた若い女医は――拳銃を提げていた。

どうやら、星伽に呼び出されたプロの衛生武偵らしい。

衛生武偵とは軍隊でいえば衛生兵のようなもので、傷ついた武偵に緊急治療をして命を取る武偵だ。武偵高では、衛生科がその育成をしている

「血算、血液型判定・交差適合試験、生化をチェック――大至急、輸血を開始や」

すぐさまレキの容態をチェックしてナースたちに指示を飛ばした女医は、

「坊や。ここはウチに任せて、お前も休め。死体みたいな顔しとるで」

流し目するように俺の事も見て、そう告げてくる。

「助かるんですか？　レキ　彼女は」

それでもレキから目を離せない俺を落ち着かせるように、白雪がこっちを向いた。
「大丈夫だよキンちゃん、この方は皇伽の嘱託医さんなの。京都でも一番の名医さんだよ。たまにちょっと、変わったことを仰るけど……」
「聞こえたぞー白雪ぃー」
などと言いつつレキの治療をする女医の手つきは、確かに恐ろしく手慣れている。
きっと日常的に、負傷した武偵を診てるんだろうな。
（レキ……）
俺に出来るのは、昨晩レキにした応急処置までだ。
白雪に言われるまでもなく、本格的な手当てはプロに任せた方がいいだろう。
ナースたちの手伝いも、
「私も手伝おう。高度ではないが、汎欧州医療免許・看護助手資格を持っているからな」
そう言ったジャンヌが、持ち込まれていた医療エプロンとナースキャップを身につけて手際よく始めているし――俺の出る幕は、もうないだろう。
そう思った時、何か緊張の糸が切れたような感覚と共に――
（……うっ……）
俺の視界が、ぐらり、と傾いた。
「キンちゃん!?」

「……遠山!?」

白雪とジャンヌの声が……やけに、遠く聞こえる。

どうしたんだ、俺は……?

さっきまで自分が立っていた床板が……

目の前に、ある……?

何かの……音が、聞こえる。

これは、風の音。

乾いた風が、周囲を吹き抜けるような音だ。

その中に立つ俺は、広大な草原と遠い山脈を見ている。

これは多分……夢だろう。

夢である事が自覚できる夢。明晰夢ってやつだ。

乾燥した草原には、何頭かの馬が見える。

その馬たちには、色鮮やかな民族衣装を着た女たちがそれぞれ乗っている。

凛々しい表情の彼女らは、一様に型の古いロシア製の狙撃銃を背負っていて……

その先頭に、他の女たちより絢爛な柄の髪飾りを頭に載せた少女がいる。

俺の視線に早く気付いたらしい彼女が、こっちに振り向く。

その顔は――、

（レキ……？）

「……レキっ……」

……

……目が、覚めた。

風ではなく、雨の音が聞こえている。

ここは……そうだ。星伽の京都分社。

負傷したレキを医者たちに任せた後、俺は自分も疲労で倒れてしまった……らしいな。

布団から上体を起こして周囲を見回すと、俺は広い和室に寝かせられていた事が分かる。

掛け軸の下にある古めかしい時計を見ると、もう正午近いぞ。

（レキは……どうなったんだ）

いつの間にか練絹色の寝間着を着させられていた俺は、枕元にきちんと折りたたまれていた洗濯済みの制服に着替え、障子を開けて外に出た。

鶯張りの廊下では俺を警護してくれていたのか、帯刀した白雪が巫女服でちょこんと正座して……何やらハラハラした顔で、烏居の方を見ていた。

そして振り返って俺に気付くと、

「……キンちゃん！」

ぴょん！　と正座姿勢から飛び上がって起立した。

たゆんっ！

「……！」

し、白雪……あまりにも勢いよくジャンプしたもんだから、質量過剰な胸が一拍遅れて思いっきり揺れてたぞ、いま。

……寝起きにいきなり、すごい光景を直視してしまったな。

相変わらず、高校生離れしたサイズだ。理子の1・5倍、レキの3倍、アリアの6倍はあるぞ。とはいえ今のは驚愕の方が大きかったから、ヒステリア的には大丈夫そうだ。

などと考えていると——白雪は俺の無事を確かめるように、さすりさすり、涙目で、慌ただしくこっちの腕や頭を撫でさすってきた。

「キンちゃん、キンちゃん、急に倒れちゃったから私、心臓が止まるかと思った……！」

「あ、ああ。おかげさまで、もう大丈夫だ。俺は少し疲れていただけだからな。それよりレキはどうなった」

と、白雪を微妙に押し退けつつ尋ねると……

「レキさんは——　命を取り留めたよ。でも絶対安静にしてないとダメみたいなの。まだ意識も戻ってないし……これ以上ムリしたら、本当に命が危ないところだったみたい」

「そうか……」

「キンちゃんも、まだムリはしないで。お布団で休んでて。何かちょっと、鳥居の辺りが危ないみたいだし」

と、白雪は俺を守るように鳥居の方を向いた。

「鳥居……？」

「うん。ここからはよく見えないけど……さっきから、動物か何かがいるみたい」

と言う白雪の肩越しに鳥居の方を見ると、小雨の中――風雪が和弓を片手で杖のように持ち、シッシッと何かを追い払おうとしている。

……グルル……

「――」

石段の方から聞こえてきたその唸り声に、俺は裸足のまま飛び出した。

雨の中、玉砂利を蹴立てて境内を走り、制止するような白雪と風雪の声を背に鳥居から飛び出すと――

「……ハイマキ！」

ズタボロになった銀狼が、石段の縁に伏せていた。

雨に打たれるハイマキは、見るも無惨な重傷を負っている。ココの猟犬どもに噛まれ、ツメで引き裂かれ、純白だった毛並みは血と泥でボロ雑巾のように汚れていた。

「ハイマキ……お前……！」

俺は転がるように石段を駆け降り、ハイマキを抱きかかえる。

ハイマキは昨晩の狙撃戦で、俺とレキを逃がすために自らを囮にし――

何十頭もの猟犬に、たった一匹で挑んでいた。

あの多勢に無勢では生還できないかと思っていたが、生き延びていたのか。

ハイマキは猟犬たちを追い払った後、レキの血の匂いや、それが途切れた所からは車のタイヤの匂いを追うなどしてここを見つけ出したのだろう。

「よくやったぞ、ハイマキ。レキはまだ生きてる。お前のお陰だ……！」

と、俺が背中に手を当ててやると――

ハイマキは安心したように、低くノドを鳴らすのだった。

救護殿に運ばれたハイマキは、包帯を巻かれて眠るレキを見つけると枕元で丸くなり、頑として動かなくなった。

仕方なしに、女医とナースたちはその場でハイマキの手当てを始める。

その手当てが一段落するまで、俺はずっとそこでそれを見守っていたが――

「キンちゃん……お腹、すいてませんか？　お食事を用意したんだけど……」

と、巫女服の上にフリルつきのエプロンを重ねた白雪に声をかけられ、自分がすっかり

が腹なこと に気がついた。

そういえば、昨日の夜からカロリーメイトを1／2箱しか食べてなかった。

このままではまた倒れそうだった俺は、白雪に案内されつつ、神社内を興味深そうに歩き回っていたジャンヌと合流し、3人で膳殿という料亭みたいな場所へ向かった。

星伽の京都分社は広く、幾つもある建物が屋根つきの渡り廊下で繋がっている。

そこを渡っていくと、時々現れる龍巫女たちは俺を見るなり廊下の端に下座して深々とおかっぱ頭を下げてくる。

なんか……大名行列みたいだな。

そういえば星伽は徹底した男子禁制の神社で、なぜか遠山家の男だけが特例で入れる事になっている。そのせいか、男だってだけで妙に特別扱いされて……アウェー感があるぞ。

（そんなに畏まる必要、無いのに……）

などと歯がゆい思いをしながら膳殿に入ると、そこには俺とジャンヌ用に桐の座椅子が用意されていた。対面には白雪の席もある。

席に着くと、男である俺と——たぶん初の、外国からの客人ジャンヌを迎えるとあって、エプロンをつけた寵巫女たちが恭しいムードで御膳や漆塗りの丸湯桶を運んできた。

膳に並べられているのは、鮒・サザエ・イカ素麺のお造り、鱒の落とし、イクラの寿司、湯葉の八幡巻き、京野菜のあんかけ、松茸の炭火焼、秋の色ごはん、黒豆

「ごめんねキンちゃん。これ、あり合わせなんだけど。栄養はちゃんと摂れると思うの。沢山食べて、元気になってね」

こ、これであり合わせかよ。星伽は金持ちだなあ。

ていうかこの食事、俺のだけやたら大盛りのように見えるんだが……

「……ありがとう白雪、十分すぎるぐらいだ　それとまだ謝ってなかったが　悪かったないきなりケガ人を運び込むことになっちまって」

「ううん。いいの。困った時はいつでも頼ってください」

目を優しく和ませて微笑む白雪に頷きつつも……

俺は今の話でまたレキが心配になってきて、救護殿の方を見てしまう

「――心配するな遠山。私も手伝いながら見ていたが、あの女医は有能だったぞ。治療は適切だった。安静にさえしていれば、きっとすぐレキも意識を取り戻す」

と言ったジャンヌは綺麗に正座して、十字を切ってから御膳を食べ始めた。

横目に見れば、ちゃんと箸も使えてるな。ヘタな日本人より上手だぞ。

その横で俺も料理に手をつけたのを確認してから、白雪は膳に手を合わせ――ようやく自分も箸を手に取った。

「でも……どうしてキンちゃんとレキさんが狙われたの？」

「結局の所は、俺にも分からないんだ」

「い、いったか狙われて　もう片方も　緒に狙われたって事なのかな……　あれ……？　一緒に……　緒に……？　あの……どうしてキンちゃんとレキさんが一緒にいたの？」

「あー……」

俺は少し口ごもる。

これは……説明が難しいな。

うまく伝えないと、白雪がつむじを曲げそうだ。

「――遠山はレキと暮らしていたのだ。今月の頭から」

サラッ、と横からジャンヌが解説を加えた。

ピタッ、と、それを聞いた白雪の箸が止まる。

「お、おいジャンヌっ」

「仕方がないだろう。こうして昼伽も巻き込んでしまったのだ。情報は共有しなければ」

バカ真面目なジャンヌに、俺は耳打ちする。

「きょ、共有の仕方に気をつけろって。白雪は取り扱い注意なんだ。余計な事を言うな」

「余計な事……？　ふむ。では要点だけ話そう。遠山とレキは修学旅行中も一緒に行動し、同じ宿に泊まっていたのだ。狙撃を受けた宿の女主人によれば、2人で同じ風呂に入り、同じ布団で寝ていたらしい。そこを襲われたのだ。つまり、常に2人で行動していたため、2人まとめて襲われた。これでいいか」

「いいわけねえだろ！」

――こいつめ……！

ジャンヌ。情報科の生徒だけあって、昨夜のうちに銃撃を受けた旅館の情報を探り当て、女将さんに電話でもしていたらしいな。

よ、余計な情報収集だけは素早くしやがって。ていうか、部、間違ってるし。

「……」

そお――っ……

と、白雪の方を見ると……

さっきの姿勢のまま、固まってるぞ。箸に黒豆をつまんだまま。

マバタキすらしていない。

こ、怖っ！

「ジャンヌ、お前、ちょっと喋るなっ。俺が説明する」

「なぜだ。私は事実を伝えたまでだ」

「だから伝え方に問題があるんだよ！」

「分かりにくかったか？　なら、絵に描いて示してやろうか」

「いや、絵はいい。絵はよせ。そうじゃなくて、お前は事実って言うが――」

「事実は事実だ」

ぴしゃりー　と言うKYジャンヌの向かいで……
ぐしゃり！　という音が、白雪の箸から上がった。
青ざめながら、振り向くと……
白雪の箸の先で、つままれていた黒豆が潰されるように切断されている。
「事実……既成事実……既成事実……さ、先を越されちゃったね……レキに。あは、あは……あ、あんまり目立たない子だったから油断してたね白雪――そうだね。油断してたね――でもあの子が伏兵だなんて気付かなかったね白雪――うん。レキは狙撃手だけに伏兵だったんだね――うまいこと言ってる場合じゃないよ白雪――そうだね――」
ま、マズい。
白雪が、壊れ気味の声で独り言を始めたぞ。一人二役で。
しかもなんか急にレキを呼び捨てにしてるし。
「こ、こら白雪。現実に戻ってこい。言っておくが、俺はレキに狙撃拘禁されてたんだ。それで『リマ症候群』を引き起こすために、仕方なくだな……」
と、俺が何となくムダと悟りつつも説明をしようとしていると――
失礼します、という小声と共に奥の襖が開いた。
廊下に正座し、姉と同じく流麗な黒髪をさらりと流して顔を上げたのは……風雪だ。
い、いいぞ。そのつもりはないだろうが、ナイスアシストだ。風雪。

そっちに会話を預けて、白雪の意識を移させてもらうぞ
「か、風雪　外の様子はどうだ。」
今の話をうやむやにするチャンスとばかりに、俺はキリッとした顔で問いかける。
「――今のところ異常はありません。現在、鳥居の警護は龍巫女たちに任せています」
見れば、風雪の巫女服は真新しいものに着替えられていた。
どうやら風呂にも入ってきたらしい。仄かなシャンプーの香りもする。
どうやら白雪に用があったらしい風雪は俺に一礼してから姉の横に正座すると……何か、小声で耳打ちをした。
それまで目から光を失っていた白雪が……ハノ、と我に返るのが分かった。
「……やはり、璃璃の……間違いないのですね？」
聞いた事がよほど重要だったらしく、白雪はすっかり正気に戻ったというカンジだ。
こくり、と無表情に頷いた風雪の前で、白雪はパチンと箸を置き――
「ご、ゴメンねキンちゃん。私、ちょっとレキさんの所へ――失礼します。ごちそうさまでした」
半分も食べていない御膳を放って、いそいそと部屋の奥に消えていくのだった。
なんだか不安になって早々に食事を済ませた俺とジャンヌが救護殿へ引き返すと、そこ

では布団に寝かされたレキを龍巫女たちが見守っていた。
何となく……レキを見守る彼女らの態度が、ただのケガ人に接する態度じゃなくなっているカンジがする。なんだかもっと偉い、賢人を看護しているような……
先ほど膳殿を離れた白雪の姿も、そんな龍巫女たちの中にあった。
風雪と揃って正座し、レキを見下ろすその表情は固い。
そして、喩えようもなく真剣だ。
「……キンちゃん。少し、お話ししなきゃいけないことがあります。キンちゃんは聞きたがってなかったけど……許してください」
「聞きたがってなかった……？　何の話だ」
「色金の事です」
――イロカネ。
シャーロック・ホームズが長年研究していた物質。
使い方次第ではただの人間を強力な超能力者に変える――
アリアの体内にも撃ち込まれている、あの超常の金属のことか。
「先月キンちゃんが入院してた時、私、アリアから聞いたの。イ・ウーで何があったのか。だから……キンちゃんも知っているよね。色金というものの存在は」
シリアスな面持ちで、白雪が俺を見上げてくる。

俺は世……、小さく笑い？

「許せる限界はあるんだけど……私たち星伽の巫女は、色金の事を知っています」

それは……分かっていた。

シャーロックが、イ・ウーで言っていたのだ。

――イロカネを保有する結社はイ・ウーだけではない――

あのとき列挙されていた組織や機関の名前の中に、星伽の名前もあったからな。

だが、そのイロカネとレキに何の関係があるというんだ。

「理解し辛い事かもしれないけど、色金は人の心と通じる金属なの。そして色金と通じることのできる心は、決まっているんです」

「それは知ってる。シャーロックが言ってたが、ヒヒイロカネ――緋弾を覚醒させられる人格には、限りがあるんだろ。たしか、子供っぽくて、プライドの高い人格……」

「うん。でも、それは緋緋色金の場合で……色金には、いくつか種類があるの。その中のつが……瑠璃色金」

……何……？

「リリイロカネ……？　レキが、それを持ってるのか」

「いいえ。失礼ながら先ほど、お身体を検分させていただきましたが――違います」

風雪が首を横に振る。

「レキ様は恐らく、郷里で瑠璃色金のそばで永い時を過ごされたのでしょう。瑠璃色金と心を通じる、いわば、かの地の巫女のような存在として」

レキが……色金のそばに……？

どういうことだ。

俺が眉を寄せると、風雪は傍らに置いていた桐の小箱から小さな巻物を取り出した。

しゅらり、と広げられた巻物には、漢文のような文字がビッシリ書いてある。

「これは星伽史西聞、星伽神社に伝わる史書ですが――ここに、瑠璃色金についての記述があります。『瑠璃色金は穏やかにして、その力、無なり。人の心を映い、人心が災厄をもたらすとし、ウルスを威迫す。瑠璃色金に敬服せしウルスは、代々の姫に己の心を封じさせ、瑠璃色金への心贄とした』とあるのです」

「……ウルス……」

全体的にはよく分からないながらも、その単語には聞き覚えがある。

レキが俺を狙撃拘禁し始めた晩に、言っていた。

『そうすれば、キンジさんもウルスになれますから』

それは確か、家族という意味の言葉だったハズだ。

「――やはり、ウルスだったか」

横からそう言ったのは、今の話を腕組みしつつ聞いていたジャンヌだった。

[illegible]

普段下れきみの目つきを少し上りに上げて、白雪かジャンヌに視線を投げる

「私は遠山に頼まれて、レキについて調べていたからな。実を言うと、確証は無かったが初めから心当たりはあった。イロカネを保有する者同士、イ・ウーとウルスは無関係ではなかったからな」

ジャンヌは銀髪の下にある切れ長の碧眼を一つ瞬きさせて――

「通信科の中空知による音響分析で、レキの出身地は幾つかに絞られていた。その一つを居住地とするのが――ウルス族」

ウルス族……？

「……どこの部族なんだ、それは。聞いた事がないぞ」

訝しむように言った俺に、ジャンヌは小さく頷くような仕草をした。

「それはそうだろう。ウルス族はロシアとモンゴルの国境付近、バイカル湖南方の高原に隠れ住む少数民族だからな。だが、彼女らの祖先の名は遠山も聞いた事があるハズだ」

ジャンヌはその青い眼をレキに落としつつ、続ける。

「その弓と矢でアジアを席巻した、蒙古の帝王――チンギス・ハン。ウルス族はその戦闘技術を色濃く受け継いだ、彼の末裔の一族なのだ」

レキを救出した時、同じ事を言っていた風雪の方を見ると――

特に、否定するような素振りは見せない
やっぱり……マジだったのかよ。
「かつてウルス族は優れたりや長銃の腕を恐れられた、傭兵の民だった。しかし、次第にその数を減らし……5年前……まあ、これももう打ち明けていいだろう。シャーロックがイロカネ絡みの交渉をしに訪れた時には、もう47人しか生き残りがいなかった。それも、その全員が女だったらしい」
それを聞いた俺の脳裏に、レキの言葉がよぎる。
――『私たちウルスの47女』――
あれは、もうウルス族が47人しかいないという意味だったのか。
だから……レキには……名字すら、無かったのか。
いや。無かったというより、必要なかったのだ。
たった47人しかいない、滅びゆく少数民族の中では。
「ウルスは閉鎖的な民族だったからな。同族の血が濃くなりすぎて遺伝子に異常をきたし、女しか産まれなくなったのかもしれない」
レキが意識を失う間際に言っていた『強い男性をウルスに入れる事を命じられていた』というのも……もしかしたら、その辺が理由だったのかもしれない。
だが――

「い　　い　　いか
風呂やシャンヌの話に、俺は初めから感じていた違和感を打ち明けることにした
「何だ」
「いきなりレキがそんな得体の知れない民族だって言われても、腑に落ちないぞ。レキの見た目はこんなに日本人っぽいじゃないか。目つきとか、肌の色とか…　ちゃんと聞いた事は無いが、この髪は染めてるんだろうしな」
俺は眠るレキの……包帯を巻かれた額の上、寵巫女たちが洗った髪を示した。
いつ誰と組むか分からない一匹狼の武偵は、仲間に自分の専門を一目で識別させるために髪を染める事がよくある。その際、狙撃手はシモヘイヘ・カラーという青みがかった色に染めるのが習わしだ。
「ちょっと状況は違うけど、アリアの髪が赤みがかってるのと同じで……レキさんの髪は、瑠璃色金と何年も一緒にいた影響だと思うよ。あと見た日が日本人らしいのは、日本人の血を引いてるからなの」
ジャンヌに代わって答えた白雪に、俺は振り向く。
「日本人の、血……？」
「チンギス・ハンは――千年ぐらい前に日本から大陸に渡った九郎判官――源義経なの。当時の蒙古帝国では、彼は源義経って読まれてたんだよ。それが訛って、チンギス・ハン

になったの」

……お、おいおい……

「そ、そういう説は聞いたことがあるけどな。あれは用心モノの作り話なんだろ？」

「作り話、っていう事にしたの。江戸時代にバレちゃったから、後で足伽が……史学者の先生とかにお願いして……」

「足伽が？」

「うん。あのね、足伽神社は当時、源義経が大陸に渡るのをお手伝いしたの。ナイショで、津軽から船を出させて……」

白雪は胸の前で左右の人差し指をつんつんさせながら、上目遣いにこっちを見る。

歴史的な大事件を語ってるのに、イタズラがバレた子供みたいな仕草だな。

まあ、その辺のズレ方は……白雪らしいといえば白雪らしいんだが、

「当時の足伽神社は、政治的に複雑な立場にあったのですが……義経様が大陸に作られた帝国を正式な――かの地の国家として承認し、その頃から色金についての情報を遣り取りしてきたのです。蕾姫という名前は、その純血姫が代々使ってきた名前の一つです」

風雪は、さっきの巻物の中にある『蕾姫』という漢字を示してみせる。

「よく知ってるもんだな、風雪は……海外のお姫様の名前まで」

「風雪は、海外の教会や寺院との外交を担当する巫女なの。私は、国内の神社との内政を

[illegible]レキさんの名[illegible]ルスの事か思い浮かばなくて

そばに居たのに気づかなかった事を悔いているのか、白雪は、しゅん……と俯いている。

「気を落とすな白雪。レキが源氏の末裔で、どこかの姫様だったなんて――思いつくワケがない。俺も、すぐには飲み込めないよ」

だが、言われてみれば確かに、レキの日常の振る舞いには武士に通じるものがあったな、狙撃銃を抱き、座って眠る習慣も付みたいだと思ったものだが――

実際、侍の末裔だったわけか。

救護殿の縁側に出ると――雨は上がっており、日差しが戻っていた

撫子の植えられた中庭では、今まで葉っぱの裏で雨宿りしていたらしいホトギアゲハがヒラヒラと何匹か舞っている

ざわつく気持ちが……少しだけ宥められるな。

俺は寵巫女の　人に頼んで金属ブランや工具を持ってきてもらい、縁側に座って――

背後の室内で眠るレキの、狙撃銃を整備してやっている。

弾倉を外すと、レキが制服のポケットに入れていた武偵弾とは別に……通常弾が6発、入っていた。あれだけ長い時間を戦ったのに、こんなに弾が余るのか。

すぐ弾切れを起こす俺たち拳銃手とは、やっぱり全く違うんだな。狙撃手ってのは。

広げた和布の上に並べてみると……レキが自室で丹念に選び抜いた銃弾はどれもコピーしたCGみたいに均一で、傷一つ無く輝いている。まるで宝石みたいだ。

「――美しいものだな。日本の魔女は、蝶を使い魔にしているのか」

という声に顔を上げると、ジャンヌが縁側にやってきていた。

「遠山。あまり役に立てなかったが、私は間もなく京都を発つ。神崎かなえの弁護士と、裁判の事前打ち合わせがあるからな」

手首の内側につけた腕時計を見ながら、ジャンヌが済まなさそうに言う。

――裁判。

イ・ウーに濡れ衣を着させられたアリアの母親、神崎かなえさんの裁判は今、準期日間整理手続という再審前の準備段階を迎えている。

かなえさんの弁護士はまず長野のレベル5拘置所に拘留されている小夜鳴――ブラドに接見し、次に、裁判で証言者となるジャンヌと打ち合わせをする予定になっていた。

「遠山。さっきのお前たちの会話で分からない単語があった。ゲンジとは、何だ？」

「源氏ってのは……まあ、色々いるんだけどな。有名なのは約千年前の日本に武家政権を作った侍の一族だ」

あまり日本史の成績が良くない俺が、ドラグノフを整備しながらそう言うと――

「ウルス族のルーツは、サムライだったのか」

レキの背後のレキを見ながら、何かを思い出したような顔で

「遠山、お前は、先月レキに結婚を無理強いされたような事を言っていたな」

「……ああ」

「サムライの文化では――女は男の所有物という建前があったらしいな」

そう言われて、俺はレキの発言や行動を思い出す。

自分を俺の所有物だと言ったり、俺の言う事をなんでも聞いたり……

レキの婚約の詔、だったか。あれも、妙に男尊女卑な内容だったな。そういえば。

「チンギス＝ハンの時代……蒙古帝国にも似た文化があったのだ。当時の蒙古の文化では、女は『財宝』の一つ、金銀財宝のように掠奪してくるものだった」

「掠奪……」

「女を攫い、自分の妻とする――文字通りの『掠奪婚』の風習があったのだ。かの地には現代にもその風習の名残があって、結婚式の際に女を攫う真似事をする地域さえある」

「……そ、それって……」

俺が少し頬を引きつらせると、ジャンヌは小さく頷いてみせた。

「気づいたようだな　お前はレキにそれをされたのだろう。遠山」

「お、おい……でもな、レキは女だ。男と女が逆だろ」

「長い時間の中で、男女の文化が融合・転化する事は珍しくない。たとえばその腕時計も、

19世紀前半まではヨーロッパの貴婦人しか身につけないものだったのだぞ」

俺の腕時計を示すように見て、ジャンヌが続ける。

「特に、ウルス族にはもう女しかいないからな。優秀な異性をどこかから掠奪して子孫を残そうとする文化を女が継承していても、無理はない」

そういう……ことだったのかよ。

「レキは毛色は違えど、やはり現代に生き残るサムライの一種なのだろう」

自分も武士みたいな性格のジャンヌはそう言うと

何かを警告するような眼差しで、座る俺を見下ろしてきた。

「最後に、一つ聞くが……昨日お前たちが追い詰められた時、レキは何か非常識な行動を取ろうとはしなかったか」

「非常識？」

「たとえば、銃で自分を撃とうとしたりだ」

そう言われた俺は、顔を上げる。

「よく……分かったな。そうだ。レキは負傷して、追い詰められた時……武偵弾を使って自爆しようとした。自分にはもう逃げる力が無いから置いていけ、なんて言ってな」

「やはりな」

そう言うとジャンヌは、俺が布の上に並べていた銃弾に視線を移した。

ウルス族は、同じ名誉の死を選ぶ時、最後の銃弾――残りが一発だけになって、それを使っても活路が見出せないほどに追い詰められた時、自分が仕人の足手まといになったと判断した時、その弾で自決するのだ」

「……っ……」

「サムライは短刀で腹を切るが、ウルス族は自分を射つ。それを、仕人に殉じた名誉の死としているのだ」

ジャンヌの語る話に……俺は、レキを振り返った。

「彼女らは一発の銃弾のように、目的に向かって一途に生きる。そして戦い続けるのだ。最後の銃弾で――己の人生を、閉じるまで。刀に殉じた、古のサムライ達と同じようにな。遠山、レキはそういう女なのだ。気をつけておけ」

そう言い残すと、ジャンヌは縁側から足伽の運転手が待つ渡り廊下の方へ去っていった。

縁側に一人残された俺は、ドラグノフを抱え……レキに背を向け直す。

（レキ……）

俺も、遠山家の末裔。一応の一心、侍の子孫だけどな。

最後の銃弾……だ？

ダメだろう。そんなの。

「レキ」

俺は狙撃銃の弾を一つ握りしめながら、背後で眠るレキに語りかけていた。

――私は一発の銃弾――

いつもレキが口走っていた、その言葉。

「お前は、銃弾なんかじゃない」

一発の銃弾として、ただ目的のためにまっすぐ生き――銃弾のまま、死ぬなんて。

そんなの、あんまりじゃねえか。

「お前は人間なんだ」

当たり前の事を、俺は噛んで含むように語った。眠るレキに。

お前はまだ、自我をハッキリと持てていない……ほんの子供みたいな女の子なんだ。

レキ。お前はどこかで『風』に洗脳されて、ただ目標のために生きろと言われ、自分で考えることを禁じられ、子供のまま時間を止められた。

そして、無感情な銃弾のようにまっすぐ生きてきた。それこそ、ロボットのように。

だけどな……レキ。

お前の中にも、人間らしさはあったんだ。

あの夜の山での狙撃戦に敗れたお前が、最後に見せてくれた笑顔は――

人間の女の子が見せる、愛らしい、本物の笑顔だったんだ。

「お前が……そういうの、ニガテだって事は分かってる。だから、今すぐ人間らしく感情

豊かに振る舞えるはずもない。だけど、もう、自分を銃弾と呼ぶのはよそう。どうせ聞こえちゃいないだろう。

レキは眠っているのだから。

でも、俺は背中越しに言葉を続けていた。そうする事を抑えきれなかった。

「レキは、レキとして……人として、もっと幸せになれ。幸せになるべきなんだ。今まで……人としての幸せを禁じられてきた分。取り返せよ。自分の人生を」

――お前は、俺との2週間を『良い日々だった』って言ってくれたよな。

俺にとっても、お前との2週間は思ってた以上に面白かったんだぜ。

台場でラーメンの早食いに挑戦したり、ハイマキにエサの魚肉ソーセージを食わせたり、シャトン・コールだったっけか？　大阪でネコ集め競争をしたり、意外と色々あったしな。

『風』様の命令には無かった事ばかりだったかもしれないけど……そういう事が、人間としての幸せだったんじゃないか？

俺にも、よく分からないけど……なんか、何となく、そんな気がするんだよ。

「だからお前が望むなら、そういう事……そのぐらいなら、付き合ってやるよ」

女は苦手だ。できればあまり、一緒に過ごしたくはない。

でも、レキ。お前は……

お前は……認めてくれたからな。俺を。忌々しいヒステリアモード抜きでも。

まあ、お前の買いかぶりとは思うが……
それは俺にとって、けっこう大きい事だったんだぜ。
――私は一発の銃弾――
レキ。
――銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない――
もう、それはやめろ。
お前の『風』様がどんなに偉いのか知らねえけどな。
本当に偉いのは、自分で自分の道を考えて生きる人間なんだ。
そうやって『風』に全てを預けるより、自分で考えて生きるってのは、難しいことかもしれない。
――ただ、目的に向かって飛ぶだけ――
でもそれは、もうやめるんだ。なぜなら、
「お前は、銃弾じゃない」
人間なんだから。

2弾　HURRY UP

本当は星伽の分社でレキが目覚めるまで警護してやりたかったが、間もなく神崎かなえさんの裁判が再開される。それに備えて、俺たちイ・ウーと戦った面々は近々弁護士との事前打ち合わせをする可能性が不確定ながらもそれぞれあった。

なのでその日の夕方、レキの看護は医者と風雪たちに任せ……

俺と白雪は山陽・東海道新幹線のぞみ２４６号、東京行きに乗った。

「16号車15列D・E……あっ、ここ。一番前だよキンちゃん。キンちゃんは通路側が好きだったよね。はい。こっちの券、どうぞ」

通路側の指定席キップを俺に手渡して窓側の席に着く白雪は――星伽を出てから、よく話しかけてくれている。レキが心配で言葉少なな俺を、励まそうとしてるらしい。

自分も心中穏やかじゃないだろうに、白雪はしっかり者だよな。

いつも他人に対する気配り・気遣いを忘れない、いいヤツだよ。

「白雪、ありがとな」

と、通路側の席に着くと――

「えっ。ううん、いいの。私――新幹線って乗るの初めてだし、景色とか見てみたいから

窓側がよかったの。逆に私こそ……キンちゃんのお供じゃなかったら、また車で移動するところだったし……ありがとうございますっ」

俺に一言お礼を言われただけで、白雪は赤くなってぱたぱた手を振っている。

努めて明るく振る舞おうとしていた白雪が急に素に戻ったので、俺がフッと小さく笑うと――白雪が、わぁー、という表情をした。

そして、ぱしぃ！　自分の表情筋を押さえるためにか両手を両頬にあて……お辞儀するように顔を自分の膝近くまで伏せ、悶えるように身をよじり、窓の方を向いた。

な……何やってんの……？

「あぁ……至近距離で『キンちゃん笑い』してくれたよぉ……かっこいい……かっこいい、かっこいいよぉ……！」

心の声らしき声を漏らしつつの白雪は、埼子語でいう所の『何かに激しく萌えた顔』をしてる。キャーって感じに。

その顔を見られたくなかったのか、まあ、窓に映ってしっかり見えてるけどな。

ていうか『キンちゃん笑い』って何だ？　古いコメディアンのネタ・欽ちゃん走りなら武藤がたまにやって女子を引かせてるが……

などと考えながら、俺は動き始めた新幹線の中で座席を少しリクライニングさせた。

一息つくと、一連の事件のせいで体内時計が狂っているのか……

また、眠くなってきたな
新幹線の窓には妙にゆっくり流れる外の景色を見ていると……ウト、ウト……と…
……
……
……
「お休みのところ――失礼します」
……っ。
いけね。車掌さんが来た。
いつの間にか、マジ寝しちまってたらしいな。
「あ……はい」
乗車券を見せようとする俺だが、なぜか制帽の下に脂汗をかいた車掌さんは……頭上の荷物ラックと座席下を素早くチェックして、そそくさと去っていってしまった。
検札に来たんじゃなかったらしい。
何をしに来たんだろう。何かを探しているような手つきだったが……まあいいか。
時計を見ると、もう発車してから30分以上経っていた。
ふと隣を見れば、白雪も姿勢正しくシートについたまま眠ってる。
深く眠っているのか、車掌が来ても目覚めなかったらしい。

無理もないな。俺は星伽で少し寝てたけど、白雪は夜通しずっとレキや俺の番をしてたワケだからな。

元が美人なので寝顔も美人な白雪は……ん……？

「……ふふ、かわいいねぇ……むにゃ……」

えらく幸せそうな顔で、何か寝言を言ってるぞ。

「……目元はキンちゃんにソックリ……あっ、でも鼻は私似だね……うふふ……」

……。

白雪の夢の中で、何が起きているのか。というか白雪の夢世界で、それ以前に俺が、体何をやらかしたのか。諸々、想像するだに恐ろしいな。

（……深くは考えないようにしよう……）

と、俺は白雪の寝顔に背を向け、そっと席を立った。

仮眠を取ったから疲れは取れたが、まだ寝起きで頭がボンヤリしているな。

（ちょっと洗面室に行って、顔でも洗ってくるか）

自動ドアをくぐり、16号車の先頭……運転室の手前にある洗面室に入ろうとする。

だが……

あれ。扉が開かない。

溶接したみたいに、ビクともしないぞ。なんだこれ。

トイレではないので小窓から中が覗けるんだが……中に誰もいないのに。
（どうやら、扉が壊れてるらしいな）
となると後ろの中間にある洗面室を使うしかないので、俺は15号車に向かって歩いた。
ちなみに東京に帰る東海道新幹線は行きと逆で、16号車が先頭、1号車が最後尾になる。
車内はそんなに込んでないが、歩きながら見れば――右2席、左3席と並んだシートに、いろんなタイプの乗客が乗っているな。
トランプをやっている子供たち。その保護者と思われる、お腹の大きな妊婦さん。
出張中のサラリーマン2人組は、マグネット式のチェス盤でチェスの対戦中。
チェスのルールは昔カナに習って知っていたので、通りすがりに覗き見ると……片方のプレイヤーが、ちょうど特殊手「キャスリング」をしている所だった。
キングとルークをすり替えるように動かす、「キャスリング」は――好きな手だ。
駒と駒が踊るようにクルリと入れ替わるから、見ていても楽しいんだよな。
（カナは強かったよな、一度も勝てた事がなかったよ）
などと昔を思い出しながら、俺は更に通路を進んで行く。
あっ……座席を思いっ切り後ろに倒して酒を飲んでるあの男、タレントの鷲尾習だぞ。
俳優や歌手もやってるが、それよりガラの悪さで有名な人物だ。
3人掛けのシートの中央で、左右に派手な女を連れた鷲尾は――サングラスの下の目が

俺と合うと、『気付きやがったか』という顔で舌打ちした。

（……何だよ。別に騒ぎ立てたりしねーよ）

俺は不愉快な気分でそこを通過し……直前を後ろへと歩いていく。

ンガァー、ゴォ……と、イビキをかいてる人男がいると思ったら、車輌科の武藤剛気だ。

ああ、同じ武偵として恥ずかしい。隣に誰も座ってないのがせめてもの救いだな。

と、俺は赤の他人のフリをしつつそこを通過して……通りかかった6号車の最後部では、なぜか2人掛けの席をターンさせて、こっちに背を向けているシートがあった。

そのシートの上部には、ぴょこん、と赤いツノが飛び出て見えている。

正確には、ツノのような髪飾りの先端が。

ビンクブロンドのツインテールをそれで結び、こっちに背を向けて座っているのは――

（……アリア……！）

アリアだぞ、あれ。

その隣に見える緩いウェーブの茶髪は、理子の頭だし。

そういえばアリアは修学旅行中、呉で武藤や理子と落ち合うような事を言っていた。

3人して、この電車で東京に帰るところだったのか。

「アリ……」

すぐにレキの事を伝えようと踏み出した俺の腕を、ぐいっ。

「――？

アリア・理子の一つ手前の席から誰かが掴み、強引に空席に座らせてきた。

振り向けば、その手は――強襲科の不知火亮だ。

イケメンの不知火は口の前に人差し指を立てて『静かに』のジェスチャーをしながら、左右の目をパチパチさせてマバタキ信号を送ってきた。

モールス信号のようなそれを解読すると、『面白い話してる　聞こう』……？

無視して立とうとすると、不知火に腕を組まれてしまった。

『放せ　俺はアリアに話がある』

一応空気を読んで声を出さず、俺がマバタキ信号を返すと

『話は後でもできるよ』

と、返してくる。

『放せ』

『いいから　そのまま』

『放せってば』

『いいから　いいから』

そんな風にマバタキ信号で押し問答してると……ヒソヒソ、ヒソヒソ。

通路を挟んだ向こう、3人掛けのシートに座っている武偵高の女子3人がこっちを見て

囁き合っている。あれは俺と同じ2年A組の生徒だ。俺か、通信科の。

3人の女子は揃って顔を真っ赤にしながら「た、たらしが」「ついに男子まで」「お、落とした……！」などと驚いてるぞ。セリフを三分割して。

（……い、いかん……っ）

ヤツらの深刻な表情で気付いたが、改めて客観的に見れば――俺と小知火のこの光景。仲良く腕を組み、無言で見つめ合っているように見えなくもないぞ。男同士で。

し、不知火。お前少しは他人の目を気にしろよ　それでなくてもお前は女子との浮いた噂が無いせいで、そっち系の疑惑を持たれやすいんだから

俺はこれ以上クラスに悪評を立てられないためにも、

『分かった　分かったから　腕を放せ　5分間　ここで大人しくしてやる』

と不知火に伝え、なんとか腕を解いてもらえた。

（しかし、何を聞けってんだよ）

ふてくされて腕組みしていると　背後からアリアと理子の会話が聞こえてくる。

「――これは、あたしの友達に相談された話なんだけどね　ほら、あたし、その……れ、恋愛話とか、そういうの分かんないから。あんたなら分かるかなー……って思ってね」

「なんでも聞きたまえー　理子はラブロマンスの人間ウィキペディアだっ！」

……恋愛？　……ロマンス？

何だよ。俺の苦手系の話じゃねえか。

面白くもなんともねーぞ。

「あたしの友達……そのっ、その友達は……えっと、仮にAさんと呼ぶわっ。そのAさんは、ある男子……まあ、これはK君。Kが、べっ別にハッキリ好きとかそういう事は言ったり言われたりはしてないんだけど、その……まあ、一緒に行動してたのよ。何ヶ月も。それで分かったんだけど、Kは――やる気は無いけど、やればできる男子だったのよ。それでAさんはKと協力関係になって、ケンカ友達みたいになってたの。そうしてる内に、AさんはKを『自分のもの』みたいに感じるようになったっていうか……その……」

「ふむふむ。友達以上・恋人未満ってやつだねぇ。そして異性に対する独占欲が、正式におつきあいする前に芽生えてきてしまった、と。そういう症状ですな。くふふっ」

先生気取りの理子は、実に楽しそうだ。

心底、こういう話が好きなんだろうな。

「で、でもね。Aさん、もうすぐ転校することになっちゃったの。Kを武偵高に置いて」

一方のアリアは、少し必死感がある。

ワラにもすがるような口調だ。

友達の話だって言ってるのに、何でそんなに真剣になるんだよ。

「あるよねー。転校とか卒業を前に、こんがらがる男子と女子。じゅるうう」

何の、かと思って、座席と座席の間から様子を窺うと、
理子が窓側の席で、紙パックのイチゴ牛乳を飲んでいた。
見れば、壁から倒したテーブルにイチゴ牛乳の空きパックが20個ぐらい重ねられてるぞ。
なるほど。それを人目に晒したかったから、わざわざ座席を後ろ向きに回転させたのか。
相変わらず自由なヤツだ。
ていうかどう考えても飲み過ぎだろ。イチゴ牛乳。
でもね、そうなった時にキン、あっ、その、K君は別の女子に近づかれた。これは……
Rさんって女の子ね。性格も能力もAさんとは全く違うタイプの……優秀な子よ」
なんか登場人物が増えてきたな。
Aさんに、K君に、Rさんか。
まあ、アリアの友達の話なんかどうでもいいんだけどな。早く終われ
「その後、KとRさんは一緒に行動するようになって……その……」
「ふむふむ。Kくん、イチゴばかり食べてたら、メロンが食べたくなったってことかぁ」
などと言う理子に、アリアは「男子ってそういうもんなの？」などと真剣に聞いている。
ノセられやすいヤツだなあ、アリアは。
きっと、理子は適当に喋ってるぞ。口調からして。
「そうだよー。女子が産む性なのに対して、男子は産ませる性だからね。いろんな女性に

自分の子孫を残そうとする本能があるのですよ。くっふっふ」

「あ、あんたの話はちょっと生々しいわ」

「その辺、『女好きっぷり』は個人差が大きいんだけどねぇ。Kくんはどうなのー？」

「――女ったらしよー」

と言うアリアは、怒ってるような口調だ。

実際に見なくても、鬼の表情が思い浮かぶぞ。

関係無いのに、背筋が凍るぜ。

「普段はダメ人間なんだけど、女子の前でだけは一瞬カッコよくなるっていうか、すごく……こう、胸が苦しくなって、後でその事ばっかりグルグル考えちゃうような……ヘンなことをたまに言うの。いっ、いきなり触ってきたりとかもするし。ほんと、びっくりする。そういうのが上手すぎて、こっちは何もできなくなって、されるがままになっちゃうっていうか……そこから何をされても、たぶん抵抗できないっていうか……頭が、ボーッってなっちゃう……なんか……ヘン。ヘンになるの――って、えっと、そう、あたしの友達が言ってたわ」

へー。そんな悪い男がいるのか。うちの学校に。

魔性の男ってやつだな。そいつは。

「えっと、今のはその、あたしの友達、Aさんが言ってたのよっ。ホントよ。あくまで、

友達のAさんがいってたの

アリアが理子に念押しするのを聞いて、俺の隣で不知火が小さく吹き出した。

……何がおかしいんだ。笑い所が分からん。

「まあ、Kがそんなだから……Aさんは大ゲンカしちゃったのよ。Kとも。でも、あた……あ、A－　Aさんはその、転校する前に、そのKを……『取り戻す』までは行けなくても、仲直りだけでもしておきたいの。自分勝手だって分かってるけど、でもRに取られたままじゃ……また会えた時、もうKはRのトリコになっていて、Aとは組んではくれないかもしれないじゃない。だからその……」

そこでアリアはギンッと座席を鳴らし、理子の方に詰め寄った。

「ど、どうすれば、KはAさんを忘れないでくれるかな。そのっ、な、何をすればいいの、転校前に」

なんか……アリアの声、ガチガチだな。

一方、理子は余裕綽々で「んーっふっふっふ」などと鼻を鳴らして笑っている。

「Aさんはもうすぐ、お誕生日ですね？　それも転校する直前にお誕生日がくる」

と言う理子に、ガタンッ。

アリアは席からジャンプするぐらい驚いてる。

「よ、よく分かったわね！　そう、そうなのよ」

ほー。

アリアにもそんな仲の良い友達がいるのか。誕生日まで覚えてるなんて。

俺は友達の誕生日なんて、ここにいる不知火のも知らんぞ。もちろん武藤のも。

アリアの誕生日だけは、スルーしたら風穴無間地獄だろうから関連情報をメモってあるけど。正確には分からんが、確か今月だったよな。

「くふふっ。そりゃあもう。理子は優秀な恋愛カウンセラーですからね。くふふーん」

実にイヤラシイ笑い方をした理子は、

「――そこが決戦になるね、その三角関係は」

「……？」

「Aさんは焦っちゃダメ。何もしなくていい。待ちの一手でキーく……おっと。Kくんを試すんだよっ！」

「た、試す……？」

「そう。KくんがAさんをキライじゃなければ、何もしないで誕生日を見逃すってことはないからね。お祝いにかこつけて、2人っきりで会おうとしてくるハズだよ」

ゴクリ。

と、アリアがノドを鳴らす音が聞こえてくる。

「別れ際に告白――ってのも、あり得るかもねぇ。くふふ……」

「ここここ、ここく！　は、いく」
アリア、声でけえよ。
電車内は公共の場なんだから、大声出すな。
「いやいや。Kくん、告白どころか　それ以上の行為に出るかもねぇ……！」
「そ、それ以上いけない！」
だからアリア。落ち着けって。
お前もう日本語がヘンになってるぞ。
「そ、それ too much！　だ、だって too early for me, for I'm just 17 at that time！　こっは っ、ほら！　急に来られたら how how how how how d I　I　I っ！」
アリアがハウハウアイアイと宇宙語のような言語を発し始めたので、俺はもうバカバカしくなってきて……
「くだらん　もういいだろ」
と、不知火にマバタキ信号を送った。
不知火も……パチパチと返してくる。
『遠山くん　頑張ってね』
『俺が　何を頑張るんだ』
『それでこそ　遠山くんだ』

不知火は苦笑いし、俺にホテルのコンシェルジュみたいな手つきで『お行き下さい』という手つきをする。

何だったんだよ。結局。

と、俺が口をへの字に曲げて立ち上がろうとした……ちょうど、その時。

グッ――

と、電車が前に引っ張られるように少し揺れた。

「おっ……」

ちょっとバランスを崩した俺は、シートの背もたれに手をついてしまう。

何だ……？　今の。

僅かな速度だけ、急加速したような揺れだったな。

あれ、と呟いた不知火が見る窓の外で――名古屋駅のホームが、流れていく。

この新幹線が、駅を通過しているのだ。

「……？」

おかしいぞ。

この新幹線、たしか名古屋には停まることになってなかったか？

俺の勘違いじゃないだろう。

ここで降りようとしていたらしい乗客が、不思議そうな顔で通路に戻ってきてるし。

不満の波が　さざ波を始めた。
「――お客様に、お知らせいたします」
車内アナウンスが流れた。
「当列車は名古屋に停車する予定でしたが、不慮の事故により停車いたしません」
……？
「名古屋でお降りのご予定でしたお客様は、事故の解決次第……最寄り駅から臨時列車で名古屋までお送り致します。たいへん申し訳ございませんが、事故の詳細については現在調査中となっております」
車掌と思われるその声は、僅かに震えている。
どうした。何があった。
事故で駅を飛ばすなんて、聞いたことがないぞ。逆に停車するってんなら分かるが。
それだけじゃない。おかしい。
この新幹線は、名古屋駅を通過する際に減速すらしなかった。
むしろ……加速して、いる……？
「おい、どういうことだ」「あちゃー、仕事キャンセルになっちまうわ」「事故って何だ、事故って」「説明あらへんのか。今のだけじゃ分からへん」
混乱する乗客たちの間から、さっきシートにふんぞり返っていたタレント・鷲尾習が、

「こらぁ！　車掌出せ車掌！　俺ぁ名古屋で降りなきゃなんねぇんだよ！　もうドームに客が入ってんだぞッ、俺が誰だか知ってんのか！　名古屋に戻せ！」

大声で怒鳴り立てている。

もう通過しちまったのに、ムチャな事を言いやがるな。

だが、それより――

（マズいな……）

異常は伝染する。アイツが妙なことを口走ったりして他の乗客がパニックになったら、収集がつかなくなるぞ。大人しくさせないと。

と、俺が立ち上がった時――

『なお、付近に不審な荷物・不審物がございましたら、乗務員までお知らせ下さい』

そう続けられたアナウンスに、早くもキレたらしい巡尾が前の座席を蹴った。

「不審物って何だ！　爆弾でも仕掛けられたのか！　ええッ？」

チクショウ、早速言いやがったか……

「――爆弾？」「えっマジ!?　爆弾って!?」「おい、爆弾があるらしいぞッ！」

乗客たちの騒ぎが大きくなり、何人かは運転席の方へと歩き始めている。

「皆さん、落ち着いて下さいっ」「座席に戻って下さい！」「詳しい事は調査中と――」

さっき俺と不知火を見ていた武偵高の女子3人が立ち上がり、人々を宥めようとするが

[illegible]

これは――鷲尾が騒ぎ立てたのもマスカ・たか、乗務しのアナウンスも良くなかったな公開した情報が不明瞭で、少なすぎた。

解決の見通しも何もなく、ただ、非常事態を伝えてきただけだ。

新幹線側も「名古屋に停まらない」という隠しようのない異常が露見するまで乗客への発表を控えたんだろうが、電車という密閉空間に閉じ込められてそんな発表をされたら、鷲尾みたいに短気な客が騒ぐのも無理はない。

一般人は、俺たち武偵みたいに日々ロクでもない事件を経験してるワケじゃないんだ。

「席に戻って下さい、危険ですから」

お腹を押さえて立ち上がった妊婦さんに不知火がそう言った時――ガクンッ。

足元が揺れ、一斉に後方へよろめいた乗客たちが悲鳴を連ねた。

新幹線が、また加速したのだ。

（どういう事だ……!?）

窓の外を見ると、加速した速度は――景色の流れ方の変化から判断して、僅かだろう。

だが、突然すぎた。通常の運転では有り得ない急加速だった。

何と言うか……ギリギリまで堪えてから、やむを得ず増速したような感じだ。

車両の自動ドアの上にある電光掲示板では、

――【只今の時速　130km】――

という文字が右から左へと流れている。

今の加速で更に不安になったらしい乗客たちが、喚きながら運転席の方へ殺到していく。

鷲尾智は車両後部へと駆け――がんがんっ！　壁に埋め込まれたドアコックのフタを、高そうなライターで叩き始めた。

（あのバカ！　何やってやがる……）

手動で……新幹線のドアを開けるつもりか？

走行中はロックが掛かっているハズだが、今、この新幹線は機能が正常に働いているかどうか分からない状態だ。万が一、開いちまったら……大事だぞ！

「やめろ！」

俺は鷲尾めがけて、通路を一直線に駆けた。

「――キンジ!?」

「キンちゃん……！」

俺に気付いたアリアの声と、騒ぎで目を覚ましたらしい白雪の声を聞きながら――俺は、

「落ち着け！　降りられるワケがないだろ！　この速度で！」

鷲尾に飛びついて、羽交い締めにする。

「放せ！　放せよォ！　俺は名古屋に行くんだァ！」

なレと殴りかかってきた鷲尾の腕を掴め　ヘルトのアイヤーで後ろ手に縛り上げる。
その時、再び聞こえてきたアナウンスは――
『乗客の皆さまに　お伝えしやがります』
――――
『この列車は　どの駅にも停まりません　東京まで　ノン・ストップで　参りやがります
アハハ　アハハハハハ』
――ボーカロイドの、人工音声、だッ……！
『列車は　3分おきに10キロずつ　加速しないといけません　さもないと、ドカーン！
人爆発！　しやがります　アハハ　アハハハハハハー！』
人工音声の笑い声に、のぞみ246号の車内中から悲鳴が上がる。
このボーカロイド。俺とレキを襲撃したラジコンヘリの時と同じ声だ。
（ココ……）
アイツの仕業か。
泣きそうな顔で座り込んだ鷲尾から離れ、電光掲示板を見上げると――
――【只今の時速　140㎞】――
加速してる。確かに。
（特急列車乗っ取り――）

何が目当てか知らんが、随分、派手にやってくれるじゃねえか。
どうりで駅に停められなかったワケだぜ。
多分、運転士と車掌は京都を発車した後で犯人から爆弾による脅迫を受けたのだろう。
さっきは検札かと思ったが、あの汗だくの車掌は爆弾を探していたんだな。
しかし……コイツは厄介だぞ。
車両先頭――運転席の方では、パニック状態の乗客らが「前の新幹線にぶつかるだろ！止めろ！」「アホ！　爆弾がある言うてたやろ！」「そんなのイタズラに決まってるー」などと揉み合いになり、それを白雪が宥めようとしているのが見える。
「遠山君……！」
「キンジ！」
車両後方、俺の元には不知火と――すっかり日が覚めた感じの武藤がやってきた。
「いま不知火と計算したんだがな。今のアナウンスが本当なら、19時22分までだぜ」
「……19時22分……？」
「どこの駅にも止まらず、このペースで加速していったら……そこで東京に着くんだよ」
武藤と不知火の言葉に、俺は眉を寄せる。
東京に着く。
その先に線路は無い。

見ればいいでしょ」

腕時計を見れば、現在の時刻は18時2分だ。

「タイムリミットまで――あと80分ってことか」

「もっと早いかもしれないぜ。さっきのアナウンスは……加速し続けろ、っつってたな。この新幹線はＮ７００系、東海道区間の営業最高速度は時速２７０kmだ。40分後にはそいつを超える」

「超えたらどうなるんだ」

「安全運転はできねえぞ。車体やレールにムリがかかるし、カーブで脱線の危険もある」

「危険運転なら……何キロまで出せるんだ」

「設計限界速度は３５０から３６０って言われてるけどな。本当の限界はＪＲも公表してねえんだ」

と言う武藤の横で、不知火が携帯の電卓機能を使って速度と時間をすぐ計算する。

「――スピード不足だよ。19時過ぎには時速３５０km、最後は４１０km必要になる」

「ウワサじゃ……試験車両で、３９７kmまで出したって聞いた事があるけどな。それ以上どこまで出せるのかは、誰にも分からねえ。４１０なんて、未知の領域だぜ」

40分後からは危険走行、1時間後からは設計限界突破――最後は、未知の領域か。

東京まで帰れないで、ドカンって可能性も大きいな。コイツは。

、武藤、不知火。この列車に乗ってる武偵高の生徒を集めて、爆弾を探そう。減速無しで爆弾を探して、解除するんだ」

暴走特急と化したのぞみ246号の窓から、悪夢の様に流れていく夕暮れの街が見える。

この、窓の外――たとえば車両の下に爆弾がついていたら、もう詰んでるぞ、そんな物、解除できっこない。

後ろの車両に武偵高の生徒がいないか確かめに行く武藤と不知火を見送った俺は――

16号車の最後尾、そこに座っていた理子とアリアの所に歩み寄った。

「……っ……」

大阪でレキと一緒にいた俺に殴る蹴るの暴行を働いていたアリアは、俺を避けるように顔を背ける。何か言いたいことをガマンしてるのか、頬をフグみたいに膨らましてるぞ。

あの時の事は……俺もいろいろ説明したいが、今はそれどころじゃない。

と、まず俺はアリア越しに理子を睨んだ。

「理子。俺が言いたいことは分かるな。これは、お前と同じ手口だぞ」

俺は他の乗客に聞こえない程度の声で、問い詰めるように言う。

理子は、さっきまでの普通の女子高生らしい表情を一変させ――

「やられた……」

鋭い眼つきで、そう呟いた。

4月　理子は俺とアリアが出会うきっかけとなった『武偵殺し』事件で、このタイプの爆弾を使っている。俺のチャリや学園島の巡回バス……走る乗り物に仕掛けられて、ある速度以下に減速すると爆発する爆弾。極めてタチの悪い、悪辣な仕掛け爆弾である。

だが、この列車に仕掛けられた爆弾はもっと悪質だ。

走り続けるだけじゃダメで、加速し続けないと爆発するんだからな。

「ツァオ・ツァオ……もう動いたのか、あの守銭奴ッ……！」

歯ぎしりした理子は、開いた両膝の間に手を突っ込んで、シートを探るようにゴソゴソ動かしていた。

「ツァオ……？」

眉を寄せて問いかけたアリアに、理子は『武偵殺し』モードの目を向ける。

「ツァオ・ツァオは――子供のくせに悪魔じみた発想力を持った、イ・ウーの天才技師だ。莫大な金と引き替えに魚雷やＩＣＢＭを乗り物に改造したり……キンジ、お前のチャリに仕掛けた『減速爆弾』の作り方をあたしに教えたのもツァオ・ツァオだ。これはその改良版、『加速爆弾』――！」

ぼた、と、額から汗を落とした理子に――

「イ・ウーの……爆弾戦術の講師――ってとこね。理子あんた、生徒ならこの爆弾の基本構造は分かってるんでしょ。すぐ起爆装置を探して解除するのよ」

と、俺の方を見ないままのアリアが理子の手を引く。
しかし理子は席を立たず、首を横に振った。
「ダメだ。あたしは動けない」
「なんでよっ」
「この座席が感圧スイッチになってる。正解だった、気がつかなかった。あたしが立つと、どこかに仕掛けられた爆弾が爆発するぞ」
「……！」
俺とアリアは絶句して、理子のシートを見下ろす。
減速禁止、強制加速に加えて……人間スイッチかよ。
敵は、爆弾を解除できる可能性のある理子をまず封じてきた。
あらかじめ綿密に俺たちの動きを調べ、座席に罠を仕掛けておいた上でな。
つまり俺たちは――敵の罠だらけの新幹線に、自らホイホイ乗り込んでたってワケだ。
ここまでくると、もう笑えてくるな。自分達の警戒心の無さが。
「……因果応報だな、『武偵殺し』さんよ」
チャリのサドル下に爆弾を仕掛けられた俺は、ポン、と理子の肩を叩き、
「理子、ツァオ・ツァオは、中国人の女――お前より年下の、女の子だな。彼子格闘技をお前に教えたのも、ソイツなんだろ」

イカ、組いん
理子はその大きな　重まぶたの目で、俺を見上げてくる。
「なんで知ってるんだ、キンジ」
「俺も襲われたんだよ。昨日、このボーカロイドを使う女にな」
名前の違いやジャンヌの『イ・ウーに狙撃手はいなかった』という話など、引っかかる部分もあるが
そのツァオ・ツァオが、ココだ。間違いない。
ココは……いつ敵に回るか分からないイ・ウーのメンバーに、自分に狙撃の技術があることを隠していたのだろう。
しかし、ココ。格闘、拳銃戦、狙撃も出来て、さらに天才技師だって。
今度こそもう、本当にありえなさすぎて笑えてくるぞ。
どいつもこいつもバケモノだな。イ・ウーの面子は。
理不尽に怒り続けるアリアに俺から話しかけるのは癪だが、事ここに至っては仕方ない。
と、俺はアリアのツインテールを片方引っ張って強制的にこっちを向かせた。
「アリア、落ち着いて聞け。この新幹線ジャックの犯人は、お前を拳銃戦で襲ったヤツだ。名前はココ。レキは狙撃戦でそいつと戦って――重傷を負った」
「……レキ、が……!?」

先日、武偵高駅の階段で人ゲンカした事はさておき――
あのレキが負けたという事実に、アリアは赤紫色の瞳をまんまるに見開いて驚いてる。
「心配するな。一命は取り留めた。一時は出血多量で危なかったけどな」
「な……なんで早く言わなかったのよ！」
「俺はココに携帯を破壊されたんだ。連絡できた時は、お前たちが圏外だった……いや、俺とアリアの連絡が途切れてたのも痛いが――他にも情報は寸断されてたみたいだな」
「情報……？」
「お前も、理子に詳しくは話してなかったんだろ。『水投げ』の日、拳銃戦で引き分けた相手の外見とか、特徴とか」
そう言われたアリアは、うぐぅと喉の奥を鳴らして黙る。どうやら図星らしい。
俺が下級生に格闘戦で負けた『下負け』を人に言わなかったように……やはりアリアも拳銃戦で『下分け』――年下のココと引き分けたという不名誉な事実を隠していたのだ。
プライドは人一倍高いからな、この貴族のお嬢さんは。背は人一倍低いけど。
ココは――それを、よく分かってやってたんだろう。
俺とレキを襲撃した時も真っ先に携帯電話――通信手段を破壊してきたし、偽名も使い、下級生に負けた事を隠す武偵高の文化まで利用し……
俺たちの間に、自分の詳細な情報が行き渡らないようにしたのだ。

「キンッ、アリア！　開け！」

緊迫した理子の声に、俺とアリアが振り向く。

「『減速爆弾』や『加速爆弾』――速度爆弾は、無線でスタートさせる。たいてい、もう手で触れられない場所に爆薬を仕掛けるからな。でも、混線や輻輳、セル圏外、弱電界、ハングオーバーコア……○失敗……無線ってやつは、確実性に乏しい。特に新幹線みたいに高速で無線機が山盛りに積んである移動体ではな。あたしはヤツに習った。そういう時は退路を確保した上で、自分も乗り込め、って。そしてターゲットたちが乗車したのを見定めて、車内で仕掛けを確実に起動するんだ。つまり――」

理子の眼が、何かを確信しているようにギラついている。

「――乗ってるぞ、敵は」

その言葉に俺とアリアが顔を見合わせた、その時。

――ガンガンッ、ガキンッ！

何回かの金属音に続いて、車両の先頭――運転室近くに集まって騒いでいた乗客たちが悲鳴を上げながら車両を駆けてきた。

（――!?）

車両の前方では、きゃあ、という声を上げながら――押し流されるようにして突き飛ばされた白雪が空席に倒れるように座り込んでいる。

チェスを指していたサラリーマンの男たち、金切り声を上げながらの派手な女、座席についていた乗客もみんな立ち上がって、15号車の方へと逃げていく。

人払いをするための威嚇か、運転室の内側から扉を叩き割って出て来ていたのは――

「――ココ！」

やっぱり、乗ってやがったのか……！

「你好、キンチ。ここで立直ネ」

清の民族衣装を纏ったココは、俺にウィンクなんかをしてきやがる。

そして、ぶうんっ――小柄な体に似合わない、鉈のような大刀を振り上げた。

刀は柄から垂らした布飾りと、刀身に彫られたヒョロ長い龍の図で飾られている。

「この列車、お前たちの棺桶なるネ！　きひっ！」

ザクッッッ――！　振り下ろされた刀が、先頭の座席を軽々と叩き割る。

あれは――柳叶刀。

日本では青竜刀と呼ばれる、幅広で重い、片刃の中国刀だ。

強襲科で習ったが、青竜刀は日本刀のように鋭さで臓器や血管を突いたり斬ったりする刃物ではない。刀身の重さで肉と骨を断ち切る、発想としては戦斧に近い武器なのだ。

回り込んで、やるぜ、アイはハニーの約束あるぜ
と言うココの小さな肩越し、2車線の向こうに見えた運転席では……
女性運転士が半ベソで振り返っており、助手席には誰もいなかった。ココは運転助手を追い出して、そこに乗り込んでいたらしいな。
うえぇん――という泣き声に振り向くと、16号車中央付近で、まだ避難できていない妊婦さんに子供たちが泣きついていた。
16号車に残ってる一般客は、彼女らだけだ。
見れば妊婦は大きなお腹を抑さえ、苦しそうに脂汗をかいている。
このパニックの中で、ストレスから体調を崩したらしい。
「――白雪！　彼女と子どもを救助して！」
叫んで飛び出したのは　抜刀したアリアだった。
動けない理子と棒立ちの俺を置いて、アリアは双剣を下段にクロスさせたコンパクトな構えで狭い通路を駆ける。
身を屈めて通路を走ってきた白雪は、すれ違いざまにアリアと目配せし、
「――んっ！」
重ねた両手を踏み台にさせて、アリアをナナメ前にジャンプさせた。
アリアは減速する事なくシートの背もたれに飛び上がり、タタタタッ――！

人並み外れた運動神経で、座席を飛び石のように渡っていく。
対し、ココは片手で青竜刀を一回しして……
「来来、シャーロック4世ッ」
アリアに反対の手をクイクイさせて見せた。
白雪が妊婦を支え、俺が子供たちを守りながら15号車へと避難するその背後で――
がきんっ！
大きなハサミのように構えたアリアの日本刀と、ココの青竜刀が激突する音が響いた。
新幹線とは、鋼鉄の箱のようなもの。
壁や天井に当たって跳ね返る弾丸で自分が傷つかないようにするため、アリアもココも銃を使わない。
座席の背から飛びかかったアリアと、それを正面から受け止めたココは、ぐりんっ。
切り結んだ刀の交点を中心に、輪舞のように回転して体を入れ替えた　2度。3度。
ピンクと黒のツインテールが、四つ巴の図のように靡き――
アリア。ココ。アリア。ココ。
ビジュアル的に似た2人が、グルグル目まぐるしく入れ替わる。
まるで格闘ゲームの1P・2Pキャラみたいだ。
「謀ったわね、卑怯者！　私対面の時に『ココ』って名乗っておいて――偽名とはね！

ツァオ・ツァオー」

「それは欧州人の間違った呼び名ネ。イ・ウーではシャーロック様がそう呼んだヨ、だからココは皆にそう呼ばせてたネ。曹操。これ、魏の正しい発音アル！」

……っ。

そういう事か。

かつて理子がホームズを「オルメス」とフランス語読みしていたように、言語が変わると名前の発音も変わるのだ。それで、『ココ』と聞いたジャンヌもピンと来なかったのか。

よく考えてみれば、『曹操』ってのも日本語読みだしな。

――グロバルな戦いに巻き込まれると、まず名前から苦労するぜ。

子供たちを15号車に誘導した俺は、

「白雪――この女性を任せる。乗客の中に医者がいないか探してくるんだ。俺はアリアと2人でアイツを逮捕する」

妊婦を支えて15号車に入った白雪にそう告げる。

「はっ、はいー　でもキンちゃん、気をつけて。あの犯人、普通じゃない感じがするの」

俺はバタフライ・ナイフを取り出しながら――

「普通じゃない？　それはいつもの事だろ。だから――普通だ」

自分に言い聞かせるように、そう答えた。

16号車に戻ると、最後尾の座席では坤丁が床面の「丁」で子供みたいに膝立ちしていた。後ろを向いて、車両の先頭付近で繰り広げられる追いかけっこを見ている。

「――このっ！」

「きひっ！」

ほぼ同時に前蹴りを繰り出したアリアとココが、お互いの腰同士を蹴る形になって――ばっ、と離れた。

次の瞬間、ココは青竜刀を放り、たん、たたたっ！　床を蹴り、アリアの膝、腰、胸を垂直に駆けあがるような軽業を見せ――ビシッノノ！

牡丹の刺繍が入った絹布の靴で、アリアの顎に爪先蹴りを叩き込んだ。

「アリアっ！」

子の中でバタフライナイフを開きつつ、俺は通路を駆ける。

「――ッ！」

よろめいたアリアが、こっち側に何歩か後退してきた。

その向こうで、運転室を背にしたココは――ハック宙を切りながら、バタバタと両袖の長い袂をヒレのように羽ばたかせた。

そして、その袖の中から……何だ、あれは？

香水の容器のようなものを取り出したぞ

「泡爆珠ー」

シュノー

という霧吹きみたいな音がして――車内灯にキラノと光らなければ見逃していただろう

ゴマつぶみたいなサイズの、小さなシャボン玉がアリアめがけて飛んだ

「――アリアよけろー」

それを見た理子が、慌てふためいて叫ぶ。

「泡爆は気体爆弾だッ、あたしはイ・ウーで見たー　シャボン玉が弾けて中身が空気中の酸素と混ざると――爆発するぞー」

「ワ」

それを聞いたアリアが、キュッ　と足元を鳴らした。

――バチィッッッッッ

アリアの眼前で弾けたシャボン玉から、激しい衝撃と閃光が上がる。

前方のシートが、何席か薙ぎ倒され――

「きゃうっ――」

[illegible]

れてくる。

この光――見覚えがある。

これは、レキがココとの夜間狙撃戦の最後に致命傷を負わされた光と同じものだ。

規模はあの時より大きいが――レキは、この気体爆弾にやられていたのか！

「――アリアっ！」

背と後頭部で激突してきたアリアを焦って抱き留めるが……

よかった、目立った外傷は無い。

アリアは爆発の寸前、動物的本能で危険を察してバックステップしたのだ。

そのお陰で直撃は免れ、レキのような重傷を負わされる事はなかったらしい。

しかし、衝撃のダメージは深刻だ。アリアの意識は朦朧としており、両膝はガクガクと震え、自力では立てない状態だ。刀も放してしまっている。

「う……ううっ」

気付けのためかアリアは頭を左右にぶんぶん振り、しゃんしゃん、とピンク色のツインテールをでんでん太鼓のように揺らした。

その向こう10mの距離では、満面の笑みのココが

「きひひっ、これで和了ねっ！」

往年の映画『霊幻道士』に出てくる不死人のように、両手を前に突き出している。ココはその「前へ倣え」みたいな姿勢で、ばたばたたっ、また袖を振って、中から……双節棍……？　いや。違う。

小型ロケットを2本、取り出しやがったぞー

ロケットの先端同士をカチンと合わせたココが左右にそれを離すと――

先端同士の間に、びい、とワイヤーが1本張られて伸びた。まさに双節棍のような形に。

「――双火筒縛禁！」

鋭い噴射音を上げて平行に飛んだ2発のロケットが、俺とアリアの左右を通過し――その間に張られたワイヤーが、アリアの半たい胸の下に押しつけられる。

「うゅっ!?」

アリアの体でワイヤーを固定されたロケットは、ぐりん、ぐりんっ、と俺たちの周囲をデタラメに回りながら飛び始めた。

「あッ……あっー」

「うっ……おッ……ー」

みるみるうちに俺とアリアはワイヤーで束ねられ、身動きが取れなくなる。

俺とアリアの腕、胴体、脚をグルグル巻きにしたロケットは、カキンっ！

音を立ててワイヤーから自動的に切り離され、燃料を使い果たして床に転がり落ちた。

その片方を踏んだアリアがバランスを崩し――
ワイヤーで束ねられてしまっている俺と一緒に、どさっ。転倒した。
うッ……足も縛られちまったせいで、た、立てねえそ……！
その上、転倒のショックで……俺はヘンに固定されて力が入らなくなっていた手から、ナイフを放してしまっている。
ナイフは座席の下に滑り込んでしまい、手も伸ばせないので、もう取れないぞ。
文字通り……手も足も出なくなった。今の、たった一瞬で……！
「う……う……ふえ……ソァオ・ソァオ……！」
という声に視線を向けると……
俺とアリアがやられたのを見た理子が、両手の甲を両目に当てて泣き出していた。
「……ぴえええええええ！　理子はイ・ウーの仲間だったじゃ――――ん！　同期の桜じゃ――ん！　理子は助けて、理子だけは助けてええ～！　ぴえええええええ！」
や、やかましい。
理子め。さっきまで俺たちに色々教えてくれてたくせに。
敗色が濃くなると、途端に裏切りやがって。
ていうかお前いま『理子だけは助けて』って言ったろ。友達甲斐のないヤツだ。

「峰理子――ウソ泣きヤメるネ　泣き落とし逆用する相手、男だけヨっ！」

びしっ！　とココに指をさされた理子は、

「チッ」

舌打ちしつつ、ピタッと泣きやんでココにアカンベーした。

ココは――両手を袖に入れて胸の前で合わせ、余裕の表情で歩いてくる。

そしてアリアを見下ろす位置に来ると、その顔をまじまじ見つめた。

「ふうーん。これがアリアあるネ。写真を見たとき確かにココに似てて可愛い思ったケド、実際会うとココの方が可愛いネ、きひっ」

「ココぉー」

手も足も出なくなったのに、アリアは闘争心むき出しで犬歯もむき出した。

「その髪型！　こないだ、やめなさいって言ったでしょ！　あたしと被ってんのよ！」

「聞いた覚えないアル、ぷっぷー　藍幇も、イ・ウーの主戦派も、仮想アリアの女の子ほしがるネ。この髪型するの、稼ぎになるヨ」

「主戦派……？　イ・ウーの残党ってワケね……ー」

「不是！　ココは初めっから藍幇の一員だたネ！　イ・ウーに居たは商売のためネー」

アリアと会った事があるのかないのかよく分からない、妙な言い争いをしたココは……

カエルみたいにしゃがみ、床に手をついてアリアの耳元まで口を寄せ、

ていうか　お前！　Hのきき方、気をつけろネ！　」」は世界一なら、お姫様ネ！」

アリア並に甲高い声で絶叫した。

お、お姫様はカエルしゃがみはしないと思うけどな。

すっ、と立ち上がったココが――

「――緋弾のアリア」

緋弾のアリア。

イ・ウーでアリアがシャーロックから継承したその名を、出した。

「何もかも、お前のせいネ。イ・ウー崩壊した、世界中の結社、組織、機関、パワーバランス崩れたネ。乱世、これから始まるヨ」

ココが、傲然と俺たちを見下ろしている。

まるで罪人たちを捕らえた女帝のように。

「お前、緋緋色金を壊せた。これも乱の始まりある。緋緋色金と瑠璃色金、仲悪いネ。緋緋が瑠璃ついたこと感付いて、瑠璃、百年ぶりに怒たヨ。怒って見えない粒子撒いて、世界中の超能力者、力、不安定なた」

「超能力者……が……？」

俺の頭の下に後頭部をつけているアリアが、何だか分からないという声を出す。

超能力関係に詳しくない俺も、最初は疑問符しか頭に浮かばなかったが

最近いくつか、身の回りに思い当たるフシがあった事に気付く。
先日、レキの事を相談しにいった時…俺が間違えて買った熱い缶コーヒーを冷やしてくれたジャンヌが言っていた。「最近、私の魔力は不安定なのだ」とか。
京都でも風雪が、巫女たちの力が弱まっているような事を言っていた。
それらは、イロカネ絡みの現象だったという事なのか？
――眉を寄せた俺を、ココは目尻に紅を差したツリ目で見下ろしてきた。
「これから超能力者、役立たずなるヨ。そうなた時、銃使いの価値増すネ」
コンコン。俺の頭をココがちっちゃな爪先で小突いてくる。
「キンチは超能力者ちがう、でも高い戦闘力を秘めた良い駒ネ。上戦派、研鑽派、ウルス、みんなキンチ欲しがってる」
みんな、俺を欲しがっている……？
ど、どういう妄言か分からんが……
俺は随分、裏の世界では有名人って事になってるみたいだな。
学校では影薄いキャラなのによ。
「一番キンチに手出す早かたの、ウルスある。塹瑚色金、姫に直接指令送って、キンチを取りに掛かったネ。でもキンチは、ユコが横から貰うある」
ココは実に嬉しそうに、てんてんとその場でジャンプした。

ウルさのーた、ーーか見ろー　俺れ乃列撃ー！　急撃ー位ー、ー様ー、ー右ー！　完ろ右ー！
ある　アリアも買うネ　緋緋色金、高く売れるヨ」

頭の中でソロバン勘定でもしてるのか、ココはニヤリと笑い――

「乱世、ビジネスの好機ネ。この新幹線乗っ取りもサイドビジネスある。きっき、ココ、日本政府に３００億人民元要求したヨ。払えば良し、払わないなら――どっかぁん！」

ツインテールが跳ねるほど勢いよく真上を向いて、甲高く叫んだ。

「電車粉々にして、爆泡のデモンストレーションにするネっ。きひっ」

「爆泡――さっきのシャボン玉爆弾の事ね――！」

その気体爆弾に吹っ飛ばされたばかりのアリアが、ココを睨みーげる。

ココはそれを……この電車にも仕掛けた、って事らしいな。今の話によると。

「さっきの爆泡、ほんの１ccネ。この列車には１㎥積んだある」

サラッと言ったココに、

「ちょっ……多すぎだってばー」

座席に膝立ちしていた琥子が、それはマジでやばいー　という表情になって喚いた。

俺も――声が出ない。

１㎥。シャボン玉にせよ風船にせよ、そんな大量の気体を詰め込んだ袋、車内に隠せるワケがない。ウソに決まってる。だが、ハッタリじゃなけりゃ――

その威力は、さっきの爆発の1万倍って計算になるぞ。
新幹線なんか、木っ端微塵になる。乗客も全員。線路の周囲に建物があれば、それも。
「爆泡、見えない爆弾ある　どこにでも隠せる、誰にも気付かれない名品ネ。派手に吹っ飛ばせば、注文、世界中から来るネ。ココ大儲けで、藍幇の女帝の地位買うヨ」
藍幇――話しっぷりから考えて、どうやらそれがココの所属する組織の名前らしいな。多分、中国系の無法者集団。ココはそこのメンバーでありながら、イ・ウーにも出入りしていた闇の商人……ってところか。今までの話を総合すると。
「キンチ、レキ、香港の藍幇城へ連れてくネ。そこでココの手足なって働くネ。アリアは買い手つくまで幽閉する。きひひひひっ」
と笑うココに――
「ツァオ・ツァオっ。り、理子は？」
シートの背もたれに両手を乗せた理子が、あせあせ、と横から口を挟んできた。
「理子もご一緒にいかがですかっ？　理子は可愛くて強いよ、使って損は無しだよっ」
「ご一緒にいかがですか」って。
お前はマックのポテトか。
「峰理子。お前、能力はともかく人格に難あるネ。今から心入れ替えるカ？」
疑うような目のココにそう言われた理子は、うんうんうんうん。

必死な表情で、何度もうなずいている。

「――藍幇に忠誠誓うなら、考慮してやるネ」

「藍幇大好きー　藍幇万歳！　キンジ、アリアー　今から理子と藍幇の組員になろうー　藍幇城は酒池肉林、超マジいい所だよー　本場のももまん食べ放題だよ！」

「……本場のッ……もッ……」

倒れたままのアリアは一瞬我を失いかけた声を出したが、

「もッ……こら理子！　なに迷攻で寝返ってんのよ」

がうー　と、改めて理子に犬歯を剥いた。

そのアリアを抱っこしてるような姿勢の俺は――

「話の腰を折るようだがな、ココ。俺は――お前の手下になんかならないぞ。こう見えても一応、武偵ってことになってるんだからな」

そもそもテロリストまがいの組織の構成員になんかなる気は無いが……なったら最後。証界のどこに居ようと武偵高のOBやら鬼教官やらに捕まって私刑の上、裁判所で武偵三倍刑のルールに基づき死刑だろうからな。ここで一思いに殺された方がまだマシだ。

「――良将、最初はそう言うネ。でも人の子には欲有るネ。中国は地大物博人多。何でもある国ネ。魏の兵法書によれば、敵将が若い男の時、女責めにすれば自分の部下にできる。お前の好みの女、百人集めてやるネ。美人、美少女、大きいの小さいの、いっぱい与える。

上り上りみ上りけーくぺんぐぃ　りふーん

と言うココの言葉に――ぐいっ、ぎろっ！

アリアが首の限界まで振り返り、更に横目になって背後の俺を睨んできた。

な、なんで俺に怒るんだよっ。理不尽だろ。いつもの事ながら。

「あ、生憎だが……それは俺には逆効果だと思うぞ」

アリアの手前、詳しい説明はできないものの、俺は一応そう返しておく。

「それにレキにも言ったが、俺は将軍でも何でもない。ただの平凡な男子高校生だ」

「――キンチ、己を知る必要あるネ。お前、特別な人間ヨ。特別な人間、ただの人間たちから阻害される。表の世界は合わないネ。それより裏の世界で派手に生きる良い」

ちくり、と――俺の胸に小さな傷みが疼く。

兄さんがイ・ウーと戦う中で、表の世界から姿を消した事――

それを思い出して、俺は少し言葉に怒りを交えてしまう。

「そ……そうはならねえっつってんだよ。俺は――至極一般的な人生を歩むんだ」

「存在自体が一般的じゃない男が、何言うカ」

またカエルみたいにしゃがむと、ココは手をついて俺に顔を近づけた。

さらり。砂糖菓子みたいな香りのする黒いツインテールが、俺の顔を撫でる。

「キンチ、お前はココの同類ヨ。優れた潜在能力を持つ人間、必ず引っ張り出されるネ」

クンッ――！

その時また新幹線が揺れて、窓の外に流れる景色が加速した。

――【只今の時速　１８０㎞】――

「ううっ……キよ　みもとに――ぐすっ、ふぇ……近づかん　」

なんだか泣き声交じりの賛美歌が聞こえてきた。

開け放たれた2重扉の向こうの、女性運転士が歌ってるらしいぞ。

どうやらクリスチャンらしい彼女の声は、もう精神的に限界ってカンジだ。マズいな。

「ヴィヤヤヤ呀呀呀ッ、喋ってたらこんな時間ヨ。ココ、デートの準備あるネ」

ココはその場で足踏みするような仕草をしてから、ぐいっ。

束ねられた俺とアリアを掴んで、ずり、ずりり。

16号車の前方――先頭座席の更に先、自動ドアをくぐった向こうまで引きずっていく。

「あ……あたしたちをどうするつもりよ！」

引きずられて喚くアリアと俺から手を放すと、ココは袖から出したカラビナ・フックを俺たちのワイヤーに付けた。

そしてもう1本、ロード線のようなワイヤーをきりきりと伸ばしつつ……

「お前たち、もう何もできない。知る必要も無いネ」

前もって開いていたらしい天井の扉――人がギリギリくぐれるような、恐らく整備用の

[illegible]

俺たちから伸びるフック付きのワイヤーを見て、アリアは……

「アイツ……あたしたちをヨーヨー釣りみたいに吊り上げて、どこかに運ぶつもりよ」

「たぶん中国だろ。俺、パスポート持ってないけどな」

なぜ喩えがヨーヨー釣りなのかは置いておきつつ、俺は深い溜息をつく。

「ふざけてる場合じゃ……！　んっ……！　抜け出すわよ……うーんッ……んんーっ」

もぞもぞーっ！　と、アリアは小さな肩を捻るようにして藻掻く。

ワイヤーは何重にも俺たちを縛っていたが、アリアは全く動けないワケではなさそうだ。肩で俺の胸を押すようにしながら、身を捻り、捻り……何とか脱出できないか藻掻いている。

その時、がくんっ――！！

再び新幹線が加速し、車体が突かれたように揺れた。

「うあっ!?」

その衝撃で、ぐりんっ。

藻掻いていたアリアが、寝返りを打つようにこっちを向いた。

お……おいっ。

さっきまでは俺がアリアの背後にくっついている状態だったが、今度は正面同士で密着

するような姿勢になっちまったぞ。ワイヤーに縛られたまま。

「わ、わっ……！」

こっちを見上げてきたアリアの顔は、俺の顎の下すぐの所にある。

「……ッ……！」

ワイヤーが後頭部にも当たってるせいで、俺は至近距離からアリアの顔を直視せざるを得ない。

アリアも顔を伏せられないらしく、赤紫色の大きなお目々で俺を見て――

「うー　うー　うっ、うー！」

ぎゅい。

ぎゅいいいいんっ！

いつもの急速赤面術を披露した。

さすが本家。通信科の中空知美咲の3倍速で真っ赤になったぞ。

「う！　う！」

……『う』って何だ。『う』って。

「う、う、後ろ向きなさい！　か、顔近いー　近い近いぃー！」

アリアは、おでこで俺の顔面を押してムリヤリ後ろを向かせようとしてくる。

ぐい……ぐいいいーっ！

い、痛ぇー

「お、おいー　にっ、人間が首だけで後ろを向けるワケねーだろ！　やめろって！」

このままじゃ首を180度ねじ曲げられて、往年の名作ホラー映画『エクソシスト』に出てくる、呪われた少女みたいになっちまうぞ！

「おッ……落ちつけ！」

叫びながらアリアの方に顔を戻した瞬間、むちっ！

こっちをもう一押ししようとしたらしいアリアが、俺の頬に――

誤って、唇を押しつけてしまった。

「！」

俺の頭は――今のを『ぶつかった』と認識したらしく、ヒステリア的な意味では大丈夫だったのだがアリアは……思いっ切り『キスしちゃった』と認識したらしい。

「～～～

「しゃす$お！　たらっ&と#！　ぷえ！　$うま&うま%！」

ついに人語ではない何語かで喚き始めたアリアが、うにうにうにうにいーっ！

人の手から逃れようとするウナギみたいに、暴れ出した。

すっ、すごいパワーだ……！　なんだこれ。

「んーっ！　んっ、んっ、んんっ！」

ずりずりっずりっ！　ずるっ！

何かのリミッターが外れたように半狂乱でジタバタするアリアは……お、おっ……？

数センチずつ、体を上へと移動させ始めてるぞ!?

（や、やった……！）

災い転じて福と成す。

手も足も出なかったワイヤーから、アリアの火事場のバカ力のおかげで抜け出せそうだ。

見れば、長いツインテールが……手に握られたネコジャラシの穂みたいに、ワイヤーの束縛から体を滑り出させる役割を果たしてるらしい。なんてラッキーなんだ。

と思ったのも束の間……俺の身に、アンラッキーな事が起き始めた。

俺と密着したままのアリアが上へ上へと逃れていくので、俺の口や鼻が……アリアの、細い首に寄せられる形になってしまったのだ。

（……っ……！）

「……んな時、ふと
俺は兄さん……というかカナに聞いた妙な話を思い出してしまった。
『女の子の首筋は、最も女性フェロモンが発されやすい部位なのよ』だとか何とか。
そのアリアの首筋に、俺は鼻というか顔面を押しつけている状態だ。
こ、これがフェロモンとやらなのかは知らないが……
このアリアの、甘酸っぱい香り。
フレグランス・ボディスプレーか何かだろうか。花のような、果実のような——何というか、ちょっとクセになりそうな可愛い匂いがするんだ。アリアは、いつも。
それを過剰摂取させられた所で、更にアリアは上へ上へと身体を逃していく。俺の顔を擦り付けられるアリアのパーツは、小さな肩、鎖骨、さらに下へ下へと移り変わっていき……って、おい……！　こ、この下って……ちょっ、マズい！　マズいぞ！
「アリアっ……待てー　待てって！」
叫ぶ俺の頬に、次はセーラー服の襟の間にある真っ白な肌がピッタリと密着してくる。
く、首に、もうアリアの……む、胸が、当たってるぞ……！
「んっ！　うっ！」
俺の警告に聞く耳を持たないアリアは、ずりずりずりっ！
数センチずつ、さらに上へズレていき——

（……うッ……！）

――！

俺はとうとう――

アリアの、胸に、顔を埋めさせられた。

4月に体育倉庫で押しつけられて以来の、あの感触が顔に伝わってくる。

この半年でも全く成長してないのは気の毒だが、そのぷっくりとした盛り上がりは――

あの時と同じだった。僅かながらも、確かに、ある。ありやがる。

低い身長や幼い顔に相応しい、小振りで可憐な胸

ブラウス越しとはいえ、それで鼻や口を塞がれた俺は……ぱし、ぱしぱしっ！

格闘訓練でギブアップする時のように、アリアの太ももを手でタップした。

「……？　……っ!!」

ようやく2人の姿勢が大変な事になっていると気付いたらしいアリアが、

「……？　……！　みっ……！　みっきゃあああああ！」

ヤマネコみたいな声を上げ、さらに、ずりずりりいーっ！

身体をズリ上げていく。

「……！」

セーラー服で呼吸を塞がれた俺も、苦し紛れにアリアとは逆へ――下へと、体を逃れさ

俺の顔にはアリアの細い腰、アリアのヘソ、アリアのスカートが次々と押し当てられる。
アリア、アリア、もはやアリアのフルコースだ。
「キっ、キンジ・そっ、それ、そこはっ……こらっー　バカっー　あっ、あっあっ！
かっ、風穴っー　開く、風っ穴っ、やめっ、やめなさいー」
アニメ声で悶えるアリアのどこに自分が顔を押しつけているのか、もう俺は分からなくなりつつ――すぽっ。ついにどこかから顔を出せたと思ったら、アリアの太腿の間だった。きめ細やかな白肌の愛らしい両脚を、担ぐような姿勢になっている。
そして、不幸中の幸いで――やったぞ　腕が自由になった。
「……アリア。もう少しだけガマンしてくれ。すぐ終わるから」
何とか息継ぎの出来た俺は、アリアのしなやかな足を押し上げ――黒いストッキングに包まれた小さな膝小僧、ふくらはぎの間を抜け、ワイヤーから脱出していく。
よし――ついに脱出できたぞ。
……そして……
ああ、分かってる。
確かめるまでもない。自分自身の血の流れなんか、もう。
これだけ頭から爪先まで、女子の全身をくまなく満喫してしまったんだからな。

俺は一つ、長い瞬きをして――目を開いた時――

鏡を見ずとも、その目つきがさっきまでの自分とは異なっている事を理解していた。

俺の眼は素早く、さっき顔を洗おうとして入れなかった洗面室の扉に向けられる。

アリアを置いて立ち上がり、取っ手を掴むが……扉は開かない。

これは、カギが壊れた感じじゃない。密封するように接着されている。

窓越しに見れば――洗面台の蛇口、換気扇、コンセント　室内にある穴という穴が、透明なシリコン剤のようなもので厳重に塞がれている。パッと見では分からないように。

――なるほど。1㎡。そういう事か。

この密封された洗面室に、あの爆泡――気体爆弾が満たされているんだ。

顔を寄せて見れば、窓の内側の隅には起爆装置と思われる超小型のプラスチック爆弾が張り付けてあった。これを無線で起爆し、窓を割って――気密が破れれば……

ドカン――ってワケか。

（残念ながら……コイツは解除不能だな）

かぶりを振りつつ足元を見下ろすと、アリアは……すんっ、ぐすんっ…

何か悪い男にヒドい事をされた少女のように、床に突っ伏して啜り泣きしていた。

「……パパ、ママ、神様、許して……これは……あたしのドレイが暴走しただけなの……あたしは何も、ゆっ、ゆっ、許してないわっ……！」

俺は何とかなかった独りぼっちでいるアリアの傍らに、そっと跪く
そしてその震える肩や背中にまだ乗っているワイヤーを丁寧に除けてやった。
「――キ、キンジっ！」
がばっ！
飛び起きて崩れた正座をしたアリアが、俺の襟首を掴んでくる。
「あんた、ゆっ、許さないからー　今の……今の、今のは許さないー　せっ責任　！」
俺は涙目で喚くアリアにそっと手を添えて――
「ああ、許さなくていい」
その乱れたツインテールを、優しく整えてやった。
「次は君に許しをもらってからする。約束するよ」
「そうよー　あたしが許さない事は――って、あ、あれっ、ちっちっ、ちち違うわよ！
そういう許す許さないじゃなくてっ……！」
俺は5秒で丸め込まれかけたアリアの頬へ、右手を移す。
その小さく滑らかな頬に、触れるか触れないか――という距離。手のひらの体温だけが、
その頬に伝わる距離まで。
アリアは、うゅ、と、くすぐったそうに小さく震えてる。
「ほら、君の許しをもらわない限り――俺は君に、指一本触れられなくなった。知ってた

かい？　アリアの言葉にはそういう力があるんだ。俺にだけ伝わる――魔法の力が」

「ま、まほー？　なっ、何、何の話っ」

「その逆、しろと言われた事なら――俺は、どんな事でもしてあげるよ。それもアノアにだけ使える魔法だ。考えてごらん、俺に、されているところを」

「？？？　……。……！　！　！！！」

初めは混乱し、一応何かを考えてみて、それから急に慌て始めたアリアは――

ぷんぷんぷぷぷん！　ぷぷぷぷぷん！

はは。何を考えたのかな？　絶句して両手を振り回し始めた。

「俺は命令を待ってる。君の命令を受ける、その準備がある――戦え、ココを逮捕しろ。この列車に乗った数百人の乗客の命を救え――という命令を」

――ハッ――

と、アリアが我を取り戻すのが分かった。

「あんた……なったのね」

「あれだけの事があったんだ。ならないと、君に失礼だよ」

おいおい、俺よ。

ヒステリアモードのトリガー――性的興奮――そのヒントになるような事を言うなって。

まあ、お子様アリアは「？？？」って目をしてるから大丈夫っぽいけどな。

この子に現代ファーリック・ホームズ並の推理力が遺伝していたら、ヘルは少し危ない発言だったぞ。

「め……命令は、しないわ」

アリアは立ち上がると俺に背を向け、大井に開いた扉――その先に見える、時速１９０㎞の夜空を見たげた。

「武偵憲章６条。自ら考え、自ら行動せよ――人の命令を聞くだけのドレイは、いらない。今のあんたはヘンな事も言うけれど、札棒に格上げしてあげられる武偵だわ」

相棒。

ホームズ家の人間は自分のパートナーと共に戦う時、その本当の実力を発揮する。

つまり、これで揃ったワケだ。アリアと、ヒステリアモードの俺がな。

ココ。ここからの俺たちは、手強いぞ。

「それにあんたは――普段でも言うこと聞かないし。だから命令なんかしてあげない」

――べえ、と振り返ってベロを出したアリアに、俺は苦笑いを返すのだった。

15号車に入ると、そこでは白雪が医者を妊婦の所に連れてきていた。

女性は産気づいてしまったのか、お腹を押さえて脂汗をかいていたが……かなり高齢のその女医は落ち着いた雰囲気で手当てを始めてくれている。

ここは――運が良かったな、こういう医者が乗り合わせてくれていて。

「キング！　ダメだ、他に武偵はいなかったぜ」

「16号車と15号車にいた9人で全部だよ、遠山君」

声に顔を上げると、武藤・不知火が右往左往する人混みに揉まれつつ戻ってきていた。

乗客を掻き分けて400mもある電車を往復してきた2人は、少し息を切らしている。

「爆弾は見あたらないわ」「警察にも通報したけど……」「犯人も見つかってない」

2人の後ろから、臍根、早川、安根崎――ヒステリアモードの俺は女子の名前を容易に思い出せる――さっき俺と不知火で良からぬ妄想をしていた女子3人もやってくる。

「もうどっちも見つけた。こっちで作戦を立てよう」

俺は白雪の背に手を回し、武藤・不知火・通信科の女子たちに手招きする。

16号車と15号車の間を会議室にした俺は――

先頭の16号車の洗面室に仕掛けられた気体爆弾の事、犯人と交戦し屋上に逃げられた事、敵の戦闘力が非常に高い事をまず伝えてから、

「この車内で武装してるのは俺たちだけだ。どこかから犯人が車内に戻った場合に備えて臍根・早川・安根崎の3人は1号車、4号車と5号車の間、11号車と12号車の間、白雪はここを守ってくれ。不知火は――対テロリスト訓練の経験が豊富だ。7号車と8号車の間、中央を受け持って欲しい」

あと、何日が等間隔になるような仕掛を仕込んだ」
「それと待機中、鷹根たちは武偵高・警視庁・鉄道公安本部に連絡して爆弾解除の方法を模索してくれ」
「――キンジ。オレはどうするよ」
役割を告げられなかった武藤が、問いかけてくる。
「もう新幹線の運転士がグロッキー、なんだ。武藤、代わって操縦してくれ。3分に10kmの加速……繊細な操作が必要だが、できるか」
「できるに決まってんだろ。車輌科なら1年でもできるぜ」
「爆弾は運転席の真後ろだ。逃げ場は無いぞ」
覚悟を問うように俺が言うと、
「お前なら逃げるか？」
武藤は白い歯を見せて、満面の笑みを返してきた。
どうやら大丈夫そうだな。
「――アリア、行くぞ。銃刀法違反と監禁の容疑で、ココを逮捕する。あの子に、子供はもう、お家に帰る時間だって事を教育してやろう」
俺が指で弾いて見せた腕時計は――18時22分を指している。
東京まで、あと、1時間。ここからはもう、安全運転はできない速度を強要される。

緊急事態にリーダーシップを見せた俺を、アリアは驚いたような目つきで見上げていたが……俺と目が合うと「あっ」と小さな声を上げてわたわた視線を逸らし、

「う……うんっ！」

何やら俺の妹にでもなったような調子で、素直にコクコクうなずくのだった。

3弾　第二の双剣双銃

通信科の3人は片耳に挿すタイプの骨伝導式簡易インカムを複数持っており、それらを受け取った俺たちは互いに連絡を取れるよう周波数を合わせた。

その後、全員が配置についたのを確認していると…まず不知火からの通信が入った。

『……遠山君。7号車にどこかのTVのスタッフが数人乗ってて、カメラ機材も持ってる、これが事件だと分かってから、ずっと車両の無線LANを使って放送してたらしいよ』

「放送……この状況でか？」

『うん、嬉しそうにしてる。スクープ現場に居合わせることができて』

まったく……現実感の無い連中だな。

全員まとめて死にかかってるっていうのに。

「……放っておこう。報道は自由だ」

さっき落としたバタフライナイフを拾いつつ、俺はそれだけ伝える。

兄さんの事があってから、マスコミは嫌いだが——どうせ、情報は止められない。ただこれが良くない事に繋がらない事を祈るのみだ。

——車両の先頭、俺の隣では、

「キンジ、あんたも踵鉤爪を使いなさい」

と言うアリアが白いスニーカーを履き直していた。

不安定な足場に出る場合に備えて、武偵は常にチタン合金の鉤爪を携帯している。

ベルトのバックルやホルスターの底に秘匿されるその金具は、変形ロボットのオモチャみたいに形状を何種類かに組み変える事ができるものだ。

アリアはそれを靴にセットし、新幹線の一から転落しないためのスパイクにしていた。

「バスジャックの時はルーフに打ち込んでワイヤーの支点にしたけど、今回は白兵戦よ。ワイヤーを切断される恐れがあるわ」

「――正しい判断だ」

と、俺も鉤爪を靴に付けている間……

先に準備ができたアリアはこっちに背を向け、黙って屈伸運動をしていた。

「あのさ。大阪での、レキとあんたのこと――」

しばらくすると、気まずい沈黙を打ち消すようにアリアが切りだした。

「あたし、気にしてないから。あんた達のプライベートに踏み込みすぎた事、謝るわ」

これは……すごく、気にしてる口調だぞ。

どうやら修学旅行中、ずっと俺とレキが一緒にいた事をまだ怒ってるらしい。

「アリア。誤解を与えてしまっているようだが……あの時、俺はレキに狙撃拘禁されてた

んた　レキは加[redacted]だから多くを語らなかったが、俺の身を守るつもりだったらし、
ふ　ん……」
そう言ったアリアは、半分納得、半分疑い、というカンジで振り返る。
「――まあいいわ。その辺のことは、ちょっと待つことにしたから。待ちの一手よ」
「待つ？　何をだい？」
「どうでもいいでしょ、そんな事。はい、この話はこれでおしまい。あー、それにしてもツイてないわ。誕生日が近いのに、こんな事件に巻き込まれるなんて」
チラッと俺を見てから、アリアはスパイクを試すように軽く足踏みする。
「ほんと、ツイてないわ。来週、誕生日なのに」
……何で2度言う。誕生日、誕生日って。一応、俺は認識してるぞ、それは。
そう思った俺と目が合うと、アリアは少し慌てたような顔になり、
「あっ、えっ、えっーと。キンジ。あんた、実家どこよ」
かなりわざとらしく、話題を逸らしてきた。
何だかよく分からないが――ここは合わせてやるか。
「巣鴨だよ。祖父母が住んでる」
「スガモ……？　この新幹線で寄ってく予定とかあった？　だったら残念だったわね」
と言うアリアは、あまり日本の地理に詳しくないようだ。

「都内だよ、巣鴨は」

「都内って……じゃあ何で寮生やってんのよ。通学すればいいじゃない」

「　まあ、色々とね」

と、靴を履き直した俺は、多くを語らずにアリアに向き直る。

それで『準備完了』という空気が流れ――

アリアは自分の両頬を両手でぱしぱし叩いて気合いを入れる、可愛い仕草を見せた。

さあ――ここから、勝負よ。と自分に言い聞かせるように。

2人組が久々に組むときは呼吸を合わせるために多少雑談しておくのがセオリーだが、それも済んだな。今の会話で、図らずも

「行くわよ」

さっそく梯子に飛びついたアリアの小さな手を――

俺は上から、自分の手で包むように覆う。

「なっ何っいきなりっ。手、手っ手っ」

奇襲に弱いのか瞬時に赤面したアリアのスカートを、俺は小指でピンと弾く。

「梯子や階段を上る時だけは、レディー・ファーストの例外だよ」

と、アリアより先に梯子を上り始めたのは……後で俺と自分のスカートとの位置関係に気付いたアリアに風穴を開けられないためでもあるが――

ドクター・ートの頭に、ルー子な指示が頭をよぎったかもしれない。
もしこの推理が合っているとしたら、外に出る1人目は危ないからな
白分のスカートを両手で掴んで赤くなっているアリアを下に置いて、俺は――
屋上に開いた四角い出口から、すっかり暗くなった外へ上体を出した。
「……！」
――ゴウッ――
その途端、俺の背中が風圧に突き飛ばされる。
時速２００㎞以上で走る新幹線――その屋上を流れる気流は、想像以上の激しさだ。
煽られた防弾制服とネクタイが、バタバタと音を立てる。
（だが、立てない程じゃないぞ――）
俺は風に逆らい、鉤爪を頼りに立ち上がる。
ココは　いた。
すでに16号車の後部まで移動しており、そこに1つだけあるパンタグラフ――車両上の架線から車両に電力を供給する金具だ――の手前に設置した大きな装置で何やら光信号のようなものを点滅させている。よし。こっちには背を向けてるぞ。
（……気づかれてないな）
空気抵抗を減らすため、身を屈めた俺の足元で――

バタンッ。

いま出てきた出口のフタが、閉ざされる音がした。

ごろごろっどたっ　上って来ようとしていたらしいアリアが床に落ちる音がする。

「やっぱり、そういうことか」

俺は舌打ちし、振り返りざまに――

バッ！　バババッ！

右手のベレッタから銃弾を放った。

ギンッ！　ギギンッ！

俺の背後に迫っていたもう1人のココが、幅広の青竜刀を盾にして弾丸を逸らす。

「きひっ――！」

ギャリッ！

足のスパイクを鳴らしたココは、ケモノのようにその場に四つん這いになった。

「炮娘！　余次来了！」

「――猛妹！　抓住！」

車両の前方と後方に2人いるココ同士が中国語で叫び合い――

発砲音に気づいた車両後方のココが、短機関銃・UZIを抜く。

俺はその隙に、猛妹と呼ばれた青竜刀を持つココから、車両の中央辺りまで後退した。

[illegible]2人の[illegible]両の前後から挟[illegible]ようにな[illegible]
[illegible]、さっき推理した通り、だな

この、ココとココ。見た目が全く同じところを見るに、双子か何かだろう。
俺がそれを先読みできて、斬られずに済んだのは――
ヒステリアモードの頭が、2つの情報からこのトリックを見抜いていたからだった。
1つめの情報は――さっきアリアを吹っ飛ばした、爆泡のシャボン玉。
あれは、この間の夜戦でレキを傷つけた光と同じものだった。
だが、あの香水瓶のような発射装置の射程距離は短い。
少なくとも2km離れた狙撃手に出来る攻撃じゃなかった。
ということは、あの時、もう1人の誰かがレキにあの爆泡を浴びせた事になる。
格闘戦を得意とするココ――猛妹が、その犯人だ。
猛妹は猟人たちの気配に紛れてレキに忍び寄り、森の闇からあの気体爆弾を放ったのだ。
そして2つめの情報は――車内でのココのアリアとの会話。
その会話から、俺は2人目のココの見た目が1人目と似ている事を悟っていた。
アリアはココが自分と似た姿形をしている事に腹を立て、水投げの目に近接拳銃戦を挑まれた際、『その髪型をやめろ』と言っていたらしい。
たが、ココはそれを聞いた覚えがないと言っていた。

それどころか、実際のアリアを見るのはこれが初めてのような事さえ口走っていた。
つまり武偵高でアリアと近接拳銃戦を繰り広げたのは、別のココだったのだ。瓜つの姿をした、もう1人のココが――それがいま車両の後方にいる、炮娘だろう。
このトリック……当然といえば、当然だ。
『万能の武人』を自称していたココだが、1人の人間がこれも出来るワケはない。格闘。銃。ココたちはそれぞれの得意技を分担し、万武――『万能の武人』を演出したのだ。
「ココ、ココ――おしおきの時間だ」
俺は左右のココを順番に見つつ、左手で胸元に収めたデザート・イーグルを抜く。
DE。父さんの形見のこの大型拳銃も、ヒステリアモードなら扱えるハズだ。
右手にベレッタ、左手にDE。
2丁拳銃で、相手してやる。
そういえば刀剣も、俺はバタフライ・ナイフとスクラマ・サクスの2振りを持ってるな。
旅行中だったから銃弾に余裕はない。弾切れになったら、2人のココを……双剣で相手するしかない状況だ。
――アリア。理了。
お前たちの十八番、ちょっと借りるぜ。

遠山キンジ版――見様見真似の双剣双銃だ

「キンチお前……HSS、なってるカ。どうやったネ」

俺の雰囲気がさっきと違うことに気づいたのか、刀を携えたココ――猛妹が俺を睨む。

「アリア使ったのか、ココに似てるアリアを使ったのか」

短機関銃を構える炮娘は、驚いたような表情で赤くなる。

自分たちに似たアリアで、俺がヒステリアモードを――性的興奮をトリガーに、日覚めさせた。それを悟り、妙な警戒心を高めたみたいだな。

……失敬な。色んな女性でなった前科があるから声高には言えないが、誰でもいいってワケじゃないんだぞ？　俺だって。

「き、気をつけるネ、猛妹。いろいろと気をつけるネ」

「是、炮娘。何にせよ……HSSは無傷で捕らえること、ムリある」

と、ステレオで話した2人は――元々鋭めの目つきをさらに吊り上げた。

さっきより一段強い殺気が、左右から放たれてくる。

痺れるような、本物の殺気だ――

――ようやく、本気になったってワケか。

今までのココは、相手を油断させるために敢えてユルい自分を見せていたらしい。

ははっ。先生だけあって、戦闘スタイルが似てるんだな。ゴスロリ制服の誰かさんと。

『キンジ、オレだ。あと10秒で加速する。落っこちるなよ』
運転席の武藤から、インカムに連絡が入る。
『どうなってるのキンジー　出入り口が開かないわー』
被せるようにして、アリアの金切り声も聞こえてくる。
「こっちは現在交戦中だよ。アリアのそっくりさんが2人、車上にいる」
俺はそれだけ返して、アリアに加勢を促すような事は言わないでおく。
今の俺はヒステリアモード。女性を危険な目には遭わせたくないからな。
「手加減不要ヨ、猛妹。殺すもやむなしネ」
「是。殺すもやむなしネ――！」
だっ――！　青竜刀を構えたココ、猛妹が進行方向から駆けてくる。
速い。時速250kmの追い風を受けて、一瞬で距離を詰めてきた。
そして野球でいうヘッドスライディングみたいな体勢で、飛びかかってくる。
「――――！」
ぶんっ！
全身のバネを使ってこっちの足元を薙ぎ払った青竜刀を、俺は軽く跳躍して躱す。
普通に飛び上がったつもりが、風圧で後方へ流される俺めがけて
パパパパンッ！

銃を持った乃々香が、背後からDE1を発砲してきた。
空中で身を捩った俺は――ベレッタ・キンジモデルから同数の弾丸を放ち、銃弾撃ちで迎撃する。
敵弾が全て、火花と共に散らされると――
「――覇ッ！」
今度は屋上から伸びるように、逆立ちした猛妹が俺めがけて足を蹴り下げてきた。
仕方ない、女性を踏むのは心苦しいが――
俺はココの両足と自分の両足の裏同士を合わせる。
そしてジャンプ台から飛び上がるように、跳躍した。
猛妹とヒステリアモードの俺。合わせて2人分の脚力で跳んだだけある。高い。高速で流れる電線とそれを吊す架線柱の梁を飛び越え、2、3mは飛翔した。
俺は空中からDE――ベレッタの3倍の威力を誇る銃で、猛妹の青竜刀を狙い撃つ。
――ドオンッ！
迫撃砲のような発砲の反動で、俺は一瞬空中に留まる。
さすが自動式拳銃最強クラスのDE。この威力、ハンパないな。
ばちんっ！　と弾かれた青竜刀は猛妹の手を離れ、新幹線の背を風で後方へ滑っていく。
車両後方で、それを砲娘が拾い上げた時――がくんっ。

まだ滞空する俺の足元、新幹線が前方に加速した。
これで時速――２６０㎞――！
炮娘が青竜刀を新幹線の背に突き立て、杖のようにしてバランスを保つのが見える。
「耶威耶威耶ッー」
青竜刀を失った猛妹は掛け声と共に膝立ちになり、両袖から大きな扇を出した。
（戦扇――か。闘るのは初めてだな）
俺は空中から、真紅と金で着色された扇が広げられるのを見下ろす。
格闘用の扇は白雪も使うのを見た事があるが、あれは竹と和紙で出来ていた。
だが、猛妹の中国扇は金属製。月光に煌めくその縁は、刃になっている。
駆けたココが全身を捻って飛び上がり、ミキサーのように俺を切り刻もうとする――
その刃を、カツンッ、カツンッ！
俺はスパイクで蹴るようにして、再び宙を舞った。
そしてＤＥ。もう一度、空中から発砲する。
――ドウッ！　ぢんっ！
猛妹は咄嗟に鉄扇を二枚重ねにして、５０口径弾を何とか逸らした。
しかしＤＥの威力は最早チート級だ。扇を両方破壊し、猛妹を車両前方へ押し返す。
再び反動で宙を流れた俺は、空中の架線を擦るように踏んで自分の軌道を修正し――

ようやく新幹線の屋根に着地して、広げた両腕でコイ姉妹に2丁拳銃を向けた浜松駅の光が、無数の曳光弾のように俺の周囲を流れていく。

我ながら――

もう人間の領域じゃないな。この戦い。

時速260km上での拳銃戦なんて、カンフー映画でも見た事ないぞ。

香港の名監督、ジョン・ウーのカメラが無いのが残念だよ。

――シャアアアア――

緩いカーブに差し掛かった新幹線が、バンク角を取って左側に傾く

高速列車は脱線を防ぐため、飛行機のように車体を傾かせてカーブを止がるのだ。

車体には遠心力が働き、俺たちは列車と共にナナメに立っているようになる。

傾いた地平線を背に、壊れた鉄扇を捨てた猛妹は半身になって――ばっ。

手のひらをピンと立て、両腕を水平に広げ、開いた両膝を直角まで曲げて腰を落とした。

そして、だんっ！

武倶高駅で理子がハイマキにやったのと同じように、右足を踏みしめる。

「さすがネ、キンチ。お前ホントにいい使い手ヨ。できれば殺りたくなかた」

まっすぐ俺に右手を向けた猛妹は、ばたばたっ！　袖を振り――じゃきんっ。

スリーブガンの要領で袂から小さな何かを取り出し、手に握り込んだ。

……見えない。何だ。何を出した。

良くない胸騒ぎがする。

あれは、何か――決め技の類だぞ。

警戒していると、猛妹とは反対側から――発砲の気配が――！

「！」

伏せた瞬間――パパパンッ！　という発砲音が鳴り響いた。

こっちへ走ってくる炮娘のＵＺＩから放たれた弾丸が、俺の頭上を翔ける。

（……危ない！）

いま躱した流れ弾は、前方の猛妹に当たりかねないぞ、

そう思ったヒステリアモードの俺は、瞬時に銃弾撃ちの構えを取ったが――

流れ弾は全て、猛妹の左右スレスレの空中を通過していく。当たらない。

炮娘――銃を得意とするココは、もし外れても妹に当たらないような射撃をしたのだ。

あの瞬きする間に無数の弾を放つＵＺＩ――サブマシンガンで。

凄い銃技だ。俺、アリア、カナ級の腕だな。

そんなヤツが、この世にまだいたのか。

いや……驚くべき点は、それだけじゃない。

猛妹――もう１人のココは、全く怯まなかった。

娘の男が自分に当たらない事を確信していたのだ　まるで自分が自分を撃たない事を分かっているかのように。

（心同体ってヤツだな、この姉妹は……！）

俺は跳ね起きて車上に片膝をつく。

反撃の拳銃を振り上げようとするが――

UZIのロングマガジンを挿し替えながらの砲娘が、たんたんっ、と俺の銃と頭を蹴りながら駆け抜けていく。猛妹の方へ。

ずざぁー、と新幹線の先頭辺りでヘッドスライディングした砲娘は――

猛妹の足元で、そのまま伏せた。これから始まる何かから、身を守るように。

「――――」

俺の目が、猛妹が手から握り込んでいた道具を出すのを捉える。

「花火の時間ネ」

あれは――

気体爆弾のシャボン玉を撃ち出す、香水瓶！

「――爆泡小龍鎖ー」

掛け声と共に風上から放たれた爆泡は、暗い視界でよく見えないが――複数。

ジグザグに並んで、小さな龍のように俺へと迫ってくる。

（しまった……！）

あれは――躱せない。

爆弾の殺傷圏は普通、爆心点から広がる『球』だ。仮にその直径が車両の幅ほどの長さであっても、前後に躱すことができる。

だが――車両上を被うように連なる複数の爆発は、躱せない。逃げ場が無い。

喰らうぞ、こいつは。ある程度のダメージは覚悟しないと……！

俺が舌打ちしてクロスさせた両腕で頭部を守った時――

猛妹側――龍で言えば尻尾の先で最初の爆泡が弾けた。

ドドドドドドッ――――！

爆発が次のシャボン玉を爆発させ、それがさらに次のシャボン玉を――と、爆発が連鎖する。まるで、ひょろ長い中国龍が燃えさかりながら姿を現すように。

「――！」

俺は足元に力を入れて衝撃に耐えようとしたが――ドンッ！

怒り狂う龍に体当たりされたかのように、車両後方側へ吹っ飛ばされた。

衝撃と熱風に呼吸が止まり、意識が一瞬――飛ぶ。

それでも何とか左右の銃を放さず、両肘で屋上に立った俺の耳に――

「猛妹！　キンチ落とすネー　狙姐の来援ある！　予定より早く来たヨ！」

ルシアのココの声が聞こえる
空を仰ぐと、後方の空から、バラバラバラバラ……
雲間の星を掠めるように、ヘリがやってくるのが見えた。
（こ……ここで敵に援軍かよ……！）
さっきココが言っていた、『デートの約束』。
それはこの救援ヘリに乗った仲間との合流・脱出の事だったらしい。
俺が眉を寄せるヒマも無く、猛妹は風に揉まれる袖から小さな瓢箪を出して――
ぐいぃ――っ！　ぱっ。
天を仰ぐような姿勢で真上を向き、中身を一気飲みし、放り捨てた。
「――八卦酔武掌――」
ゆらり。一瞬、バランスを崩したように見えた猛妹が――
てんったんったんっ！　とツインテールを新体操のリボンのようにヒラヒラさせつつ、
側転やら宙返り前転やらで俺に迫る。
「――!?」
初めて見たその不規則な動きに、俺の反応が遅れた。
捨てた瓢箪を踏んで転ぶような動作まで交えられ、銃の照星で猛妹を捕らえられない。
な、何だあの動き。酒を呑んで戦うなんて……ありえんぞ

「じゃおーッ！」

がばっ。

猛妹は何とか立っていた俺の腰に、広げた両脚でしがみついてきた。

「くっ……！」

いや、足だけじゃない。

しゃっ――と俺の首に回されたのは、ツインテール

これは『水投げ』の日にやられた、髪を使う変則的な裸締め。その、対面版だ……！

「双蛇刎頸抱！」

間髪を入れず、ココは自分のツインテールを掴んだまま、ぐいーっ！

思いっきり、身体を後ろに倒した。

「……！」

始業式の日と同様、俺の気道と頸動脈が一気に絞められる。

俺は綱引きのようにココのツインテールを掴み返し、対抗しようとしたが――

ココは両腕に加え、背筋力で左右のテールを引っ張ってきている。

だ、ダメだ……力負けする……

「きひひっ！　お前、初めから中華の姫に勝てるワケなかたネー　平和ボケの日本人！」

マズい……意識が、遠のき始める――

やられた　ヒステリアモードの私が、冷静にそれを見抜けてくる

これは、負けだ。またしても。

敗因その1は、2対1だった事。

しかもその2が、阿吽の呼吸で完璧な連携力を発揮していた事だ。

チームワークによる、個々の能力の増幅。

そう、俺は――いつも俺たちがイ・ウーの刺客にやっていた事の裏返しをやられたのだ。

（コイツも……因果応報、ってヤツか……？）

敗因その2は……ヒステリアモード。その欠点が、露骨に出た。

俺は女子を傷つけたくない　心で、アリアを参戦させず戦力を落とし、敵のココでさえ守ろうとして隙を生じさせた。

甘い。甘すぎた。

ホントに……平和ボケの日本人だな。俺は。

自嘲気味に苦笑いする、顔の表情筋にすら……力が入らなくなってくる。

ブラック・アウト――脳に血が回らなくなり、視神経が機能を停止する――その感覚を最後に、俺が失神しかけた時――

――ビシュッ！　ビシュッ！

鋭い衝撃が、猛妹のツインテールから伝わってきた。

「あうっ!?」

がくんっ、と仰け反った猛妹が俺の足元に落ち、絞め技は――

一気に、解けた。

俺の手には、艶々とした髪の束がまだ握られている、

後ろ向きにでんぐり返った猛妹の髪型は――ショートカットに、なっていた。

左右のツインテールが、断ち切られたのだ。根本の部分で。

まだ歪む俺の視界の下部、新幹線の屋上には新しい弾痕が2つ刻じている。

(い、今のは……狙撃!?)

それに気づいた時、

タァン……タァン……

遠い発砲音が、聞こえた。

この――首。

忘れもしない。

何度も何度も、細紐に刻まれるように刻かされた首
ドフグノフ狙撃銃の……首だ
「違うッ――あのヘリ、狙姐のと違う！　誰ネ！」
遠雷のような銃声に、炮娘が焦るような声を連ねる。
揺れるヘリから、走る新幹線の上で取っ組み合う人間のツインテールの根元を撃って、2本とも切断する。しかも名銃とはいえ、時代遅れのSVDで。
そんな事ができる超人的な狙撃手を、俺は1人しか知らない。
「――レキ……！」
新幹線を追尾してきたヘリは、OH－1。
星伽神社のガレージにあった、川崎重工の高速ヘリだ。
その開け放ったハッチから――
身体のあちこちに包帯を巻いたままのレキが身を乗り出し、狙撃銃を構えていた。
それに驚くより早く、ドフグノフの銃口が閃する
――ビシュッ！
超音速の7・62㎜×54Rが、猛妹の右足を掠めるように弾く。
「阿っ！」
短い悲鳴をあげた猛妹は、踵を押さえて――べちゃ。その場に転倒した。

これは……出血はしてないが、アキレス腱をやられた転び方だぞ。
レキ。相変わらず、なんて狙撃の腕だ。重傷者のくせに。
たった一発で、あの猛妹を立ち上がれなくさせた。
「――――！」
踏みとどまることができなくなった猛妹が、風に煽られ――
車両の後方へと、ズルズル滑っていく。
はしっ、と、なんとかパンタグラフの根本の信号装置にしがみついた猛妹は、そのまま装置の陰に身を隠す。レキの追撃から身を守ろうとしているらしい。
『キンちゃん……あのっ、もしもしっ。作戦中ごめんね』
唖然とする俺のインカムに、通信が入る。
何やら慌てた声の、白雪だ。
「どうした」
『星伽の時江田さん――運転手さんから、キンちゃんにお電話ですっ』
お、お電話？
眉を寄せる俺の耳に、かちゃ、ぴっ、と白雪の携帯がインカムと接続されるような音が聞こえる。
『――遠山様、申し訳ございません。星伽の時江田です。今……のぞみ２４６号の後部を

吸入でおります。

……この声。

俺たちを車で神社まで運んでくれた、あの運転手さんだぞ。

あの高速ヘリから、白雪を経由して話してるのか。

「ど、どうして……！」

「これは――私共の失態です。テレビを見た幼い龍巫女たちが騒ぎ立て、それをお聞きになられたレキ様が……銃を取り、このヘリで白雪様の救援に向かおうとしていた風雪様を降ろし、操縦手の私にご自分を乗せて飛ぶよう命令なされたのです」

車両後方を見れば、ヘリはもう新幹線に接触しそうな距離まで降下してきている。

OH-1の副座、そのハッチから半身を出したレキは――

そのショートカットの髪を風に暴れさせながら、列車の最後尾を見下ろしている。

そしてヘリの操縦席に何かを命令し……

『――なりませんレキ様、もう超過禁止速度を超えております。これ以上は……機体が、もちません……！』

蒔江田さんがレキに返したらしい声が聞こえ――

それでもレキが蒔江田さんにドラグノフを向け、更に何かを命令するのが見えた。

……バラバラバラバラバラ……！

ＯＨ－１は、加速しながら更に降下してくる。新幹線の最後尾、スレスレまで。
乗り移ってくるつもりか……レキ！
ダメだ。やめろ。
お前は傷ついてる。
戦うな！
『キンジー　ヘリを退避させるのよー　前にトンネルが！』
星伽の運転手と俺の会話を聞いていたらしいアリアから、悲鳴のような声が届く。
進行方向に振り返れば、車両は緩やかなカーブを描きながらトンネルに向かっていた。
トンネルの－は山だ
このままだと――ヘリが、斜面に激突するぞ－
『キンジ！　あと10秒で加速だッ－　３００を超えるぞ－』
武藤の声が、事態に追い打ちをかけてくる。
『蒔江田さん、上昇するんだ－』
『……ッ！』
限界以上の速度での精密な操縦に集中しているのか、ヘリからの返事は無い。
『雷姫－　鳥を撃つしか能ない　北狄の分際でッ！』
車両前方から、炮娘が腰だめに構えたＵＺＩで――バババババッ！

銃の射程圏外からではあるが、ヘリを遠ざけようと弾幕を張る。
レキはそれを意に介さず、ヘリのハッチの取っ手に爪先をかけて逆さづりの姿勢になり、ドラグノフを構えた。
パッ！　と、その銃口が一閃したかと思うと――ビシッ！
「玖ッ！」
炮娘のＵＺＩが弾き飛ばされて、線路へ落ちていく。
次の瞬間、もう堪えきれなくなったヘリが迫る山を避けようと機首を上げ――
それを感じたレキが、ひらっ。空中でヘリから飛び降りた。
――ざんッ！
レキは新幹線の最後尾、その屋上に銃剣を突き立ててしがみつく。
その蒼色の瞳は、まっすぐこっち――俺と、ココたちの方を向いている。
――ゴオオッ――――！
新幹線が時速３００㎞を保ったままトンネルに突入し――
――ばんっ！
闇の中、周囲を流れる気流が一気に強まった。
（うッ……！）
気圧が一瞬で変わり、肺が破裂しそうになる。

俺は渦を巻く風に押しつぶされ、新幹線の背に伏せざるを得ない。
歯を食いしばって、轟音の中で耳を澄ます。
トンネル内に反響する、のぞみ246号の駆動音に――ヘリの爆発音が混じらないか。
緊張しつつ、耳を劈く音の中を探る。
だが……大丈夫だ。
爆発音は聞こえない。
OH-1は、その愛称の通り身軽な機動力を誇るヘリだ。
かつて武藤に動画を見せられたが、イザとなれば宙返り反転だってできる。
ヘリは決死の機動技で山の斜面を避け、難を逃れたのだろう。
(舟江田さん――さすが武装巫女たちのお抱え運転手だな)
頭上では、トンネル内に等間隔に灯された電灯が流星雨のように次々と流れていく。
映画のようなその光景の中、400mほど離れた列車の最後尾にレキがいる。
レキは何とか立ち上がり、一歩、また一歩と進んでくる。こっちへ、向かって。
――ダメだ。
来るな、レキ！　死んじまうぞ！
お前は負傷者だ。こんな熾烈な条件下で戦える体じゃ、ないんだ……！
「蕾、姫……！」

かっ！　と一瞬に振り返ると、娘が袖から新しいG－を出して手に握りつつ、流線型の斜面を描く新幹線の先端側へズリズリと這っていくのが見えた。

一旦あの斜面に身を隠して――レキが射程圏内に来たら、銃で迎撃するつもりだな。

「しら……ゆきッ……！」

呼吸すらマトモにできない風圧の中で、俺はインカムを挿した耳を押さえて叫ぶ。

『キンちゃん！　大丈夫!?』

「俺は……大丈夫だ。それより、レキが……ヘリから、飛び移ってきた！　アイツは、瀕死の重傷だ、戦わせちゃダメだ……！」

『レ、レキさんが……電車に!?』

バッ――！

という音に続いて、新幹線がトンネルから飛び出す。

レキはスカートをもぎ取られそうなくらいにはためかせながら、もう最後尾の車両から次の車両へと渡ってきている。

――仕方ない。止まれと言って止まるレキじゃない。

やっとマトモに呼吸ができるようになった俺は、ずっと密かに考えていた最後の手段を取る事にした。

「白雪、レキを戦わせないためにも、乗客を救うためにも――お前に頼みがある」

「私に、頼み……？」

「新幹線の先頭車両、この16号車を切り離してくれ。お前の刀で」

「……えっ……！」

「実はそのために、お前にそこに立ってもらったんだ。気体爆弾は先頭車両――16号車にある。乗客は15号車以降に集めてあるから、切り離せば被害を最小限に食い止められる」

「でも、キンちゃん……敵と爆弾と、車両に残るなんて……！」

俺の身を案じる白雪は、すぐには新幹線斬りを引き受けてくれそうにない雰囲気だ。

だが、押し問答をしてるヒマは無さそうだぞ。

列車は、人が避難した無人の静岡駅ホームを走り抜けていく。

仕方ない。あまりやりたくなかったが……ヒステリアモードの技を使わせてもらおう。

かつて兄さん、というかカナに教わった術だが――

こんな時だが、できるだろうか。

「白雪」

声質は、こんなカンジで良かったかな。

落ち着けキンジ。落ち着けば出来るハズだ。

「白雪。聞こえてるかい。白雪」

俺は少し低い声で、白雪の心に潜りこむように語りかけ始める。

「は、はい」

「白雪は俺のことを昔から知ってる。誰よりも俺を深く知る白雪が――この戦い、俺には荷が重いと言いたいのかな？　だとしたら心外だよ」

『そ、そんなこと……っ』

「白雪は、俺のことを理解してくれてると思っていたけど――違ったのかな？　白雪」

ヒステリアモードの甘い艶を交えた声で、白雪、白雪、と名前を織り交ぜて語る。

『う、ううん、そんな……』

白雪の態度が、すぐに普段の……いや、普段以上に従順なものに変わっていく。

よし、よし、うまく術に掛かっていくぞ。

これは遠山家に伝わる『呼蕩』――ある種の、催眠術だ。

最近は声優の養成所などで科学的に実証されている事だが、人は独特な声色や息遣いを交えた異性の声に弱い。

ヒステリアモードを持つ遠山家は、それを術技立てて代々伝えているのだ。

そのノウハウによれば、女子はこういう声で自分の名前を繰り返し、耳元に甘く優しく囁かれると……だんだん朦朧としてきて、あらゆる判断を男に委ねるようになるらしい。

「白雪。車両の切り離し――やってくれるね？　これは、白雪にしかできない事なんだ」

俺は焦る心を抑えつつ、白雪に囁き続ける。

ちょうど口雪はインカムを耳に挿れているだろうからな。
耳元で囁かれているのに近い効果が期待できるだろう。
『キンちゃん……か、勝てそう……ですか？』
「ああ。敵と爆弾は俺たちに任せてくれ。白雪たちには乗客を任せる。最近――鬼道術が不安定だって言ってたが……斬れそうかい？」
『は、はいっ。全力でやれば……きっと！』
という白雪の声に、俺は一安心する。
なんとか仕事を請け負ってくれそうだ。
『キンちゃん、私、斬るよ。絶対うまく切り離すからねっ！』
「あ、ああ」
催眠術に掛かりやすいタイプなのか、白雪は一転してやる気満々という感じだ。
『斬るよ！　斬る！　斬る！　キンちゃん様のために一刀両断にするぅーー』
そ、そういえば……兄さんに警告されたな。『呼吸』は多用・悪用を禁じるって。
悪用の仕方は皆目分からないが、確かにこれは多用するとマズそうだな。
白雪の中で、俺への忠誠心みたいなものが一気に高まってしまったようで……。
今後が、すこぶる不安だぞ。
「――アリア」

俺は声を出すの物、以し、インカムを通してアリアに語りかける。
「アリアは――15号車に退避してくれ。お前には、かなえさんの裁判もある。もうこんなバカ騒ぎに付き合う事はない」
『そっ、そんなー　あたしは……！』
『キンジぃ、聞こえたぜ？　どうやら俺は居残り組って事みてぇだな』
アリアが喚き始めそうになったところに、武藤の声が割り込んできた
「武藤。済まないな　こんな事になっちまって」
『へッ。構わねェよ。新幹線を運転すんのはガキの頃からの夢だったんだ。それが叶って、死んでもいい気分だぜ』
と言う武藤の声は、頼もしい感じだ。
半ばヤケクソという感じでもあるけどな。
――武藤、パンタグラフは先頭車の後部にもある。ここから電力を受けて、切り離した状態でも走れるか」
『今そういう風にセットしたぜ』
さすが武藤。仕事が早い。
車輌科の優等生だけあるな。
「切り離すと――どうなるんだ、後ろの車両は」

「心配すんな。新幹線は各車両が全て駆動して走る構造になってる。自動列車制御装置は切ったから、手動運転で止められるさ。さっき泣いてた運転士がやってくれるだろ」

武藤の話を聞きながら車両後方を見渡すと、レキはもう列車の中央を超えている。

「白雪、やれ、やってくれ」

「はい……！　キンちゃん、ご武運を……！」

今まで力を溜めていたらしい白雪は、大きく息を吸い込んでから――

「――足伽候天流――緋緋尾伽神・斬環――！」

という声に続けて、シャンッー　と、鈴の音のような抜刀の音を上げた。

次の瞬間――音もなく、先頭車の後端、接続部分のL下左右に光が迸る。

まるで何本ものバーナーを一斉に使ったかのような、緋色の光だ。

「呀っ……！」

突然の発光に猛妹が首を竦めた、次の瞬間――

ばくんっ……という重い音がして、15号車が後退し始めた。

「……！」

――お見事、としか言いようがない。

車両が切り離されたのだ。今の、たった一刀で。

それを見たレキが、風を掻き分けるようにしてこっちへ駆けてくる。

「――レキ！　止まれ！」

俺が叫ぶ間に、切り離された後ろの車両は遠ざかっていく。

1m、3m、5m――

よし、もうレキが風に逆らって飛び移れる距離じゃなくなってきたぞ。

1両だけになった先頭車は――空力的に不安定になったのか、揺れが激しくなる。

震動する視界の中、切り口から見えた15号車の白雪は――

菱川師宣の浮世絵『見返り美人図』のように、こちらに背を向けていた。

恐らく居合抜きの一種だったらしい今の一閃、その残心の姿勢があれらしい。

「キン、ちゃん……！」

白雪は――刀を手に、がくん、とその場に膝をついた。

荒く息をつきつつ、疲労困憊した顔でこっちを切なげに振り返っている。

白雪、よくやったぞ。

お前のお陰で、乗客はみんな助かる。

レキもだ。もうこれで、戦線から離脱できる――と、俺が改めて見たレキは――

「……？」

切り離された15号車の屋上を駆けながら、胸ポケットから何かを取り出していた。

ヒステリアモードの目が、それを捉える。

武偵弾――

あの着色は、炸裂弾。大爆発を巻き起こす、超小型の燃料気化爆弾だぞ。

何をするつもりだ。

レキ――！

「源義経……八艘跳び……！」

倒れたままの狙妹が、背ざめて何かを口走った時

レキは、くるっ。

その場で一回転しながら、きらっ――と、空中、自分の背後に武偵弾を放った。

そして再び全力疾走しながら、こっちへ向かってくる。

――ドウウウッッッ!!

手動で起爆された炸裂弾が、レキの背後で紅蓮の炎を巻き上げる。

その爆風は、前方からの風に逆らって嵐のように吹き荒れた。

――レキは、その爆発に突き飛ばされつつ――

ドラグノフを抱え、スカートを爆風に引きちぎられそうになりながら……車両と車両の隙間を飛び超えた。

そして――ごろっ！　先頭車の縁に転がる。

「――レキ！」

曲線を描く縁から転落しかけたレキは、顔色一つ変えず銃剣を屋根に突き立てる。

そして全体重をかけるようにして銃剣の柄にしがみつき、踏み台にし、バキッ――と、銃剣が折れた所で、なんとか屋上に上がってきた。

その体のあちこちに巻かれた包帯には、今の衝撃で傷口が開いたのか血が滲んでいる。

なんて……ムチャをするんだ。レキ。

焦げた包帯や靴から白煙を流しつつ、いつもの無表情で列車の上に立ったレキを……

猛妹・炮娘さえも、唖然として見上げている。

……レキ。

ロボット・レキ

お前には恐怖心すらないのか。

死ぬぞ、そんな事じゃ……！

「どうして……駆けつけたんだ、こんな所へ！」

俺は車両の中央から叫ぶ。

「駆けた理由ですか」

焦げた靴と靴下を脱ぎ捨てたレキは、裸足で新幹線の背に立ち――

――キンジさんも、駆けてくれましたから　あの夜、あの山から、私を抱えて」

抑揚の無い喋り方で、そう応える。

ヒステリアモードの耳が、風の中でもその声を捉えていた。

「……っ、レキ……」

比叡山での狙撃戦の後……レキは失神していたと思ったが、僅かに意識があったらしい。

俺を気恥ずかしさでコごもらせてから、レキは車両前方で様子を窺う炮娘に向き直る。

「それに私は誓いました。『主人に仇為す者には一発の銃弾となり、必ずや滅びを与えん事を誓います』――と」

チャキッ――

銘刀を構えるように、レキがドラグノフを炮娘に向ける。

『藍幇のココ。あなた達に一度だけ、投降の機会を与えます。戦える人数は、もう2対1です。あなた達に勝ち目は無い。爆弾を解除し、この車両を止めなさい」

そのレキの後ろから――

「3対1よ」

んしょ、と、アリアが新幹線の切断面から這い上がってきた。

「アリア……！」

漆黒と白銀のガバメントを抜き放ったアリアに、俺は頬を引きつらせる。

アリア。さっきこの車両から退避しろと命令したのに、残っていたらしい
レキは――そんなアリアに背を向けたまま、
「アリアさん。車内に戻ってください。キンジさんに近づかないようにと言ったはずです」
少し解けた包帯とショートカットの髪を風に暴れさせつつ、警告するように言う。
「……っ。ケガ人こそ、病院に帰りなさいよ」
ツインテールを吹き流しのようにはためかせるアリアも、ケンカ腰で返す。
「アリアさんが退がるべきです」
「あんたでしょ」
「アリアさんです」
「あんたよ！」
こ、こらっ。2人とも。
こんな所でまでケンカするな。
いま2人がこの現場に居合わせてしまっているのは、事実だ。仕方ない。
そこは俺も頭を切り換える。帰らせる場所も、道も、もう無いしな。
だが――共闘するならするで、協力しないと危険な事になるぞ。
武偵と武偵は、うまく連携できれば1＋1が3にも4にもなる。だが、仲違いしているようでは1＋1が2にもならない。

ヘタをすれば、仲間の足を引っ張るマイナスにすらなってしまうのだ。
過去、白雪や理子は……アリアと対立しても、イザとなれば連携して戦えていた。
非常時にまで意地を張る子たちじゃなかった。
――だが、レキはダメそうだ。
まるで敵が1人増えたかのような殺気を、背中越しにアリアへ放っている。
アリアもアリアで、レキを銃で追い払いかねないムードだ。
ダメだ。あの2人……闘い出すぞ。このままじゃ。
と、俺が眉を寄せて――残弾の尽きかけているD Eとベレッタを握り直した時――
――ざあっ――
また新幹線がトンネルに入り、轟音と闇が俺たちの周囲を包む。
だが今度のトンネルは短く、車両は数秒で外に出た。
トンネルを抜けた先では――眩い光が、車両に降り注いでいる。
この光は……何だ？　と、目を細めながら空を見ると――
……バラバラバラ……
という音を立てる報道ヘリが、かなり高い上空を舞っていた。何機もいる。どうやらこのぞみ246号を、ここで待っていたらしい。
この明るさは、そのヘリ達から照射されるサーチライトが集中したものだった。

マスコミめ。爆発の被害を受けないような距離から、高みの見物ってわけか。

「ココ。もうおしまいだ。武器を捨てて手を挙げろ」

闇に敷かれた道のような、サーチライトの直線光の中

俺は鋭く光るDEとペレッタを、炮娘と猛妹にそれぞれ向け直す。

だが……炮娘の目はそれでも闘志を失わない。倒れている猛妹も同様だ。

なぜだ。どうして白旗を揚げない。

ココたちは――

(……何かを、待っている……?)

ヒステリアモードの頭脳がそれに気づくと同時に……

響き渡る報道ヘリ群の音が、僅かに変化する。

再び空を見渡すと、その中の1機――ユーロコプター社のAS365が、車両後方から接近してきている。命知らずな。この車両には爆弾が載ってるんだぞ。どこのTV局だ。

――いや、違う!

あれは、報道ヘリに偽装した――

「アリア! レキ! ――敵機だ!」

叫ぶ寸前、俺はヒステリアモードの目でその操縦手の姿を捉えていた。

狙撃銃を背負った少女。

あいつは、あいつも、ココだ！
ここにいるココたちと生き写しの、3人目のココ。
「双子どころか、三つ子だったってワケかよ……！」
俺は舌打ちしてAS365を睨む。
コイツは、ある種の人海戦術だな。
倒しても追い詰めても、次のココが現れやがる。
「あっ……」
「……っ」
ヘリの作る下降気流に押されて、アリアとレキが俺のそばまで後退してくる。
アリアは威嚇するようにAS365ヘガバメントを向けたが、発砲しない。
ヘリが墜落すればココを殺害する事になるし、新幹線に衝突する恐れもあるからだ。
レキも俺に『人を殺すな』と命じられた事を守っているのか――ヘリを撃たない。
そんな2人を嘲笑うかのように、ヘリは新幹線を後ろから前へと嘗めるように飛んだ。
「うぁ！」
風にソインテールを引っぱられたアリアは俺の背後、進行方向側まで後退させられる。
ヘリは――
「……うっ、うおッ!?」

インカムに驚く声を響かせた武藤の真上――操縦室の上空で滞空した。いや、正確には滞空ではない。時速350kmで、併走し始めたのだ。空中を。

本来は救出係だったらしいそのヘリから、ハッチを開けて――だんっ。

足に鉤爪を付けたココが、新幹線の先端に飛び降りてきやがった。

3人目のココが握るのは、世界最高の信頼度を誇る名狙撃銃・M700だ。レキに破壊された物は迷彩色だったが、夜戦用らしいそれはマットブラックに着色されている。

「炮娘――待たせたネ、猛妹の所へ行くよい」

新手のココは、さっき自分を『狙姐』と呼んだ第二のココ・炮娘に何やら命令している。その態度で分かるが、どうやらこの狙撃娘が長女らしいな。

「是――狙姐」

炮娘は狙姐に一言返すと、ぱっ！

民族衣装の飾り紐を解きながら、車両の右側面にダイブした。

「――!?」

自殺行為のように見えたその動きに、俺が息を呑むと――

虚空を舞った炮娘の服が、開かれていく折り紙のように一枚の大きな布として広がっていき――見る間に、パラシュートに化けた。

この光景。見覚えがある。

イザとなればパラシュートになる、理子の改造制服と同じだ。
それをコマは空挺ではなく滑空に使い、新幹線の横をC字に移動していく。
そして車両の後端ギリギリに倒れる猛妹と抱き合うようにして、巧みに降りてくる。
服のパラシュートを切り離した狙姐は、下着姿で――14歳だったかのくせに、真っ赤なランジェリーなんかを着けてやがる――パンタグラフの根本、装置の裏に身を隠した。
見れば今の一瞬で、さっき列車後部に突き立てた青竜刀も引っこ抜いている。
（……マズいぞ……！）
ヒステリアモードの頭脳が、状況が一気に悪化した事を告げてくる。
炮娘は青竜刀の広い刀身を盾にしてドラグノフから身を守りつつ、レキに近接拳銃戦を仕掛けるつもりだ。レキは、銃剣無しでは近接戦がまるでできないからな。
一方で車両の前方からは、狙姐がM700狙撃銃をアリアに向けている。
アリアもガバメントを向け返してはいるが、狙姐との距離は20mはある。拳銃の精度で精密射撃ができる距離じゃない。どう考えても、狙撃銃の方が有利だ。
それぞれ相対する敵に優位なポジションを取られたレキとアリアが、車両の中心にいる俺を背中で挟むように後退してくる。
この期に及んでもまだ協力しようとしない2人の関係を象徴するかのように――背を、向け合ったままで。

「炮娘！　ビジネスはここまでネ。人質なくなた。日本政府、身代金払わない」
「分かたヨ、狙姐！　撤退して列車爆破する。コイツらももう持って帰れないネ」
何やら語り合うココ姉妹の上空では、無人になったヘリが何mか上昇して待機している。どうやらカメラで自分と新幹線の距離を測りながら、速度・高度を保って自律運転する機能を搭載してるらしい。小惑星スレスレを平行に飛ぶ探査衛星なんかと同じ機能だな。
入したもんだ。さすが、イ・ウーの技師だよ。
そして——彼女たちはやはり、中国の戦国武将・曹操の子孫だな。
追い詰めたつもりなのに、いつの間にかこっちが追い詰められている。
世界史で習ったが、曹操は古代中国の兵法書『孫子』を研究・編纂した学者でもあったらしい。
その孫子の兵法にあるのが、勝利に必要な二要素『天の時・地の利・人の和』だ。
強襲科的な解釈でいえば、天の時とはタイミング、地の利とはポジション、人の和とはチームワークを意味する。
ココたちは適切なタイミングを見計らって俺たちを波状攻撃し、車両やヘリを活用して有利なポジションを取り、三つ子ならではの阿吽の呼吸を活かし……今、それぞれ自分が勝てるような相手にターゲットを定めている。
一方の俺たちは減速爆弾のタイマーに追われ、車内や屋上を右往左往させられ、アリア

レ、レキは背を向け合ったままで、俺はその2人の板挟み。
人数に勝り、個々の能力で圧倒的に劣るワケでもないのに――斗され、追い詰められた。
このままではアリアとレキが倒され、俺も挟み撃ちで殺られるぞ。
何とか――しないと。
だが、どうすればいい。
どうすれば……！
ヒステリアモードの頭をフル回転させること、コンマ数秒――
「……！」
俺の頭に、ある逆転法のイメージが閃いた。
だが……おい、俺よ。
そのイメージは実現できるのか。
実現するにはココたち同様、天地人の3要素が必要だ。
天の時――あるタイミングで。
地の利――あるポジションを作る。
だがそのためには人の和――アリアとレキのチームワークが必要だ。
それが今、欠けている。
だから、作らなければいけない。

――作る。誰が？

俺がだ。

一瞬でもいい。この2人に、手と手を取り合わせるんだ。勝つために。

「アリア、レキ」

2人の背に、俺は告げる。

「俺は信じる。2人が、心の奥では……お互いを信じてることを信じる」

狙姐が、引き金を絞ろうとする――炮娘が、飛び出そうとしている――今だ！

「――さあ、仲直りの握手だ」

俺は自分のベレッタとD　Eを、空中に放り上げた。

その2丁が、滞空する間に――

アリアとレキの腕を、それぞれの背後から掴む。

そして半ば強引に、その腕と腕とをガッチリと組ませた。

「!?」

「？」

アリアとレキが、仲良しの女子同士みたいに腕組みした自分たちに振り返る。

俺は、ざっ、とダンサーのように屈みつつ――

右腕と左腕、それぞれの腕をアリアとレキの腰に回した。上から見れば、S字状に。

そして、自分を軸にしたコマのように、片膝を突いたまま半回転する。

――ぐるっ――！

俺を軸にして――アリアとレキが、円舞を踊るように反転した。してくれた。

――『キャスリング・ターン』――

2駒を1手で同時に動かして入れ替える、チェスの特殊手のように。

アリア。レキ。

いい子だ。2人とも。

アリアは信じた。俺を信じて動くレキを信じた。

レキも信じた。俺を信じて動くアリアを信じた。

敵が攻撃のために意識を集中させ、防御や回避ができなくなるそのタイミングに――

2人は俺を中継して信じ合い、チームワークを働かせたのだ。ほんの、一瞬。

だが、逆転にはその一瞬で十分だ。

お互いのポジションを入れ変えたレキとアリア、その相手はそれぞれ――レキが狙妹、アリアが砲娘、という具合に入れ替わった。俺の思惑通りに。

狙撃VS狙撃、銃VS拳。

そういう布陣になったのだ。今の『キャスリング・ターン』で。

「――ッ！」

パァン！

咽喉にはキャンセルできなかった、狙姐の弾丸には――バスッ！　ギィン！

さっき放ったDEをキャッチした俺が、最後の.50AE弾で銃弾撃ちを見舞う

狙姐の銃弾はナナメに弾き飛ばされ、レキが反撃のドラグノフで――タァン！

狙撃手のココ、狙姐の足元を撃った。

「――阿っ！」

さっきの猛妹と同じように足払いを喰らった狙姐は、新幹線の前面へと滑り落ちていく。

「ココ！」

――バババババッ！

車両後方では、アリアが両手のガバメントを撃ちまくりつつ炮娘めがけて駆け寄った。

青竜刀を盾にして踏ん張る炮娘に、俺は――キャッチしていたベレッタをフルオートに切り替え、弾切れになるまで斉射して追い打ちをかける。

さすがにガバメントとベレッタの連撃には耐えきれなかったらしいココが、

「玖っ！」

べたっ、と尻もちをつく。

ガンガンッ！

その左右の手に握られたUZIと青竜刀を、アリアの.45ACP弾が精密に弾き飛ばす。

とうとう丸腰……どころか下着だけという無様な姿になってしまった炮娘に、

「――逮捕よッ！」

アリアは遠慮無く、飛びかかった。

握っていた武器を撃たれて手が痺れていたのだろう、炮娘はすぐ押し倒されてアリアにワイヤーで縛り上げられてしまう。

「さっき縛られたお返しよ！」

そう叫んだアリアに戦闘不能の猛妹も捕縛されたので、車両の前方に振り向くと――

「……」

新幹線の先端に続く斜面のフチに、レキが無言でしゃがんでいた。

「炮娘！　猛妹！　救命！　滑滑！　我倒下！」

その向こう側、見えない斜め下にへばり付いているらしい狙姐の喚き声が聞こえてくる。

「少し、うるさいですよ。あなたも姫なら辦えなさい」

ちゃきッ――

レキがドラグノフを肩に担ぐように構え、その銃口を見るともなく上空のヘリに向けた。

「……うぐぅ……」

それを墜とされては堪らない、と思ったのか――それっきり狙姐は黙りこくる。

――猛妹、炮娘、狙姐――

3人とも、これで戦闘不能にできたな。ようやく。

……もういないだろうな。これ以上。

「あんたら、まさかもういないでしょうねッ！」

俺と同じ事を思ったらしいアリアは、ぎゅむ。

自分そっくりの猛妹と炮娘を右足と左足で遠慮なく踏みつけ……

くるくるっ、と左右の拳銃を回してスカート内のホルスターに収めた。

そうして、顔を上げたアリアと――

立ち上がったレキが、同時に振り向く。

その目と、目が、合う。

「……かっ、勘違いしないことね。レキ」

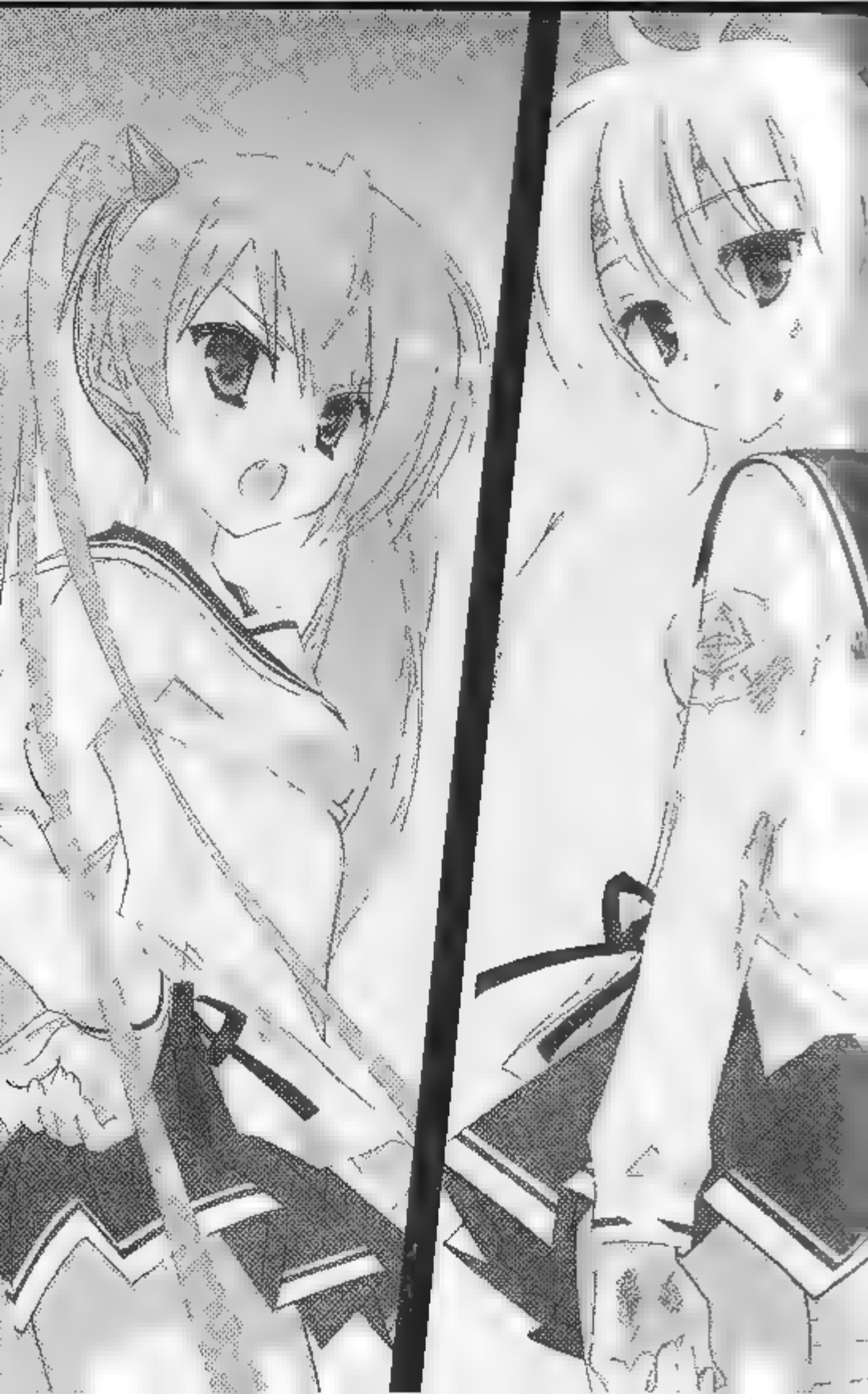
少し赤くなったアリアが、アヒル口になった。

「さっきのは……体が勝手に動いただけよっ」

「――私も、体が勝手に動いただけです」

レキも、まだ意地を張るような事を言ってはいたが――

アリア。レキ。俺には分かるよ。



いま君たちが交わした視線は、さっきまでとは違う。
それは互いを認め合う、武偵と武偵の目だ。さっき俺を介してお互いを助け合った事、
それが――2人の新しい第一歩になる事を祈るよ。
「――机场婢！　你给我记住！」
車両の先端から、狙姐の声――
「？」
それに振り返ると、ぶわあああ……っ！
狙姐が袖から出したらしい、桃色の煙幕が渦巻いていた。
煙ごと、狙姐は新幹線が切る風に押し流されるように――車両後方へと飛んでいく。
「――」
あっという間に遥か後方へと飛ばされていった狙姐は、ばさっ……
パラシュートを広げて、急減速した。
ピンクの煙に紛れてどこにいるのかよく分からないが、煙幕の切れ間に一瞬見えた――
膝を抱えたその姿は、時速50kmぐらいまで減速できていた。
そしてそのまま、ざあああ……と、小さな畑へ着地していく。
「――冷たいお姉ちゃんね。あんたたちを置き去りにしたわよ」
1人取り逃がした悔しさからか、足元のココ姉妹に告げたアリアに――

「ひひひひひ……！」

ココたちは不気味な笑い声を返した。

「竜虎相博――お前たち道連れネ」

「ココたちの負け違うヨ。爆泡でみんな吹っ飛べ！　バーカバーカ！」

クンッ――と、さらに新幹線が加速する。これで時速370㎞……！

もうこの速度についてこれなくなったのか、上空にあったココのヘリが――遅れ始めた。

一定程度以上離れると、ヘリは減速し……線路脇の道路に着陸していく。

「お前たち戦うしか能無い。ココたちとは違うネ」

「キンチお前、ドジでグズでノロマな亀ネ」

もう退路は無くなった。ココたちにも。俺たちにも。

新幹線は都市部を走っている。どこで爆発しても被害が出るぞ。

「――そうだな。俺は理子やアリアみたいに身軽じゃない。白雪みたいな術も使えない武藤みたいに何でも乗りこなす技術も無いし、1人じゃ何もできない」

だが、俺の耳はもう捕らえてる。

その、音を。

「そうネ。お前、何もできない！」

印島くそう言ったココに……

「でも、俺たちは何でもできる――」

そう返した俺の背後から――警笛の音を上げて――

もう1本の新幹線が、追ってくる。

「……？」

ツリ気味の眉を寄せたココ達は、ジリジリと追いついてくる新幹線を唖然と見ていた。

「――この修学旅行Ｉは、そういう事も学ぶものらしいんでね」

俺たちはワイヤーを使って、車両の後端から車内に戻った。

ココたちも、心、アリアと協力して車内に運び込んでおく。

車両のドアは武藤の操作で開け放たれており、真横の線路を全く同じ速度で走る救援新幹線の扉からは

直径1ｍ弱のチューブがこっちへ既に延び、フックで自動的に固定される所だった。

「あや、あややっ！」

そのチューブの中を滑り台のように滑り降りてきたのは――

こてん、と床に尻もちをつきながらの、装備科・平賀文さんだ。

「……悪いな、平賀さん。こんな事に巻き込んで」

「なんのなんの　お得意様のピンチなら、あややはどこにでも駆けつけるのだ！　とー

やま君、レキさん、理子ちゃん、みんな大口顧客さまですのだっ」

平賀さんはチューブに通したロープを引っ張って、何やら様々な工具や消火器みたいな機材をこっちに引き込みつつ――ぺち、と両目を俺に瞬かせて見せた。どうやらウィンクをしようとしたらしいのだが、できなかったらしい。

器用なんだか不器用なんだか分からない子だな、いつも。

道具を運び込むと、新幹線同士の間に渡されたチューブは外された。線路と線路の間には標識や信号の柱があるため、それにチューブが激突するのを防ぐためだ。

だが、退路が無くなったのに、平賀さんは何故か工機嫌で機材を組み立てていく。

平賀さんの声を聞きつけたのか――

「あ、あやや――！　も、も、漏れちゃう――！」

という理子の声が座席の方から聞こえてきた。

「もう少しガマンするのだ！　漏れたら座席のスイノチが漏電しちゃうのだ！」

「理子も漏電しちゃう！　早く早く！　たすけて――！」

理子……トイレに行きたくなったのか。

そりゃそうだろう。あれだけイチゴ牛乳をガブ飲みしてたんだからな。

「解除できんのか、平賀よ――！」

クンッ――と、新幹線を更に加速させながらの武藤が言う。

これで――390km。

「――Nothing is impossible!!」

平賀さんは無邪気な笑顔で作業をしながら、元気に返している。

新横浜駅を越えた。東京駅までの時間は残り――7～8分ってとこか。

いや。車両の制動に必要な距離も考えると、もっと短いぞ。

消火器みたいな機材から伸びる管を2本、丁寧な作業で洗面室の窓に張り付けて固定した平賀さんは――

「気体爆弾は酸素と混ざると爆発する、ってさっき理子ちゃんから無線で聞いたのだ」

と言い、機材を慎重に、しかし手際よく動かし始めた。

どうやらチューブの先端に据えられたカッターで、小さな穴を2つ開けたらしい。

その穴の内側に、片側のチューブから風船のようなものが広がり始める。

「これは……？」

窓を覗くアリアに、平賀さんはぺたんこの胸を張る。

「窒素で膨らます、シリコンの風船なのだー　隅々まで広げて、気体爆弾をこっちの真空ボンベに押し出すのだ」

ゴゴゴゴゴゴ……と、コンプレッサーが稼働する音がする。

あと……3分。もう品川駅に入るぞ。

風船が広がり、爆泡をボンベに押しやりながら洗面室の隅々まで行き渡っていく。
平賀さんがボンベの気圧をチェックしている。
東京の夜景が列車の左右を流れていく。
もう、東京駅が近い――！
「キンジ、最後の加速……４１０km……いくぜ！」
クンッ――！
新幹線の振動が強まり、平賀さんが少しよろける。
間に合うか――と、俺が見守る中――
ピー、と、機材が音を上げた。
「……いよっし！　完了なのだ！」
「――ブレーキだ武藤！」
叫んだ俺はアリアとレキ、そして平賀さんを、気に両腕で抱きかかえ――
車両の壁に、背を付けた。

――イイイイイイイ――ギイイイイイイイイ――

一瞬、車輪が空転するような音に続いて――耳を劈く、ブレーキ音。

がくんっっっ!!

今までで最も激しい衝撃が、新幹線を襲った。

減速、している――

ばすんっ！

爆発音に振り返ると、横では洗面室の窓が吹っ飛んでいる。

しかし――気体爆弾は爆発しない。全て、平賀さんがボンベに吸い取ったのだ。

そのボンベが、ごんごんっ　と壁際まで転がっていくのに肝を冷やしつつ――

「～～～～ッ！」

背中で、減速のGに耐える。

窓の外では、車両の下からオレンジの光が弾けている。車輪とレールから上がる火花だ。

ブレーキをかけ始めてから1km以上走ったと思われるのに、まだ止まらない。

新幹線はそのまま、東京駅のホームに入り――

ギィイイイ……ギイ……

という重厚な音と共に――窓の外に、JRの駅名表示板が見えた。

――『東京』――

車体の下から濛々と上がる煙の向こうに見える、その表示板は：：止まっている。

停車――

できたのだ。

これにて……一件、落着、だな。

俺は深く一呼吸すると――まだ俺の腕の中でギューッと目を閉じているアリアの背中を、ぽんぽんと叩いてやった。

もう、大丈夫だよ。

そう、伝えるように。

アリアは顔を上げ――

赤紫色の目で窓の外を見てから、俺を見上げてきた。

まるで、何かの奇跡を導いた男を見るように。

「アリア……俺の実家は都内なのに、どうして寮生をやってるのか教えてあげるよ」

車両の屋根に上がる前にアリアとした、世間話の続きを始めた俺に……

「……？」

アリアは、その大きな目をキョトンとさせた。

「――あまり好きじゃないんだよ、電車が」
その言葉にアリアは、苦笑いしつつ「同感だわ」と一言返してくるのだった。

東京駅の新幹線ホームは前もって人払いがされており、無人だった。
爆発した際の盾にするつもりだったのか、駅には無人の山手線、京浜東北線、中央本線、東海道本線の列車が密集して停められてるな。
さらに停止標識の周囲には、爆発に備えて土嚢が積み上げられてる。
……ご丁寧なこった。
俺とアリアがホームに降り立つと……
「あはっー　作業料として、これは貰っていくのだー♪　あややがイタダキなのだ！」
後ろから平賀さんが、爆泡の詰まったボンベを無邪気に抱っこしながら出てくる。
なるほど。それが日当てで、嬉々として助けてくれたワケか。
「……火遊びは程々にな」
俺は苦笑いしながら、ぽん、と商魂たくましい平賀さんの頭に手を置いてやった。
「……」
次にドラグノフを肩に掛け直しつつ、裸足のレキがホームに降り立ってくる。
「東京うー、東京うー、お降りのお客様はお忘れ物のないようお気を付け下さいッ、と」

最後に、調子の外れなアナウンスをしながらの武藤がココ2人をズルズル引きずって出てきた。

×型に重ねられてホームに転がされたココ姉妹は……近づいたら噛みつきそうな表情で俺達を見回しているな。

全く、大した闘志だ。見習いたいよ。

「あんたたち。お姉ちゃんに投降を促すってんなら――電話を貸すわよ」

アリアは2人の上に座って腕組みし、お澄まし顔で勝ち誇ってる。

「こいつらのヘリは、神奈川県警が抑えたらしいぜ。車輌科だから言うわけじゃねえけど、どんな人間だろうと足が無きゃ何もできねえさ。いずれ捕まんだろ」

武藤がインカムを外しながら、コキコキと肩を鳴らす。

「武藤……お疲れ様。ありがとう」

「礼には及ばねえよ。武偵憲章1条。仲間をナントカって言うだろ。って……オイオイ、出られんのかこの駅。土産まで積みやがって。俺、駅弁――っつーか龍陽軒のジェット焼売を買おうと思ってたのによ」

「武藤くん！　こっちから出られるのだー！」

「キンジ、後は任せたぜ。そいつらは尋問科にでも引き渡してこってり搾ってもらえ」

一刻も早く爆泡の分析をしたいらしい平賀さんと、駅弁マニアでもある武藤は新幹線の

ホームから小走りに出ていく。

（たぶん駅中が閉鎖されてると思うけどな……）

と、2人の背を苦笑いしつつ見送った俺は、改めてココたちの元に片膝をつく。

見ればアリアが猛妹の袖の中から――ナイフや鉤爪、煙幕缶など、次々と武器や道具を取り出しているが……何に使うのか分からない器具もあれこれあるな。

このしぼんだゴム風船みたいな物はなんだろう。

爆弾の類じゃあなさそうだが……と、俺は猛妹が持っていたオニギリぐらいの大きさの道具を手に取り……

そこから出ていた、怪しい紐を引っ張ってみた。

すると、ぼんっ。

（おっ……？）

1秒かそこらでエアバッグのように広がったそれは――

膝を抱えた、ココの形になった。

人間型をした、ダミーの風船だ。

「……っ……！」

それを見た俺の、まだ続いていたヒステリアモードの頭が警報を鳴らす。

マズい。

この人形の、体勢……

これはさっき、服のパフシュートを使い、線路脇に逃亡した狙姐の体勢だ。

あれは――ダミーの空気人形。ということは……

「――妹たち、撤退ヨ。一旦、香港に戻るネ」

ホームの端からココの声がして、俺、アリア、レキが一斉に振り返る。

そこでは……足を引きずりながら、M700を構える狙姐の姿があった。

（しまった……！）

狙姐は、転落していなかったのだ。

煙幕を張り、そこでダミーの人形と入れ替わり：：よじ登ることは出来なかったまでも、新幹線の側面にへばり付いていたのだ。東京まで、ずっと。

線路を這って移動したのだろう、狙姐は100mは離れて狙撃銃の距離を作っている。

拳銃ではどうしようもないぞ。

その狙いは……俺だ。俺の頭部に、照準を合わせているのが分かる。

「レキ動くだめネ！」

ドラグノフを持ち上げようとしたレキに、ココが叫ぶ。

レキは――俺が狙われている事に気付いたのだろう。銃を構えない。

ただ、狙姐の方を見つめている。

「……痛っ！」

目だけでアリアの方を見ると、アリアは、ココ姉妹に足だけでしがみつかれていた。

ココたちは死に物狂いで、アリアの髪やスカートに絡みついている。

アリアもあれじゃあ、身動きも取れないだろう。

調子に乗ってココに腰掛けたりするからだ。

「風、レキをよく躾けた。人間の心、失わせてる。この戦いでよぉーく分かたヨ。お前、使えない女ネ。だからもう、お前、いらない」

「……」

レキ――お前、まだ弾を持ってるハズね。それで死ね。今、ここで」

狙姐はレキに撃たれて痛むらしい足を震わせながら――そう、命じる。

俺の額を狙うM700はボルト・アクション式ライフルで、連射ができない。

俺を撃てば、次弾を装填するまでの間でレキに反撃される。

その隙を作りたくないのだろう。

だから狙姐はレキに、自分で自分を撃てと命じているのだ。

「お前死ねば、キンチは殺さないネ。キンチは使える駒ヨ、ココも殺したくない」

「ココ。あなたが言う通り：私はあと1発、銃弾を持っています。私が自分を撃てば、キンジさんを殺さないのですか」

確認するように言ったレキに――俺は慌てて振り返る。
ジャンヌから、星伽神社で聞いた。
――最後の銃弾――
ウルス族は追い詰められた時、自分が仲間の足手まといになりそうな時――かつて日本の侍がそうしたように、自決する。そういう古い日本の文化を継いだ一族なのだ。
危険だ。この状況は――
「よせレキ！　どうせアイツは俺を――」
「キンチ喋るな！　レキ、今の話は曹操の名にかけて誓ってやるネ」
俺の声に、ココが言葉を被せてくる。
「待つ、ココに不利ネ。レキ、今すぐ自分を撃つネ。待たされたら、ココ、キンチを撃つレキ、その後でココを撃てばいいネ。他にキンチ取られるより、ココは相討ちを選ぶヨ」
「ココ。藍幇の姫」
そう言ったレキは――
すっ、と、ドラグノフのストックを足元に置いた。
「ウルスの雷姫が問います。今の誓い――キンジさんを殺さない事、守れますか」
「バカにする気くないネ。ココは誇り高き魏の姫ヨ」
「――誓いを破れば、ウルスの46女が全員であなたを滅ぼす。かつて世界を席巻したその

総身を以て、あなたの命を確実に奪う。分かりましたね」

背を伸ばしたレキが、銃口を自らの顎の下につける。

「よせ……レキ！」

「キンジさん。ウルスの女は銃弾に等しい。しかし私は…… 失敗作の、不発弾だったようです。不発弾は、無意味な鉄くずなのです」

「やめなさいレキ！ あんた騙されてるわよ！」

アリアが金切り声を上げる。

「キンジさん。あなたは人を殺すなと私に命じましたが、私は今、主人を守るために――私自身を撃ちます」

「……！」

「ですが、これは造反には当たらない事を理解して下さい。なぜなら――」

「……よせ……」

「――私は一発の銃弾――」

レキは靴を失った足の指を、ドラグノフの引き金に掛ける。

「お前は銃弾なんかじゃない！」

俺の叫びも虚しく――

レキは顔色一つ変えず、足の指で、引き金を――

――ついた。

――ガチンッ。

「……？」

レキの目が、再び見開かれた。

その瞳（ひとみ）は――

ハッキリと、驚きに見開かれていた。

弾（たま）は――出なかったのだ。

「不発弾（ミスファイア）……」

赤紫色（カメリア）の瞳を見開いて呟（つぶや）いたアリアも、信じられないという表情だ。

現代の銃弾において、不発弾が起きる可能性は低い。ほとんど無いと言ってもいい。

しかもレキは偏執的なまでの不発防止策を取り、銃弾を自ら作成すらしていた。

不発の可能性は1億分の1……いや、1兆分の1にまで抑（おさ）えられていた事だろう。

それが今、起きたのだ。

レキはそれに――驚いていた。ハッキリと。

『この銃は、私を裏切りませんから』

そこまで信頼していたドラグノフが――
裏切った。レキを。今、初めて。
――レキ。
お前はさっき、自分は不発弾だ、意味のないものだと言ったけどな。
不発弾にも意味はあるんだ。その意味を考えろ。
「……キンチ！」
狙姐は――
この一瞬で、状況の変化を理解していた。
レキは自分を殺せなかった。しかし、弾は不発弾しかもうない。
となると次に危険なのは、格闘戦も可能な――俺だ。
ヤツは迷っている。
俺をここで殺して逃走するか、殺さず逃走して、態勢を立て直してまた襲いに来るか。
その逡巡の間に――俺は、レキが呆然と握っていたドラグノフから弾倉を掠め取った。
「――レキ。一度と自分を撃つな」
俺はそう言いながら、レキの目の前で弾倉から最後の銃弾を取り出し――
両手で、ぎゅう、と握りしめた。
そうしながら、俺はレキの目を睨む。俺は怒ってるぞ。それを伝えるために。

これは命令だ。お前、俺の命令を聞くって言ったろ」

「……」

レキは俺の鋭い視線を見つめ返して――こくり。

無言で、頷いた。

それを確かめた俺は銃弾をレキの目の前に曝し、

「さあ――生まれ変わるぞ」

そう告げて、ぱちん。

弾倉に戻し、ドラグノフに挿し直した。

「――レキ。撃つべき相手は、あの敵だ。もう一度、俺を信じろ」

そうレキに言って――

バッ――

俺は振り返りつつ、ココの狙撃銃からレキを守るような位置に立ちはだかった。

向こうは銃を構えている。

呆然と銃を抱えているレキより、ずっと早く発砲できるだろう。

その一発――さあ、来るなら来い。

俺の銃には、もう弾が無い。銃弾撃ちは不可能だ。

弾丸斬りもダメだ。ナイフも無いからな

パトラの時にやった銃弾噛み――あれもダメだ。
あの防御は不完全なものだ。衝撃で昏倒するからな。ココはまだ弾を持っている。俺は倒れたら最後、再装填された第二弾で仕留められるだろう
今までの手は、全て、この場では使えない。
――だが、俺は死なない。ヒステリアモードは天下無双なんだ。
通常時の30倍の反射神経が、思考より早く両手を前に突き出させる。
そうだ。きっと、こうすれば――
構えた俺に――ココは――
「キンチ！」
――パァン！
銃声と共に、7・62㎜NATO弾を放った。
俺は突き出した両手のひら、その――
開いた両手の人差し指と中指だけを、＃記号のように重ねる。
――できんのか　そんなこと。
自分でも半信半疑だが、これしか思いつかなかったからな。この刹那の瞬間には。
俺は、敵の弾道をその指の四角形で囲む。
止めようのない弾丸が、指に追り――

――バシュッ――！

俺は、指真剣白羽取りの応用で、右手の　本指で弾丸を挟む――
しかし弾は制止せず、指の間を飛び出て更に俺に迫った。
7・62㎜ＮＡＴＯ弾の初速は超音速。
剣を止めるように、指だけで止める事はできない。僅かに逸らすのが精一杯だ。
眉間に向かっていたフルメタル・ジャケットの弾は僅かに左へ逸れ――
スピンしながら、俺の左目へと飛んでくる。
俺は右手より顔面寄りに構えていた左手――
その人差し指と中指で、弾丸を再び挟む。
そしてもう一度、僅かに方向を変えさせた。更に、左側へ――！

「　　」

ピシッ！
と、俺の頬に鋭い痛みが走った。
そして――弾丸は――

ガシャンッ――!

と、俺の左背後遠く、花束の自販機にブチ当たってガラスのショーケースを割った。

俺には――当たっていない。

弾は左頬を掠めただけだ。

できた――

咄嗟の思いつきだったが、やればできるもんだな。

素手で、弾丸のコースを斜めに……〝ノ〟記号のように変える技。

名付けるなら――銃弾逸らし――ってとこか。

さすが、ヒステリアモードだ。

ついに素手で弾丸をいなす事まで出来るようになっちまったか。

まあ……思いっ切り大ケガ、それと突き指もしたけどな。両手とも。痛えや。

「キンジ……あ、あんた、今!」

唖然とした声を上げたアリアが、目をまんまるにしている。

その横から――

「――ここは喫閲の中――」

レキの、声。

振り向けばレキは目を閉じ、ドラグノフを再び構えていた。狙撃へ向けて。

それは今までのレキからは考えられない、非合理的な行動だった。
さっきの不発弾が撃てるようになったと信じているのだ、レキは。さっきの――俺の、言葉で。
「一筋の、光の道がある――光の外には何も見えず、何もない。私は――」
レキの……狙撃の際の時が、変わっている。
再びその目を開いたレキは――
「――光の中を駆ける者」
引き金を引く。

――タァン！

「――！！」
今度は発砲された、ドラグノフの7・62㎜×54R弾が――
――チッツッ――
銃弾を内装填していた狙姐の頭部を掠めて、命中しなかった。
「きひっ　…！」
冷や汗をかいたココが笑って、M700を持ちじげる。

アーアが息を呑む。百発百中のレキが、ここで痛恨のミス――と思ったようだが、違う。
あの狙撃術、俺は見た事があるぞ。
「――!?」
パァン！
レキと同レベルの腕を持つハズのココが、M700を発砲した。
斜め上、全く、あさっての方向へ。
「……？　？　？」
そして、よろっ、よたたっ、とよろけて――
自分の身に何が起きたのか分からないという表情で、ころん。
その場に、倒れた。
あれは、かつて武偵高に潜入してきたコーカサスハクギンオオカミ――今のハイマキを捕らえた時にレキが使った、狙撃技。
通常弾で体の一部、神経系を圧迫するような部位を掠めて相手を麻痺させる精密狙撃だ。
人間にもできたんだな、あの技は。さすが狙撃科の麒麟児、レキだ。
脳震盪を起こした足つきの狙姐はM700を杖のようにして、再び起きーがろうとしたが――
だっ！

ホームド、線路のにに隠れていた理子が飛び出してきて――その背にへばり付いた。
「み、峰理子ッ！」
「ソァオ・ツァオー！　あれもツァオ、これもツァオ。3人もいたんだねェ。くふっ！」
理子はオンブお化けみたいに両脚でココの胴にしがみつき、両手で両腕を羽交い締めにし――文字通り蛇のように動くツーサイドアップのテールでココの首を絞めている。
俺を2度仕留めかけた絞め技――双蛇頸刎崩、その理子版だな。
「自分の技で眠りな、ソァオ・ツァオ。あたしに教えたのがアダになったな」
「っ……！　っ！」
狙姐はそれでも背後の理子の顔面に手を伸ばし、反撃しようとしたが――
呻然とする猛妹・炮娘の隙をついて逃れたアリアが、狙姐めがけて飛び出した。
「ココ――往生際が悪いわよ！」
「ちょっ！　アリアっ！　タンマタンマー」
アリアは慌てる理子の声をガン無視で、どこっ！
全力疾走からの両脚ドロップキックを、ココに叩き込んだ
理子ごと、ばたーんっ！　と真後ろに吹っ飛んだ狙姐は――
「～～～っ……」
とうとう、ノビたみたいだな。理子ごと。

パンダに食らいつく虎みたいな獰猛さで3人目のココを縛るアリアに苦笑いしつつ――

今度こそ、これにて一件落着――と、俺はココたちに背を向けるのだった。

（レキ……）

一方、レキは――力尽きたのか、ホームに崩れた正座をするように座り込んでいた。

自分を撃たせてくれなかったドラグノフから――

何かのメッセージを感じ取ったのか、その銃身をきつく、きつく、抱きしめている。

俺が傍らに跪くと……

レキの目から、一雫の涙がこぼれ落ちるのが見えた。

「……レキ……」

「もう……聞こえないのです」

その肩が、小さく震えている。

「何がだ」

「風の声が――もう、聞こえない。風はもう、何も言いません」

レキは……

今まで、何一つ自分で考えて行動することはなかった。

ただ『風』に命じられるまま、それこそロボットのように生きてきた。

その指令が、無くなった――と言う。

それは恐らく、誰かに植え付けられた妄想が解けたという事なんだろう
探偵科で習ったが、そういったマインドコントロールは、強いショックで解けることがあるという。
レキは心の底から信頼していたドラグノフに裏切られたショックで、その見えない戒めから解き放たれたのだ。
「風はもう何も言わない――か。それは、『自分で考えろ』って事じゃないのかな」
レキの肩に手を置き、そう言った俺に
レキは、顔を上げる。
「私には分かりません。これからどうすればいいのか。これから、1人で――」
「いいさ。風は気ままに吹くもんだろ。それに――1人じゃない。俺が一緒だ、何たって、お前に学校にチーム登録を提出しちまったからな。この間、勝手に」
そう言って、俺は小さく微笑みつつ背を伸ばした。
レキは……黙っていた。
黙ってドラグノフの撮把と銃床を左右の手で支え、しばらくそのまま固まってから――
ホームに吹き込んできた一陣の風に、すっ、と顔を上げた。
「――anu urus wenuia...永遠――」
レキが――

……歌……？

「――Celare claia ol…, tu plute ire, urus claia 天空（あめぞら）――」

歌い始めていた。

その詞は、どこの国の言葉か分からない、部分的には日本語のようにも聞こえる。

とても不思議な歌詞だ。

だが……なんて、美しい歌だろう

なんだか、どこか懐かしい音律にも思える、

そして、レキの声。綺麗（きれい）だ。声量は慎（つつ）ましやかだが、本物の歌手のように正しい音階で歌い、その場の誰（だれ）もがその美声に言葉を失ってしまう

「――Raios Zalo Ado…, Ясни истинаневедевы――」

立ち上がったレキが歌う、巣から旅立つ鳥を思わせる、美しく瑞々（みずみず）しい歌――

その旋律が続くと共に、ホームに流れ込む風が強まっていく。

まるで歌っているようだ。風も。

ああ。これはたぶん――

風とレキの、別れの歌。

「――Celare claia ol…, tu plute ire, urus claia 天空（あめぞら）――」

歌がリフレインするパートで、突風のように強まった風が

俺がさっき壊した自販機から、見送り人が旅立つ人に送る花束を吹き流し、市に解く。
バラバラになった花はさらに風に揉まれて、無数の花びらを空中に散らした。
その色とりどりの化霞の中――レキはホームを歩いていった。
誰もいない、端の方へと。
（……レキ……）
言葉を失っていた俺たちは、強まった風に目すら開けていられなくなる。
俺が目を閉じた時、最後に見えたものは――
「――anu urus wenuia」永遠――」
初めの歌詞に戻って歌が終わる刹那、振り返ったレキの
生まれ変わったような、清々しい、端正なあの顔だった。
その顔はまだ、ほんの僅かにしか表情を作れていなかったけど……
微笑んでいたと、そう思う。

風が止み――再び目を開くと、もうそこにレキの姿は無かった。
レキが忽然と消えた事にアリアは慌てていたが……俺は、そうでもなかった。
いいじゃないか。レキは初めて、自分の意志で歩き始めたんだ。
誰かに命じられるままに生きることをやめ、自分自身が新しい風のように自由に歩いた。

だから、今日はレキの第一の誕生日みたいなものだ
俺は、あいつを祝福してやりたい気分だよ。むしろ。
お誕生日おめでとう、レキ――って、な。

そんな俺たちの所に、武藤たちに連れられて怖々出てきた自衛隊の爆発物処理班と……
その後から警視庁のお偉方、武偵高の蘭豹、綴といった九生たち、そして事後処理班――
武偵高の生徒が何人かやってきた。
狙撃科3年の志波平了先輩はレキが失踪したと聞いて探そうとしていたが……ムダだと思う。レキは自分の意志で、気配というものを完全に絶つ事ができるからな。本人が出て来ようとしない限り、誰が探しても見つからないだろう。たとえ、横を擦れ違っても。
それに……自分から姿を消したんだから、そっとしておいてやるべきだろう。今は。
そう思いながら、俺は迷路みたいな無人の東京駅を彼らと共に出ていった。
丸の内中央口に出ると、そこには黒塗りの武偵車が何台か待機している。
強襲科のエリートことアリアは特別扱いなのか蘭豹と2人で車に乗せられ……俺と理子、武藤と平賀さんがそれぞれ車輌科の1年が運転する別々の車の後部座席に分乗した。
「……そういえば、トイレは間に合ったのか？　16号車にはトイレ無かっただろ」
ヒステリアモードが解けた俺が気軽に聞くと、理子は俺の左頬に拳をつけて、ぐりぃ～、

と押してきた。

い、痛いって。銃弾逸らしをやった時、弾が掠めてちょっとケガしてんだから。

「キーくん！　乙女にそんなこと聞いちゃダメー　ちゃんと聞に合いましたっ!!」

赤くなった理子は、まあ、どこかで何とかしたらしい。

あまり追及しちゃ可哀想だな。そのぐらいの事は素の俺でも分かる。

ぷい、と後部座席の窓にソッポを向いた理子は――

「　キンジ、お前、インチキしたな」

裏理子の喋り方で、そう呟いた。

「何の話だよ」

「これだ　あたしの目は誤魔化せないぞ。ここ　ナイフの傷がある」

と言って理子がスカートのポケットから取り出したのは――狙撃銃の弾の薬莢だった。

それはさっきレキが自分を撃とうとし、失敗した後、ココを撃った銃弾の空薬莢だ。

「……目ざといな、理子。さすがだ」

俺はシートに深く座り直すと、理子の小さな手から薬莢を受け取った。

一般的な銃弾の薬莢には、雷管という点火装置がついている。その雷管が無ければ弾が発射される事はない。つまり――不発に終わるのだ。

俺は……

り俺の分れて「最後の一弾」の話を聞いた後……最後の一弾まで追い詰められるような状況になったら――レキは、ジャンヌの言の通り自分を撃ちかねない。そう思った。

だから、眠るレキの傍らでドラグノフを簡易整備してやった際――弾倉から抜き出した銃弾、その最後の一弾から雷管を外しておいたのだ。ココの追撃に備えて。

銃弾から雷管を外すのはちょっと危険な行為だが、むかし兄さんの同僚に習った特殊な方法でナイフを使えば出来る。

案の定、レキは最後の一弾で自分を撃とうとし――その弾は不発に終わった。

俺はその後、弾倉から銃弾を抜き取って、ポケットにしまっていた雷管を付け直した。銃弾を握って、何かを念じるようなフリをしながら。

それで再び装塡されたこの銃弾は正しく作動し、勝負を決める一弾となったのだ。

「キンジは――予想してたのか。あの流れを全部」

「まあ、半分はな。ていうか、もうどうでもいいじゃねーか。そんな事は」

理子が感心したような顔でこっちを見たので、今度は俺が窓の外を向く。

そこには間もなく公開される3D映画『オズの魔法使い』の大きな看板が見えていた。

そういえば、台場でレキとラーメンを食べた時にも、あの看板を見たな。

『オズの魔法使い』は、小さい頃、母さんに絵本で読んでもらったが――あれに出てくる心を持たないブリキの木こりも、最後には人間の心を手に入れたんだよな。

俺たちはみんな、あの　味みたいなもんかもな。
彷徨うドロシー、臆病なライオン、バカなカカシ。
でも、みんなが力を合わせて、それぞれ、次の自分を手に入れていく。
童話のように、エンディングを迎えたらすぐに　というわけにはいかないだろう。
でも、一歩一歩近づいていけばいい。新しい自分に。
だからレキ――お前も、これからだよ。
「キーくーん、何笑ってるの？　理子の隣でそんなに嬉しい？」
表に戻った理子が擦り寄ってきたのを押し返しながらも、俺は自分が苦笑いしてる事に気付いていた。
俺は、すっかり――レキの味方になっちまってるなあ。こんな事ばかり考えるなんて。
レキに狙撃拘禁された夜に日論んだリマ症候群――
その逆の心理現象に、ストックホルム症候群というものがある。
拘禁された人間が、拘禁した人間に共感し：すっかり、味方になってしまう現象だ。
これは多分、それだな。
ハメるつもりが、ハメられてたってわけか。
もちろん向こうは意識しちゃいないだろうけど、結果的にはあの無口・無表情で、どこか淋しげな美少女――レキに。

4弾　チーム・バスカービル

夜、武偵高に帰ると――

重傷者がいない事を確認した教務科は、すぐさま俺たちを学科ごとに分けて調書を取りやがった。ひでえな。少しは休ませてくれよ。一応、カツ丼は食わせてくれたけどさ。

アリアは強襲科教諭・蘭豹に連れられて校長室へ。俺と理子は探偵科、武藤は車輌科でそれぞれの先生と面談し……後で先生たちが警視庁・マスコミ・ＪＲへの連絡をするとの事だった。

新幹線を切ったりしたので怒られるかと思ったが、その辺は犯人逮捕の功績と差し引きされてお咎め無し。それどころか俺たちは事件を解決に導いた功労者たち、ということにされる流れらしい。公的には。

ココたちが新幹線を乗っ取ったのは、日本政府を脅迫して現金をせしめようとしていたせい――という事で、武偵高の引責問題にもされていないみたいだ。

あれこれ話がうますぎるとも思ったが、

「遠山君。司法取引のお話が来る前に言っておくけど、自分たちが狙われたことは内緒よ。とっても偉い人たちに怒られちゃうからね」

という探偵科教諭・高天原ゆとり先生の話と、調書取りに同席してきた黒服の男の姿を見て何となく裏が読めた。

徽章を見るに、この男は外務省の官僚。それも事務次官クラスだ。

たぶん……アリアのお陰だな。これ。

原則として、武偵はどんな事件に巻き込まれようと国際的に自己責任。だが、アリアは外国の貴族だ。それが日本国内で大々的な危険に晒された……なんて事実は、あまり公言しない方が日英関係にとって良いんだろう。いわゆる『大人の事情』ってヤツだな

まあその辺は、こっちも大人しく言う事を聞いておこう。

とても良いとはいえない内申点を、これ以上落とされても困るからな。

口止め料のつもりか「君には政府から見舞金を出す」と言う官僚サマのご厚意を丁重にお断りし、すっかり遅くなってようやく解放された俺は……

11、第2女子寮に行ってみた。

その最上階――レキの、部屋に。

昔もらったカードキーで扉を開けると、室内は暗い。

分かってはいた事だが、やっぱり無人だな。

（レキ……）

裸電球をつけると、コンクリートむき出しの部屋が虚しく照らし出される。
リビングの窓も閉ざされており、耳が痛いほどの無音だ。
風は――吹いてない。
ここには、もう

男子寮の自室へ久々に戻ると、こっちも無人だった。
歩道で擦れ違った蘭豹によると、アリアは虎ノ門に向かったという。自分の母親、神崎かなえさんの裁判前の打ち合わせのため、雇っている女性弁護士の事務所に行ったらしい。
あんな大事件の後なのにタフなヤツだ。
リビングに入ると……
ちか、ちか。
という点滅ランプに俺は気づく。
……何だ？　滅多に使わない固定電話の留守電が、フル録音状態になってるぞ。
これ、1分×30件で30分は録音できるのに。
イヤな予感がしたので、すぐさま再生ボタンを押すと――
『キンちゃん、ご無事ですか？』
やっぱり白雪だ。

あいつ、何かあるとメールとかを執拗に送ってくる癖があるんだよな。
俺の携帯が壊されて通じないから、こっちに掛けまくったらしい。
「この録音に気づいたら、お手数ですけど……お電話、下さいっ。キンちゃんなら大丈夫だって信じてるけど、それでも……ぐすっ。とっても、心配して、ますぅ……ふえ……」
白雪は静岡の辺りで後部車両に残って、俺と離ればなれになったからな。
心配してくれるのはいいんだが、だからって30分も吹き込むなよ。
留守録は一度切れて、次のが再生される。
「うう、えぐっ、ふえ……キンちゃん……うぅ……ううううっ……」
こ――怖っ！
泣き声だけの録音とか、やめてくれよ　後半、幽霊みたいじゃねえか。
恐る恐る再生した、次の録音は……
「――武偵高から連絡をもらいました！　キンちゃんが無事って聞いて、安心してます。犯人も逮捕したんだってね！　ほんとに凄いよ……！　キンちゃんは、ほんとに凄いです。ほんとに凄いです、キンちゃんは……あぁ……キンちゃんは、本当に凄い御方……」
なぜに繰り返す。
「私達もみんな無事です。東海道線で帰るね。お家に着くのは遅くなっちゃいそうだけど、帰ったらご馳走を作ります。さっき新鮮なカニを買ったの！」

白雪は白雪で、切り替え早いなー。

ていうか、カニ持って帰ってくんのか。

うう……まだ録音あるぞ。もう眠いんだが。

『キンちゃん、あのね、あのね、あの新幹線に乗ってた虹婦さん、静岡の病院でちゃんと赤ちゃんを出産できたんだってー　よかったぁ……写真をメールで貰ったんだけど、とっても可愛い女の子だよー　えっと　…あの、ところで　…キ、キンちゃんは、赤ちゃん、って、好き……ですか？　私はね、大好きだよ。とっても可愛くて、見てるだけで幸せになれる気がするの　だ、だから私、私、いつか……いつか、キン』

ピッ――と停止ボタンを押した。停止、停止だ。この辺で。なんか当初の安否確認から話がズレてきてたし、何か背筋に良くない予感が駆け抜けたしな。はい全件消去っと。

もう眠かったが、まあ心配してくれたので一応……白雪に電話してやり、きゃあきゃあ嬉しそうに喚く声に「俺は大丈夫だ。心配すんな。もう寝る」と声を被せてすぐ切った。

電話線を抜き、シャワーを浴び　…久しぶりに1人っきりの二段ベッドで横になる。

携帯もないので特にすることもない俺は、

（猛妹、炮娘、狙姐……か）

俺とレキを狙った三姉妹の記憶を、ぼんやりと反芻する。

あいつらは3人揃って東京駅で逮捕された。最後までぎゃおぎゃお悪態ついてたけどな。

護送する車輌科の先輩も姉妹の見分けが付かなかったらしく、それぞれの額に「長女」、「次女」って書かれた札を貼られてたのは笑えたよ。

まんま、古い映画『霊幻道師』の不死人みたいだったぜ。

今夜は二姉妹とも、尋問科のドS教諭・綴梅子の尋問を受けてるんだろう。

詳しくは知らんし知りたくもないが、綴は被疑者に対して、尋問中にとんでもない事をするらしいからな。いい気味だ。こってりオシオキされとけ。

（さて……今度こそ……）

今度こそ、御先祖様の口癖を呟いてもいいよな？

「これにて、一件落着――だな」

でも、この言葉。

今さら思うが、どこか安心しきれない響きがあるぞ。

一件、落着。ってことは：　だ。

二件目、三件目が、あるような気がしないか？　なあ、御先祖様よ。

などと警戒している時ほど何も起きないもので――俺は修学旅行Ⅰの後にきた連休を、丸ごと休養にあてる事ができた。

いや、正確に言うと休みの序盤を……だな。

翌日の早朝に目が覚めた俺の休暇は、白雪の作ったカニチャーハンで幕を開けた。
アリアが留守で俺と2人っきりになった白雪は、ここぞとばかりに掃除・洗濯・飯炊きに勤しんだ。この家事スキルが相変わらず神がかっており、理子的なゲームに類出するというメイドさんみたいなかいがいしさだった。
毎日なぜか幸せいっぱいというムードで世話を焼いてくれる白雪のおかげで俺は久々に休日をノンビリ過ごす事ができ、新しい携帯もゆっくり選んだ上で買えた。
そんな感じで平穏に日々を過ごしていると……連休の途中で、なぜか俺の部屋のカードキーを当たり前のように持っていた理子が室内に湧いて出た。
それから俺の部屋には西部劇の決闘場のような殺伐としたムードが流れ始め、理子が「キ～く～ん♪」と猫なで声を出すたび、白雪が「キンちゃん様から離れなさい！　この泥棒ネコー」と出刃包丁を振り回す哀しい日常が回帰してきた。
それがヒマ潰しなのか理子は再三わざとらしく俺にベタベタし、白雪はそれを真に受けて理子に掴みかかるわ、日本刀を振り回すわ、M60をブッ放しやがるわだ。
俺が室内にいた時だけで、取っ組み合い10回、刃物沙汰12回、銃撃戦15回。
戦闘以外でも勝負事が大好きな理子は、挑発に乗りやすい白雪が大のお気に入りらしく……腕相撲とか早食い競争とか、とにかくいろんな対決を持ちかけてやがる。
白雪も白雪で「妻は何事も妾に負けはしないんです！」とかいうワケの分からん理由で

それにホイホイ乗せられてちゃんと対決してる。

いっぺん帰宅した時なんか、牛岡上みたいに四つん這いで「もぉ～！」「ンモーっ！」と頭突き対戦をしてたけど……お前ら、本当は仲いいんじゃないのか？　そこまでいくと。

そうやっていつも通りのドタバタをやってる内に――9月下旬が、やってきた。

先送りにしていた『チーム編成』、その登録をイヤでもしなければならない時期がな

通常、チーム編成は代表が『申請』を行って、修学旅行の直後に教務科から来る確認の電話に応答する形で『承認』を受け、最後に『登録』の写真撮影をするのが流れだ。

だが教務科からの確認電話にレキは応答せず、レキと俺のチームは否認されていた。

つまりいま俺はどこのチームに入る予定もない、宙ぶらりんの状態になっている。

まあ、俺のケースはちょっと特殊だが……実は、修学旅行を経て『やっぱり組まない』という結論を出すチームは意外と多い。

なので、そういった生徒たち向けに『直前申請』という救済措置がある。

この直前申請ではチームのメンバー名を紙に書いて提出すれば『申請』となり、先生に集合写真を撮ってもらえば『承認・登録』となる。

つまり手抜き式・駆け込み型のチーム登録だ。

とはいえその救済措置も、〆切は明日に迫っている。

さすがに焦りを感じてきた俺が、アリアにその辺の事を、応電話しておくと――
『チーム編成については、ちょっと待ちなさい』
待機、とのご指示をいただいた。
「待てって言うけどな。お前、何か計画でもあるのか」
『あるけど、キンジはこないだ生意気な口をきいたから教えてあげない。ふーんだ』
鼻を鳴らす音までアニメ声なアリアは、そう言うと電話を切ってしまっている。
どうやら……修学旅行Ⅰの前に俺が『チーム編成なんて、どうでもいい』と言った事を根に持っているらしいな。
あれは確かに俺も悪かったけどさ…　ったく、身長も性格もガキだなー。アリアは。
というわけで……
その翌日、直前申請のメ切日になっても――俺は、無所属のままでいる。
直前申請もしなかった生徒は、教務科が勝手に決めた相手とチームを組まされることになるんだが……まあ、最悪もうそれでもいいか。どうせ、武偵高は辞めるつもりだし。
などと半ば腹をくくって、リビングで勉強なんかをしていると――
「キンちゃん、ゴメンね。ギリギリまで何も言えなくて……」
昼飯前に、白雪が風呂敷包みを持ってやってきた。
見ればそのグラビア体型の身体は、黒服に包まれている。

ブラウスの胸元をまとめる清楚なリボンも、黒。普段ヘアバンドのようにしている布も黒いものに変え、それで髪を珍しくアップに結っている。

いつもの白雪とは、見た目の雰囲気が違うな。ちょっとカッコいいぞ。

どうやらその服は、防弾制服・黒――チーム登録の写真撮影をする際に生徒が着る服のようだ。装備科から借りてきたらしい。

「キー、キー、キーくん来い♪　こっちの水は甘いぞ♪」

などと歌いながら現れた理子も――黒服姿だ。

こっちのは、肌、特に胸の谷間を人肌に露出させたデザインの黒服だぞ。イヤだな。パッと見で分かるが、胸、明らかに下着つけてないし。

ていうか、防御力的に大丈夫なのか。そんなに肌を晒す防弾制服って。

と、俺が目のやり場に困って視線を上に逸らすと……ツーサイドアップのテールを結ぶリボンまでちゃんと黒にしてある。まさに上から下まで黒ずくめだな。２人とも。

「チームの……直前申請か。お前たち、行くのか」

「そーだよ！　キーくんも行こ！」

「……俺、も……？」

「あのね、言いづらかったんだけど……私、自分の先行きを占ったらキンちゃんと部会を組めるって出てたから……誰ともチーム申請を出してなかったの。そしたら修学旅行Ｉの

後でアリアから、みんなでチームを組む話をもらってね？」

白雪の話を聞きながら風呂敷を開くと、そこには黒いスーツが入っていた。

これは――俺用の、防弾制服・黒――だな。

理子りんとアリアも2人でチーム登録の申請を出してたんだけど、『確認』の時に解散させたんだよ。アリアが改めて構想した、理想のチームをキーくんたちと組むためにね」

と言う理子は、ぺら、と直前申請の申請用紙を見せてくる。

そこには――

チーム名『バスカービル』

メンバー

○神崎・H・アリア（強襲科）

◎遠山キンジ（探偵科）

・星伽白雪（超能力捜査研究科）

・峰理子（探偵科）

・レキ（狙撃科）

と、5人の名前が書いてあった。
これが、アリアの構想したチーム――
リーダーを示す二重丸が俺に、副リーダーを示す丸印がアリアに付けられていることはさておき、
「おい……これ……」
と、俺は『レキ』の名前を指した。
直前申請に限らず、チームを結成する生徒たちは全員揃って教師に写真を撮ってもらう。
そうやって、各メンバーが合意できれている事を見せて、小すのだ。
しかし……東京駅で姿をくらましたレキは、まだ失踪したままでいる。
つまり、登録できない。
「うん……レキさんとは連絡がつかなかったから、名前は消してキャンセルする事になるけど……でも、キンちゃんはレキさんと組んで武偵活動をしたかったんだよね？」
上目遣いに言う白雪は、アリアによる誤解を共有しているようだったが……
いまさら、レキに狙撃拘禁されてた事を伝えるのも何だな。
肯定も否定もせず、そのまま話を聞こう。
「だからアリアは、チームにレキさんを入れることに拘ってたの。『キンジを入れるなら、レキも入れる。そうしないとキンジの意志に反したチーム編成になるから』って」

「でもほら、レキュは行方不明で、チームに入れられるかどうか分かんなかったしぇん」

白雪の説明に、理子が言葉を続ける。

「それでアリア、『キンジに期待させて当てが外れたら悪いから、チームのことはレキを入れる筋がつくまで黙ってなさい』って言ってきてさぁー。まあアリアがキーくんに気を遣うのはいい事だからね、理子も今の今まで黙ってたんだよ。ゴメンねぇ」

アリア　……

だから、昨日になってもチームの事はうやむやにしてたわけか。

そういう人間関係に関する繊細さは、女性的なんだな。他はあんなに男勝りなのに。

「でも結局、レキさんには電話が繋がらなかったみたい。アリアは一応、直前申請の集合場所と時間をメールしたって言ってたけど　お返事、なかったんだって」

しょんぼりと言う白雪に、俺は内心『それはそうだろう』と思った。

レキの携帯は、京都でココに破壊されていたからな

「アリア、もう撮影会場にいるってさ。朝一からレキュを待ってたみたいだけど、メ切は今日の正午。あと30分で時間切れだからねぇー。まあ、もう行くしかないよキーくんさあ着替えて着替えてっ！　キーくん午着替えショーだ！　きゃっはー！」

と、黒いスーツを手に立ち尽くしていた俺のベルトに理子が手をかけてきた。

その場でズボンを脱がされそうになったので、俺は理子を振り払いつつ――

防弾制服・黒を手に、着替えに行くことになった。半ば、なし崩し的にな。

俺の部屋は元々4人部屋だったので、個室代わりになる小部屋が幾つかある。

その一つに入り、ゴチャゴチャした頭で鏡を前に着替えていると――

かしゃ。

天井の方から、ケータイのカメラ音が聞こえてきた。

「キーくん無防備すぎー。今のがピストルだったら風穴だぞぉー」

見上げれば、天井板のパネルが一つ外されている。

そこから理子が逆さ吊りの姿勢で上半身を出しつつ、ラインストーンでキラキラ飾ったケータイをヒラヒラさせていた。

……相変わらず、神出鬼没なヤツだな。

「女が男の着替えなんか撮るな。俺はやらんが、普通は逆だろ」

理子の奇行は止めるだけムダと悟っている俺はそうボヤくに留め、黒いネクタイを結びながら鏡に向き直る。

「キーくんの日常フォトは、ゆきちゃんに高く売れるからねぇ。くしししし」

売るな、そんなもん。

ていうか買うのかよ白雪も。やっぱお前ら仲いいだろ。絶対。

「ところで……いいのか、理子は」

一応――

俺は頭上の理子に尋ねておく。鏡の方を見たままで。

「お前、俺とアリアを殺りたいんだろ。チームを組んだら、闘い辛くなるぞ。ケンカ程度ならともかく、武偵が武偵と本気で戦うのは御法度だ。特にチーム内で殺り合った日にゃ重罪になるぜ」

「――ハッ。ここにいる女は、無法者だぞ。このトリ頭め」

理子は――

いきなり鋭い声になって、逆さづりのまま俺を嘲笑う。

、あたしがお前たちと一緒に行動してやるのは、他の奴らに殺られないためだっ。ブラドを倒した後、言っただろ――『あたし以外のヤツに殺されたら許さない』って。それなのにお前らと来たら、あれから何度殺されかけた？　今回も危なかった。見ちゃいられないっ。もうすぐ宣戦会議があるだろうしな。これからのために、アリアとキンジは一分育つまであたしが近くにいてやるよ。そしてサクラン ボが熟れたら――改めて、喰ってやる」

「これから……バン……なんだって？」

何やら不穏な事を口走った理子の方を見ると……大井は、もう元通りになっていた。

理子の姿どころか、何の痕跡も残ってない。

俺は不気味な空気を打ち消すように「フン」と鼻を鳴らし——黒服姿で、部屋を出た。

今年のチーム編成・写真撮影会場は、探偵科の屋上だった。

白雪・理子と3人でそこに着くと、思ったより多くの生徒が黒服姿で集まっている。

20〜30人はいるぞ。これ全部、直前申請をしに来たチームか。

うちもそうだが、結構みんな……最後の最後まで、もつれ込んだんだな。

まあ武偵のチームってのは、お互い命を預け合うものだ。そう易々、手軽に決められるもんじゃない。ギリギリまでゴタつくのも自然な事だろう。

曇り空の下で屋上を見渡すと、そんな生徒たちがごった返す中に……

アリアの姿も、あった。

特注品と思われるチビッコ用の防弾制服・黒で[redacted]ジャケットの下にはチューブトップしか着けてないらしく、風でチラチラとヘソが見え隠れしてるな。

屋上の床には黒いビニールテープで長方形の枠が描かれており、他のチームはその中に横一列に並んでは開約に写真を撮ってもらっている。

「おいアリア。カミナリ様にヘソを取られるぞ」

撮影の様子を無言で見つめていたアリアに、そう声をかけると——

「キンジ」

振り返ったアリアは、「？」という顔をして自分のヘソと曇り空を交互に見た。
そして形のいい眉を思いっ切り寄せ、俺・白雪・理子の所へ歩いてくる。
「相変わらず、あんたはおかしな事を言うわね。撮るのはオヘソじゃなくて写真でしょ」
どうやらこの帰国子女：雷神が人のヘソを取るって言い伝えを知らないらしい。
よし。今はそういうムードじゃないが、今度説明して思いっ切り怖がらせてやろう。
アリアは雷が人のニガテだからな。
「締切まで……あと何分あるの？」
「あと5分だねぇー」
などと白雪と理子が話すそばで、アリアは赤紫色の瞳で俺を見上げてきた。
「キンジ……あんた、来てくれたって事は……いいの？　あたし達と、その……チームを組む事」
「いいも何も、お前が申請用紙に勝手に書いたんだろ。俺の名前。しかもリーダーで」
「あ、あたしは……あたしとレキの事で、あんたがどこのチームにも入れなくなる事態は避けたかったのよ。別にレキから横取りし返したとか、そういうんじゃ　ないわ」
少し強引に事を進めたことを恥じているのか、アリアは口ごもる。
俺は……黙って、周囲を見回した。
レキの姿は　―無いな。やっぱり。

「もう時間が無い。レキの事、どうする」
「ギリギリまで待つわ。あたし、あの子にメールしたから」
言うとアリアは、腕組みして階段の方を見つめた。
あと……4分半か。
今日日珍しいフィルム式のカメラを持って撮影係をやっている強襲科教諭・蘭豹の所に理子が白雪と申請用紙を提出しに行ったので…… 俺は少し背を屈めて、小声で囁く。
「アリア、ちょっと耳貸せ。今ならまだキャンセルできる事だ」
「……？　何よ」
アリアは背伸びして、ちっちゃな左耳を俺に向ける。
「危ないぞ、理子は。アイツはまだ、敵か味方か分からない」
「知ってるわよそのぐらい。理子とはまたいつか、決闘する事になるでしょうね」
「寝首をかかれるかもしれないぞ　チームを組んで、いつも近くに居させたりしたら」
「そういう事をする子じゃないわ　プライド高いのよ、ああ見えて」
自分のプライドの高さを棚どころか宇宙まで上げて、アリアは理子の背中を横目で見た。
「まあ、万一あたしが闇討ちに遭ったら――その時は、あんたが仕返ししなさい　これは命令。しっかりやっつけるのよ？」
「この俺じゃ、理子を倒すのは荷が重いと思うけどな　……ていうか、命令されて思い出し

たが、なんで俺がリーダーなんだよ」

「あれは戦略上、戦闘陣形でキンンを隊長に配置するからよ。つまり名目上のリーダー。命令はあたしが下すから任せなさい」

仕せなくたって勝手に命令するくせに。

だがそう言うと、拳銃が出る。

まあ、もういいか。リーダーの件は。名前貸しみたいなものらしいし。

「あと……チーム名。えっと、あの乗り物みたいな名前……どういう意味の言葉だ？」

「ああ、あたしの持ってる土地の名前よ。デヴォン州ダートムアにあるわ」

サラッと言ったアリアに、俺は目を丸くする。

と、土地持ってんのかよ、女子高生のくせに。

そこじゃその頭に、ちっこい王冠でも載せてんのかな。

と、俺が驚きの眼差しでアリアのツインテールの間を見ていると、

「……まあ、荒れ地だけどね。ホームズ家の戦勝地を相続しただけ。別に、あたしが努力して手に入れたものじゃないわ」

アリアは少し気恥ずかしそうに、俺から目を逸らした。

そのセリフで思い出したが、バスカービル。その単語、探偵科の教科書にあったな。

初代シャーロック・ホームズが解決した事件の中に、そういう名前が出てきてた。後年、

その事件が起きた土地、帯はホームズ、族が買収してバスカービルと名付けたとか、で、今はそこ、アリアの所有地になってるらしい。

（やっぱり、コイツは貴族様なんだな……）

と俺が首を振った、その動作で動いた視界の端に――

白い、何かがチラッと見えた。

「……？」

屋上に据えられた2mはある空調設備、その陰に……

白い、シッポのような、何かが。

「――！」

俺は――駆け出す。

「キンジ!?」

と背にかけられたアリアの声を無視して、空調設備の方に走る。

――あれは。

ような、じゃない。尻尾だ。

白銀の毛に被われた、ケモノの尻尾。

（たぶん、見間違いじゃない……！）

角を曲がるように空調設備の横に出ると、そこにはやはり――銀狼、ハイマキがいた。

そして……
その、飼い主も。
男子っぽいスーツ型の防弾制服・黒が似合う、ショートカットの小柄な女子。
設備の壁に背をつけて、無表情に斜め下を見つめ、無言で立っていたのは――
「レキ……！」
俺を追ってきたアリアが、彼女の名前を呼んだ。
「……」
視線を下げたままのレキは、もう額に包帯を巻いていなかった。
他の傷の具合も気になるところだが、立ってる様子を見るに大丈夫っぽいな。
4kgはあるドラグノフ狙撃銃も、普通に肩にかけてるし。
「レキさん！　良かった、間に合ったんだね……　みんな、すっごく探してたんだよ？　どこに行って何をしてたの？　もう――」
理子と共に駆けてきた白雪は、年下に問い質すようなムードでレキに尋ねてる。
「――ハイマキと合流しに、京都へ行っていました」
「えっ」
白雪が驚いている所を見るに、どうやら星伽の分社には行ってないみたいだな。
ヘリを奪った事もあるし、顔を出しづらかったんだろう。

で、ハイマキはご主人様が近くに来た事に勘付いて、神社から脱走したワケか。

「――それから先日襲撃を受けた民宿を借り切って、湯治をしていました」

民宿……あの、沙織さんの民宿『はちのこ』にいたのか。

ていうか、湯治って。また自然治癒力に任せた治療法だな。あんなに重傷だったのに。

まあ、それで治ってるんだからいいんだろうけど。

「それにしても……よく分かったな。俺たちがここにいるって」

レキの携帯が壊されていた事を思い出した俺が言うと、

「さっき携帯電話を買い直した時、すぐアリアさんからのメールが入りましたから」

レキはまだ顔を下げたまま、そう返してくる。

（ああ……そうだったのか）

俺も先日携帯を買い直して電源を入れたら、いきなり武藤や不知火からのメールが来て驚いたが、同じ事が起きたんだな。

携帯のメールというものは通常、送り先の携帯が圏外や電源オフで届かなかった場合、何日かセンターに保存される。そして改めて携帯が電波を掴んだ時、送り直されるのだ。

携帯が壊れて買い直した場合も、それと同じだ。契約者さえ同じなら電話番号やメアドは変わらず、ずっと電源を切っていたのと同じ扱いになる。

それで、レキは携帯を新調すると同時にアリアからのメールを読んだのだろう。

ドコモショップにいるレキを想像すると少しシュールで笑いが漏れそうだ。
今日レキが携帯を買って。明日だったらアウトだったぞ
（何にせよ、レキは……来たんだな。ここに。もう『風』の声が聞こえなくても――）
――そう。自分の意志で。
それは初めて、レキが自分で動いたということだろう。
――歓迎するよ。ようこそ、レキ。
「……」
アリアは――
すぐ駆け寄ったくせに、黙っていた。
なに……モンモジしてんだよ。
もう直前申請（ラスト）の締切が近いってのに。
大ゲンカした末にチームを組むわけだから、まあ、ギクシャクするのは分かるけどさ。
……仕方ない。ここは俺が会話を促（うなが）すか。
ヒステリアモードでも何でもないから、うまく女子同士の関係を取り持つなんてマネが出来るかどうか……分からないけどな。
「レキ。お前、このチームでいいんだな？　アリアが勝手に作っちまったチームだけど」
アリアの代わりにそう聞いてやると、レキは――

こくり。

うなずいた。無言のまま。

「じゃあほら、アリアも言いたい事があるなら早く言え。仲よく手でも繋いで写真撮れよ。お前ら、戦闘中はちゃんと手を繋いだろ。ココたちに挟み撃ちされた時に」

新幹線上でのターンを思い出しながら、アリアの背を押すようにそう言うと……

「べっ、別に……あの時は、そうするのが最善だったからそうしただけだもん」

アリアは恥ずかしそうに赤くなり、レキを上目遣いに見る。

「でも、チームに入って欲しいんだろ。ツンケンするなよ」

「ち、チームに入れるのは狙撃手が必要だからよ。だから呼んだだけだもんっ」

この……ヘソ曲がりアリア……俺が説得したら、逆効果だったみたいだぞ。

これ以上話して、妙なキレ方をされたらマズい。モメてる内に時間切れになりかねん。

と、むずがる子供に俺が手を焼いていると——助け船を出すようなカンジで、

「とかなんとか言っちゃってぇー。なんだかんだ言っても、アリアはレキが好きなんだよねー？」

「アリア、ほら、ちゃんと言葉で言った方がいいよ。昨日まで、傍から見てると可哀想なぐらい……レキさんの事ばっかり、気にしてたんだから……」

理子と白雪が、左右からアリアに語りかけてる。

アリアは2人を見て、俺を見て、レキを見て、ぶわあああ。
時間が無い時にはありがたい、いつもの急速赤面術を見せた。
「ちっちがうわよ！　あたしは、こんな子、こんな……」
と言いながら、わなわな、と震える手をレキに伸ばしたアリアは……
一歩、二歩、レキに歩み寄り……
「……レキ……！」
――抱きしめた。
「レキ……レキ……心配したのよ！　急に、いなくなっちゃうから……！」
涙ぐむアリアと、無表情に抱かれるままのレキ……
それを理子はニヤニヤと、白雪は妹2人を前にしたお姉さんみたいに優しく見ている。
よ、良かった。やっぱり女同士を仲直りさせるには、女の手助けが必要だぜ。
「アリアさん。新幹線の上で、あの時――」
アリアの腕の中から、レキが……
「手を繋いでトさって、ありがとうございました」
目の前にあるアリアの顔を覗き込むように見ながら、初めて、感謝の言葉を告げた。
――ありがとう――
今まで、その言葉をレキが誰かに言ったことはない。俺が覚えている限り。

そもそも無口なヤツだからそんなに気にならなかったが、初めて聞くと……気持ちいいもんだな。そういう当たり前の言葉が、レキから出てくるのは。

やっぱり、少し変わったんだな。レキは。あの、命懸けの修学旅行Ⅰで。

あまりにもまっすぐにお礼を言われたアリアは……

日気恥ずかしそうに赤くなったが、きちんと、レキを見つめ返した。

「レキ……あたしも、ありがとう。あの時のこと。それと、来てくれて……ありがとう。もう絶交は取り消しよ。また……復交？　再交？　えっと……また交わりましょ」

そのヘンな絶交取り消し宣言に俺が苦笑いした時……

「ホラホラー　私ノ可愛イ生徒タチ！　締切マデ15秒ヨ、武偵ハ時間厳守デショ！」

どこかから男の裏声が聞こえてきて、俺たちは皆バラバラな方を見た。

こ、このオカマ喋り。

声だけ聞こえるが姿が見えない事で有名な、諜報科教諭のチャン・ウーだ。いたのか。

屋上の片隅では、

「くぉらガキ共ー　イチャイチャしとらんと、こっちゃ来いや！　あと10秒やぞー　早よそこのワクに入れ！　撮影するで！」

こっちはでかくてよく見える強襲科教諭の蘭豹がカメラを振り回し、ビニールテープで囲んだ床の所定位置を示してる。

「いこ」

レキの手を、アリアが握った。

あの新幹線の上で手を繋がせた時と、同じように。

「――よし、俺たちも行くぞ」

俺は白雪と理子の肩を押して、カメラを持つ蘭豹の方に急がせる。

見ればレキは――生まれて初めて素の自分を人から受け入れられて、どうリアクションしたらいいのか分からない顔で……アリアに引っ張られるままに、走っていた。

その2つの背を追っていると、小さな笑いがこみ上げてくる。

この　探偵科の屋上、

先月末、レキはここで俺を無理矢理パートナーにした。

そして今……同じ場所で、今度は俺たちがレキをチームに引っ張り入れた。

なんだか、あべこべになったな。

「あと5秒や！　走れ！」

腕時計を見ながら怒鳴る蘭豹に急かされて、俺たち5人はバラバラと所定位置に入る。

模範的なチームみたいに、ちゃんと横一列に並んでるヒマは無さそうだな。

普通の写真撮影なら、『はい笑って、前向いて』と言うところだが――

「よし、笑うなー　斜向けー」

これは武偵の集合写真。真正面を向かず、体を微妙にほかすのが習わしだ。黒一色の服で撮影するのも、制服からどこの生徒かバレないようにするためだからな。

「チーム・バスカービル！　神崎・H・アリアが直前中請します！」

まず所定位置の中央に立ったアリアが、片手を腰にあてつつ瞞豹の方を振り向いて叫ぶ。

アリアの右後ろに立ったレキは、自分の銃――ドラグノフを鮮明には撮らせないためか、肩掛けのバンドを少し引いて背で隠した。

アリアの左後ろでは理子が腕組みして横を向き、目だけでカメラの方を向く。

俺は髪を少し流して頬についた銃弾逸らしの傷を隠し――痛めた指のテーピングを隠すため、手をポケットに突っ込んで枠内の右端に入った。この傷跡から、どんな技を使うか読み取られたら不利になるからな。

最後に指定位置の左端に入った白雪は、育ちの良さが出て……瞞豹のカメラを見る顔が、少しだけ笑顔になってしまってるな。

「9月23日11時59分、チーム・バスカービル　承認・登録！」

腕時計を見ていた瞞豹は、ギリギリでカメラを振り上げてシャッターを押す。

そして、パシャッー　と、ストロボの閃光が弾けた。

キマらない事に、このとき瞞豹が急いで振り上げたカメラは斜めになっており――

写真も一応5人でちゃんと写っていたものの、めちゃめちゃ斜めになっていた。
まあ、いつも何でもギリギリで切り抜けてる俺たちらしい写真だよ。
そしてこの時は予想もしなかったのだが、この写真が――
――俺たち『バスカービル』が5人で撮った、最初で最後の写真となった。

軽い夕立があってから、空は晴れ、薔薇色の夕焼けが、東京を覆った頃――
学園島の西端、海を望む転落防止柵の外に、俺はレキとハイマキを連れ込んだ。
あの山での狙撃戦の時に約束したご褒美を、ハイマキに与えるためにな。
――ほら、食えよ。これ全部ビニール剥くの面倒だったんだからな」
足元に置いて開いた紙箱に詰まっているのは、マルハの魚肉ソーセージ60本。
いわゆる箱買いである。
それを見たハイマキは「ウオォン」と吼えすると、箱に頭を突っ込んでムシャムシャ食べ始めた。白いシッポが、プロペラみたいにブンブン振り回される。
よっぽど好きなんだな。魚肉ソーセージ。
「……」
レキはハイマキの傍らに膝を揃えてしゃがみ、その背中を撫でてやっている。
相変わらず、赤の他人が見れば全くの無表情なんだろうが……俺には少しレキの表情が

分かるような気がするな。どこか、ハイマキを労ってやってるような優しい感じがする

俺は夕焼けで金色に光る海を眺め、潮風を胸に吸い込む。

この時間帯になると、風が涼しい。

夏も――もう、終わるな。

「そういえばアリアの奴、戦闘配置まで勝手に申請してやがったぞ。知ってたか？」

俺が話しかけると、レキはしゃがんだまま美少女顔を上げて、ふるふる。

首を横に振った。

「前衛がアリアと俺――アリアが先駆けで、俺が隊長だ。支援は白雪とお前、後尾が理子。突入時には俺とアリアが拳銃弾で圧して、お前たちが中・長距離攻撃で支援する陣形だな。理子は後方奇襲に備えたり、逃げる時の殿――追撃阻止係ってとこだ」

強襲用語を交えつつ語る俺を、レキはその端正な顔で小動物みたいに直視してくる。

何も言わないところを見るに、特に異存は無さそうだな。

まあ、俺も……リーダーにされている事はともかく、この隊形が優れている事は一瞬で理解できていた。個々人の性格や特性にも合ってる。

俺とアリアは何だかんだ言っても2人で戦うと上手くいくし、白雪は攻防両方をこなす割とオールマイティーな個体だ。刀や鬼道術を振りかざして前進してもいいし、下がって負傷者を救護したり狙撃の観測手をやったりもできるだろう。

後衛には天才狙撃手のレキを据え、背面は危険を目ざとく発見する理子に守らせている。チームが後退行動を取る時は、理子が敵の追撃を一手に引き受けるワケだが……あいつは逃走時にこそ人一倍の才能を発揮するからな。逃走戦はお手の物だろう。

アリア：　いろんな偶然が重なってチームになった5人を、よくここまでバランス良く配置できたもんだよ。

あいつ、推理力はからっきしのくせに、戦闘絡みの事になると天賦の才がありやがる。

（それに……陣形だけじゃない）

このチーム、個々人の能力が高いのも特徴だ。ここにいるレキも含め、Sランク武偵が2人もいるチームなんて3年でもなかなかない。2年ではあと1チームあるだけらしい。白雪と理子もAランクだし、俺だけがEランクでチームの平均を大きく落としてるってワケだ。すみませんねホント。

まあ登録前のゴタゴタもあり、結束力には不安の残るチームなんだが……蘭豹先生曰く、

「最初猴々組んだチームほど、後で大活躍するもんや」とか。

大活躍するような大事件に巻き込まれない事を祈るのみだぜ、俺は。

「何て言うか……本当にいいんだな？　またアリアと組んでも」

事後ではあるが、一応、改めて確認すると――

「――はい」

レキは静かに立ち上がり、俺に向き直った

「私は、今まで……人の『気持ち』というものを考えた事がありませんでした。ですが、今回の体験から私なりに考えてみたのです。アリアさんの――気持ちを」

「アリアの、気持ち……？」

「山岳での狙撃戦で負傷した時、私は風の命じるまま――戦死を決意しました。そして、あなたに私と離ればなれになるよう言いましたが……あれはきっと、強がりだったのだと思います。あの時の私はまだ、風とあなたの間で揺れていたから」

強がり……そんな感情も、レキは芽生えさせていたのか。あの時。

「今だから言いますが、あの時――私の中には、『死にたくない』という思いがあったのです」

「……」

「その思いを抱かせたのは、キンジさん。あなたです」

「俺……？」

「――あなたは私の、大切な人ですから。離れたくなかった」

感情というものの初心者・レキは……

自分の気持ちを包み隠さず、まっすぐ俺の目を見てそう伝えてきた。

「……っ……」

いきなり、美人の女子にそんな事を言われ……
俺は口ごもって、海の方に視線を逃がしてしまう。
「あなたは私に、感情というものを芽生えさせてくれた。死んでしまえば、そのあなたと――大切な人と、離ればなれになってしまう。そうなりたくないと思ったのです」
大切な人……って。2度も言ったよ、この子。まっすぐこっちを向いたまま。
ストレートだなぁ、レキは。まっすぐターゲットを射抜く狙撃手だけに。
「今回、アリアさんの気持ちを考えて……アリアさんからキンジさんを引き離すことは、それと同じ行為だと気づいたのです。彼女にとっても、あなたは大切な人ですから」
俺に合わせたのか、また海の方に向けられたレキの目は――
今度は、どこか、少しだけ淋しそうに見えた。
「ですから、チームに参加して――あなたたちを見守りはしますが、もう引き離そうとはしません。その果てに、どんな事が起きようとも」
相変わらず自分の世界を持つレキの言葉に、俺は少し……ついていけずにいる。
「だから、あなたとアリアさんは、一緒に居ていいのです」
そう言うとレキは、その小さな唇を閉じた。
そして珍しく、そこで拍ためらうような間を置いてから――
「でも……これもきっと、強がり……」

と、呟いた。

「……強がり？」

「はい。私はもう　つ、矛盾した思いを持っていますから。私は……ただウルスに必要な男性としてだけではなく……私に、感情というものを抱かせてくれたキンジさんを……」

レキは鳶色の瞳を俺に向け、自分の気持ちを丁寧に指でなぞるようにゆっくりと語る。

「あなたを……アリアさんに、取られたくない」

――まるで、改めて対立を宣言したようなレキの態度だが……

このあいだ武偵高駅でアリアと闘った時みたいに、一方的な感じはしないな。

「……」

「……」

しばらく、2人して黙っていると……

ざぁん……と、遠い波の音が聞こえてくる。

「――逆に、キンジさんはいいのですか。こんな私とチームを組む事になってしまって。もう『風』が何も言わなくなったので……私は自分でもよく分からない、自分の『心』というものを不確かな道標にして歩いているのです。その心はこうして矛盾を抱えているし、風から何の使命も与えられない私は、もう自分が何者なのかすら分からないのに――」

今の沈黙で何か不安を煽られたのか、レキの態度は、どこか……縋るような感じだ。

それがちょっと可愛く思えて、俺は微かに頬を緩ませた。

「――レキ。自分が何者かなんて、誰にも分からないもんだ」

「……」

「レキはレキ。それで十分だろ。俺もそのままのレキでいいから、心配すんな」

そう言ってやると、レキは――僅かに、頬に朱色を浮かべたように見えた。

まあ、これは沈む夕陽の赤い光のせいかな。

「でも……私には、これから何をすればいいのかも分からないのです」

「それなら、これから見つけていけばいいだろ。やることなんか。それを見つけるために学校とか、チームってもんがあるんだよ」

Sランクの優等生レキは、Eランクの問題児・昼行灯の異名を取る俺の大ざっぱな話に……少し、面食らったようだった。まるで、親か何かに諭されたような目をしている。

……ざざん……と、また、遠い波の音がして……

レキは――

「あなたは――風に似ている」

と、呟いた。

どこか、独り言するように。

そんなレキを、風が優しく一撫でし――

「キンジさんは、器の広い人です。こんな……私の空虚さを知っても、変わらない
「いや、俺は結構せせこましいぞ。お前の方こそ――」
ヒステリアモード抜きでもこうやって俺のことを割と認めてくれる、寛大なヤツだよ。
と言おうと思ったが、本人を前に言うのも恥ずかしかったので…
俺は言葉を飲み込んで、ごまかした。
「あー……それに空虚、空っぽってのも、いいもんだぞ。それは、これから色んなものを入れていけるっていうことだからな」
「キンジさん……」
「だから、一般常識ぐらいなら教えてやるよ　これからも」
「はい。教えてください」
と言うレキの態度に、何かピュアな敬意のようなものが感じられたので――
適当な事しか言ってなかった俺は、少し気恥ずかしくなる。
なんか、理子的ゲームでいうところの『レキルート』に入りつつあるような流れだな。
全く意図してなかったが、気に入られるようなセリフの選択肢を選んでたんだろうか。
これで……性格は全然違うものの、諜報科の後輩・風魔陽菜みたいに……昇行灯の俺を間違って尊敬するような事になったら、レキがかわいそうだ。
そう思った俺は、

「なんたって、お前は非常識だからな。多分『バスカービル』の5人の中でも、一番」
バランスを取るために、少し好感度を下げるような事を言っておく。
すると……レキは、ミリ単位で口を動かした。ように見えた。
これ、どうやら……限りなく横一文字に近いが、への字口になったらしい。
「……」
そして、つ、と俺の真横に近づいてきたレキは……
ぽか。
と、俺の二の腕を小さく、弱く叩いた。
これは怒りの表現だろう。
レキとコミュニケーションするには、観察力が要るな。
叩かれたので、俺も、ぽか。
小さく、甘く、レキの二の腕を叩き返す。
すると、ぽかぽか。
レキは2発、ちっちゃく叩いてきた。
よく分からんが、今度のは……何か嬉しいようなカンジだな。
というかレキにもよく分からないんだろう。感情表現のやり方が。
あーあ。これから大変だぞ。そういう事を一から教えてやらなきゃいけないんだからな。

足元を見ると、ハイマキも魚肉ソーセージを食べ終えたようだったので…
ほとんど沈んだ夕陽と明るさを増してきた月の下、俺は寮に戻ろうと踵を返した。
俺に置いていかれそうになったレキは――くい。
「キンジさん」
俺のジャケットの裾を、背後から小さく掴んできた。
「…ウルスの忠誠は永遠。私は風が何も言わなくても、あなたを守ります……ずっと」
言葉の内容より、その幸せを噛みしめるような声色に俺が振り返ると――
ああ、レキ…、その表情をもう一度見られて、良かったよ。
レキをよく知らない人間が見ても分からないだろうが、俺には――その表情が、確かに見て取れた。とても微かな、でも、心を掴まれるほどに愛らしいその表情が。
それは――まだ一手くはないものだったけど……
笑顔だったのだ。間違いなく。

その夜、11時過ぎ……遅くまで現代文の課題図書を読んでいると……
白雪が冷凍庫にまだあるカニで、夜食のカニ玉を作ってくれた。
美味すぎるそれを食べていると最近なぜか我が家に住みつき気味の理子がレンゲを手に発生し、俺のレンゲとレンゲ同士が交錯するカニ玉争奪戦となった。坪子のヤロー、俺が

口に入れたカニ玉まで掻き出そうとするのは反則だろ。歯が折れるっつーの

俺が皿を守りつつ理子のレンゲを、指真剣白羽取りした辺りで――

携帯に、電話が掛かってきた。アリアの弁護士から。

この休み中に何度か、彼女は電話を介して俺からの証言を録音している。

なのでまた録音かと思って残りのカニ玉を諦め、静かなリビングに移ったが…違った。

アリアの母親・神崎かなえさんの裁判に向けた準備――準期日間整理手続が完了した、というのだ。

ここからの証拠の追加は、開廷まで原則的に出来ない。

それはつまり、しばらくアリアにも時間が出来るということだ

それを知った俺は、時計を確認し…

壁際のキャビネットから、ある物を取り出してポケットに入れた。

それはアリアの、まあ、なんというか…心のケアのために買っておいたアイテムだ。

そして風呂に入っている白雪に「すぐ戻る」と声を掛け、「くふふっ、あれれのれー？おーでかーけでーすかー？　よかったよかった、新幹線でしっかり恋愛カウンセリングをしておいた甲斐があったみたいだよぉー、くふっくふっ」などと意味不明なセリフと共にイヤラシイ笑顔でカニ玉の残りを掻っ込むハイエナ理子を背に――家を、出た。

最近のアリアは裁判の準備で息をつくヒマも無かった
そこに加えて、レキのあの騒動だ。きっと相当、ストレスを溜めたことだろう。
そういうストレスはアリアの中で、八つ当たり方式で『キンジのせい』という事になりがちである。今までの経験上。
実際、アリアは最近俺を見ると妙にソワソワした態度で姿を消すことが多かった。
あれはおそらく、危険信号だろう。
なので俺は2丁のガバメントが同時多発噴火する前にゴキゲン取りをして、宥めておく必要があるのだ。我が身の安全のため、基本的人権の一つ、生存権を確保するために。
とはいえ、相手は女子。
どうすれば女子の機嫌が取れるのかなんて、今まで、俺が最も苦手とする分野だったのだが……
今回は、違うぞ、ジャンヌ先生に教わった手法がある。
『女子は服とかアクセサリーとか、身につけるものを男子にもらうと機嫌が直る』
――これは、どうやら本当に効果があるっぽいのだ。
というのも大阪でレキに服を買ったら、実際に機嫌が直ったからな。
実地検証済みの確かな理論と言えるだろう。
あれを、アリア対策にも流用させてもらうのだ。

とはいえ、いきなり何かをプレゼントするのは不自然だろう。どうせ何か裏があるんでしょ、吐け、吐きなさいよ！　と口に拳銃を突っ込まれる流れにもなりかねん。

だが、その名目が今日はあった。

今日　――9月23日。

もうあと30分ぐらいしか無いが、今日はアリアの誕生日なのだ。多分。

多分、というのは……俺がそれをアリアからハッキリ聞いた事が無いからだ。

だが数ヶ月前、アリアは白雪と「あたし乙女座よ」「へー似合わないね」という剣呑な会話をしている。

先日ヒステリアモード時にそれを思い出した俺は（ヒステリアモードになると、やろうと思えば過去に聞いた全ての会話を思い出せる）、後でアリアの誕生日をスルーして風穴問題に発展しないようにと……武偵手帳にメモしていたのだ。『アリアは乙女座』と。

そしてネットで調べたところによると、年にもよるが乙女座は9月23日まで。つまり、今日までだ。もしアリアの誕生日がそれより前だったとしたら、それを全く祝わなかった俺には既に風穴が開いているハズである。従って、今日が誕生日という推測が成り立つ。

もちろんこれだけだと根拠に乏しいが、アリアのメールアドレスについてる正体不明の数字4桁――0823。これが、裏付けだろう。

メアドの末尾には、よく使用者の誕生日がついてるものだからな。

と、男子寮から出た俺は道路のガードレールに腰掛け……アリアに電話をした
1コール目でいきなり出たアリアは、
『……なっ、何？　キンジ』
なんか、声がキョドってる。
なんでだろう。まあいいか。
「お前、いまどこだ」
『あ、え？　こ、ここ？　ここは女子寮。あたしの部屋。今ちょうど、弁護士のとこから帰ってきた。けど、な、何よキンジ。まさか部屋に来るとか言うんじゃないでしょうね』
そんな危険地帯になんか、誰が行くか。
「じゃあ、女子寮の下の温室に来い」
『えっ』
「俺も――そうだな、10分したら行くから」
『は、はぇ』
はぇ、って。
なんだそれ。
ノドから空気の漏れるようなマヌケな声を出したアリアに、俺は釘を刺す。
「分かったか？」

『はい』

はい、って。

アリアの口から初めて聞いたぞ。俺に向けられた、敬語に類する言葉を。

大丈夫かな、アリア。ちょっとおかしいぞ。疲れてんのかな。

だが……それでも進めさせてもらうぞ。この話。

何よりも大切な、俺の安全保障が掛かってるんだからな。

深夜の学園島を歩いて渡り、女子寮の下に着くと……

外から見ても分かるが、温室の中は真っ暗だった。

まだアリアは来てないのか？　と、ガラス窓の脇にある電気のスイッチを押すと

ぱっ、ぱっぱっぱっ……温室の手前から奥へ、蛍光電球が次々と灯っていく。

菜園ゾーン、白合や撫子のゾーン、スイレンやハイビスカスのゾーンなどが、一つ一つ灯りの下に華やかな花と緑を煌めかせる。

最後に照らし出された一番奥、満開の薔薇園――そこに。

制服姿のアリアが、もう本当に所在ない、という雰囲気で立っていた。

自分のツインテールを揉むように触りまくっていたらしく、手が髪の束を掴んでいる。

あれはアリアが緊張している時のクセだな。

はわっ!?　という顔でアリアが見回した周囲には、何かのイベントの後片付けをしていなかったのか、観葉植物の枝に沢山の豆電球が灯っていた。どうやら天井の灯りと電源が一緒だったらしい。まるでクリスマスツリーみたいだ。

ついでのついでに、これも電源が　緒だったらしい薔薇園中央の小さな噴水が……

キラキラ……と、水を揚げ始めた。

挙げ句、ガラス張りの壁の向こうには中秋の名月の下、東京の夜景が東京タワーと共に見えるし……なんか……過剰に煌びやかで、華麗な空間になっちまってるな。温室。

まあいい。我が身の保安のため、ジャンヌ作戦を継続させてもらうぞ。

と、俺が軽く片手を振りつつアリアの方へ向かうと

アリアは、きゅ、と片手を胸の前で握り、激しく焦るような顔をした。

「こ、こんな所に呼び出して……な、によ」

俺が近づくと、一歩退いてさえいる

双剣双銃の鬼武偵、アリア様らしくない態度だな。喋、引けまくりだ。

「アリア……お前、調子でも悪いのか？　『何よ』ぐらいちゃんと言えろよ」

と言いつつ、咲かせすぎだろと思えるほどのバラに囲まれたアリアを前にした俺は……

パテで補修された床の傷痕に気づいて、小さく吹き出した。

「ははっ。おい、ここ。昔、俺とお前が上から落っこちてきた所だぞ」

かつて、俺は
女子寮の屋上からヘリでロンドンへ連れ帰らされかけたアリアと共に、この温室へ飛び降りた事がある。
そのとき俺はビニール屋根の強度を読み違え、かなり勢いよくこの床に落ちた。
あの時は屋根の鉄パイプも何本か外してしまい、それで付けた傷が　これだ。
「……ほんとだ……」
それを見下ろしたアリアは、当時の事を思い出したのか……懐かしそうに、ツリ気味の目を和ませた。
普段よく怒ってる分、そういう時のアリアは
本当に、何と言うか……かわいいな。最初に会った時から、そう思ってたけど。
という俺の心の声が聞こえたのか、あっ、と顔を上げたアリアは、ニヤけていた自分の口に手を当てた。
もご、と唇を押さえて、なにやら八重歯気味の犬歯を隠すような仕草をしている。
どうやら本人はコンプレックスというか、気にしてるらしい。自分のネコっぽい犬歯を。
そんなもん、今さら隠さなくてもいいのに。別に俺は、嫌いじゃないぞ。
口元のだらしなさを整えたアリアは、おほん、と咳払いをして――
「で……用事は何？　こんな夜遅くにレディーを呼び出すからには、それなりのご用件で

しょうね？」

そうじゃなきゃ風穴だから、とでも言い出しそうな緊迫感で言ってきた

俺は、温室中央の樹木に掛けられている時計を指す。

「11時45分。これもかなり、ギリギリセーフだったな」

「だから、な・ん・で・す・か」

アリア　お前いま、ものすごくヘンな顔してるぞ、

ものすごくワクワクしてるような、それを面に出すまいと必死に抑えてるような、珍妙極まりない顔だ。ケータイで撮っておきたいよ。

「――今日、誕生日なんだろ」

あまり勿体つけるのもアレだったので、早めにそう言うと――

アリアは、こく。

こくこく。こくこくこく。

目をまんまるに見開き、何度も頷いた。

「お前、自分で忘れてたりしてなかったか」

ふるふる。

ふるふるふる。

今度はツインテールをしゃらしゃらさせつつ、目をギュー　と閉じて首を横に振ってる。

「俺がスルーすると思ってただろ」

こく……ふるふる。

一旦うなずきかけてから、今度は否定の首振りだ。

本当はスルーされると思ってたんだな。信用ないなぁ俺。

ていうか、なんで喋らないんだよ。急に。

さっきはレキがよく喋ってたが、今度はアリアが無口になったな。入れ替わった。

女ってやつは分からないよな、本当に。どいつもこいつも。

「手、出せ。プレゼントやるから」

と言うと、アリアは両手をプルプルと震わせながら、胸の前で水を掬うように合わせた。

「あ、いや、片手でいい」

と、俺は適当に右手でアリアの左手を掴む。

わあ、と声にならない無声音を漏らしたアリアは……ヘンだな、なされるがままだ。

何と言うか……まるで誰かにこのイベントを予告されていて、待ちかまえていたような……？　まあ、そうだったとしても別にいいか。拒絶するようなムードじゃないしな。

俺は、ポケットの中に――

純銀の指輪を持ってきている。

アリアが銃を握ってもジャマにならないよう、宝石の無い、丸甲の指輪をな。

これは人脈の――ネコのいる不思議な服屋『シャトンb』で、レキが試着室に籠もっていてヒマだった時に買ったものだ。

だが……

アリアの左手を胸の前に引き寄せた俺は、ハタと気づく。

今さら気づいたが、この指輪。アリアの手に合うよう、ちっこいのを買ったんだが……どの指に合うサイズなのかまでは、考えてなかったぞ。迂闊だった。

「う……う……も、もらってあげるから……早く、渡しなさいよ……！」

アリアはまるで注射を打たれる前の子供みたいに、左手を震わせている。

「何でそんなに固まるんだよ。別に爆弾とか渡すわけじゃないから。ちょっと指見せろ」

「ゆ、指っ？　指っ!?　な、なな、なんで！」

目を飛び出させそうに開くアリアの、ピクピク震える九本の指を観察するが……

親指、人差し指、中指……は、ダメそうだな。人らないっぽい。小指だとズリ落ちるな。じゃあ薬指か。

「ほら」

と、俺がポケットから指輪を出すと――

「わ、わ、わぁ！」

尋常じゃないテンパり方で、アリアが叫んだ。

「わ！　わ！」

そりゃ、輪だよ。指輪なんだから。

なんでそんなにビビる。大したもんじゃないって。

ていうか、夜中なんだから大声はすな。近所迷惑だろ。

「ほれ。誕生日おめでとう」

と、指輪を渡そうとするが――アリアは「！　！　！」とビクンビクンする有様なので、自分ではつけられなさそうだ。

仕方なしに俺がアリアの左手の薬指をつまみ、スッ、と指輪を填めてやると――

おお、ピッタリだな。良かった。

「～～～～～～～～～～！」

ぎゅいい…

ぎゅいいいいん――っ！

今まで顔面蒼白だったアリアは、下から上へ、白から赤へ、と顔色を変色させた。

何度見ても凄いな、その1秒で赤面できる体質。カメレオンもビックリするだろう。

「…言っとくけど、そんなに高いもんじゃないからな」

「い、いいよっ。で、でも、も、貰っちゃうわよ、これ。ホントに貰っちゃうからね？」

「だから、あげるって。あと、しばらく俺を気軽に撃つなよ」

「――はいっ」

また出た。アリアの『はい』。

逆に薄気味悪いな。ここまで過剰に反応されると。

まあ、よく分からんが……

指輪というものは、女の心に極めて強く響くアイテムなんだな。勉強になった。

ギネス級のおてんばさを誇るアリアが、この有様だし。

（……いや……何と言うか……）

これ……ただのアクセサリーを貰った反応じゃないぞ、このアリアのテンパりっぷり。

もしかして俺の知らない、何らかの意味があったんだろうか？　――今の一連の行為に。

・誕生日の夜、温室に電話で呼び出した。

・指輪をプレゼントし、左手の薬指に填めてやった。

・今後しばらく気軽に俺を撃つなと頼んだ。

これらのどれに、行為以上の意味があり得るのか。皆目見当もつかないぞ。

自慢じゃないが、俺はそういう男と女の遣り取りの常識について子供並に物を知らないからな。ヒステリアモード化を恐れて、そういった情報を避けて生きてきたせいで。

そういえば、昔カナに警告された事もあるな……そういった知識不足はいつか、女性に対してとんでもない誤解を与える行動を生む恐れがある……とか。

そして相手は、誤解の水世名人・アリアさんだ。
もしかしたら、さっきの3つの行為のどれかが『誤解を与える行動』だったのかもしれないぞ。
だが、まあ……とりあえず当初の目的・俺の身の安全はしばらく確保されそうな手応えがある。だから、良しとするか。うん、うん。
と、人頷く俺の前でアリアは、
「キンジ、こ、これ……嬉しい、嬉しいけど……ちょっと、早いよ。あたしたちには……その……この……意味っていうか……い、意味……どういう意味なの……？」
ふむ、そう来たか。
まあここで『お前に八つ当たりされて撃たれるのを抑止するためだ』などと言ったら、それこそ45ACP弾の躍り食いをさせられる。なので、俺は――
「武偵憲章6条。『自ら考え、自ら行動せよ』。武偵なら自分で考えるんだな」
と、ごまかしておいた。
アリアは、ぐっ、と大きく一つ頷いてから、自分の顔の前に開いた左手――
その薬指に煌めく銀の指輪から、赤紫色の目を離せないという感じで――
つ、つ、つ……
純銀の輝きから後ずさるように、後退し始めた。

だが、手は自分の子だから、もちろんついてくる。
あわ、あわわわわ、と唇を震わせながらのアリアは、震える膝でさらに後ろ歩きし……
「みきゃっー」
――こてっ！　ばしゃっー
ミニ噴水の縁に足を引っかけ、真後ろにひっくり返った。
風呂おけぐらいしかないサイズの噴水のプールに、ピンポイントで頭からハマってるぞ。
「お、おいっ……」
「みっ、みきゃー　きゃぶ！　きゃぶぁー」
ばしゃ　ばしゃばしゃ！
たぶん水深は30センチ程度しかないのに、泳げないアリアは一瞬でパニクり――なんと、溺れだした。
お前、どんだけ泳げないんだよ。
いや、もうそれは泳げないとかいうレベルじゃねーぞ。
「大丈夫か、アリア……？」
ひっくり返った下半身だけを出して藻掻くアリアを、ぐいっ！
噴水プールから引っこ抜くと……目を回してやがるな。
水は飲んでいないようだが、ショックでぐったりしている様子だ。

（あー……放置していくワケにもいかないな、これは……）

と、ボランティア精神豊富な俺は

ズブ濡れツインテールをおしぼりみたいに絞って水を抜いてやり、アリアをおんぶして帰宅する事にした。仕方ない。自室で白雪にでも手当てさせるか。

うわ　相変わらず軽いなー、アリアは。体重、30キロぐらいじゃないか？

「り、理子が新幹線で言ってた通りに……なっちゃった……そ、それ以……に……」

背負われたアリアの、うわごとみたいな言葉の意味は分からないが――

（こうやって、アリアと過ごせるのも……あと少し、なんだな）

そう思うと、俺は、何とも言えない淋しさが胸に湧いてくるのを感じていた。

アリアは……ワガママで、自己中で、思い込みの激しい困った少女。

でもそれだけに、コイツといると退屈しない　良くも悪くも、いつも賑やかだった。

それは『ネクラ』なんてアダ名を付けられる俺にとっちゃ、いい人生のバランス取りになってた気もする。アリアが言うのとは別の意味だが――いい、相棒だったのかもな。

アリア。

俺はお前に、ハッキリと言うことは無かったし――

これからも、言わないと思うけどな　お互いのために。

――お前を帰したくない。ロンドンになんか　本当は。

でもそれは、俺のワガママだ。だから胸の内にしまっておくよ。いつまでも。
それに俺も、来年になればこの武偵高から一般校に転出する。
4月……アリアを追ってこの女子寮に来る前に破いてしまった転出申請の書類を、また作る時期なのかもしれないな。そろそろ。
まっすぐ続く、学園島――
アリアを背負ってその歩道を行きながら、俺は思う。
この学園島が、もっと長かったらよかった気さえするよ。今は。
ずっとずっと今夜が続いて、このままどこまでも歩いてたっていい。
でも、明けない夜はない。道には終わりがある。
それは何か耐え難い事のような気がして、考えないようにしていたが……アリアの母の再審は来月だ。イ・ウーは倒したわけだし、無罪判決はもう間違いないだろう。
だから、あと1ヶ月で――アリアとはお別れなのだ。一旦。

そう、この時は覚悟を決めたものだが……
俺たちの運命、そうは問屋が卸さなかったんだよな。あれも、これも。
――なあ、『緋弾のアリア』さんよ。

Go For The NEXT!　宣戦会議（パンツァー）

それからしばらくの間は、ウソみたいに平穏な日々が流れた。
学校を休みがちだったアリアも普通に通学し、従友（アシスト）という武偵高の制度に基（もと）づき1年の女子を指導したりしているようだ。おかげで俺はしばらく羽根を伸ばせたし、一般校への転出申請も――無事、教務科（アスターテ）に出すことができた。
順調にいけば、転出は来年の4月。
どこの高校に転入するかは未定だが、3年になると同時の転校となる。
そうやって……俺が『普通の高校生』に自分を一歩ずつ近づけていたある日の放課後、ちょっとした事件が起こった。
士官候補生の情報科（インフォルマ）を間借りして行（おこな）われた情報授業の後、帰りに下駄箱を開けると――
「……？」
俺の靴の上に、手紙が置いてあったのだ。
手紙は純白の封筒に入っていて、映画とかで外国のお金持ちが手紙を封印するのに使う赤い蝋（ろう）みたいなので封がされてる。
筆記体の署名は……ジャンヌ・ダルク・ニコラ・ドゥ・ラ・ジャンヌか。

「――おいおいィ!?　そんなの、妹の持ってる少女マンガでしか見た事ねーぞ！」

一緒に帰るところだった中輪科の武藤が、右からいきなり俺の頭を掴んできた。

「あちゃー……最近は神崎さんと上手くいってるのかと思ったら、もうこれかぁ」

左では不知火が、イケメン顔で苦笑いしてる。

「……『そんなの』とか『これ』って何だよ。ジャンヌが手紙入れてただけだろ。しかし古風なヤツだな。今日日、手紙って。連絡なら、メールでもくれればいいのに」

俺がはやくと、武藤と不知火は顔を見合わせてから――

「あのなぁ。メールじゃロマンスやメルヘンが無えから手紙なんだろ。それはラブレターつつーんだよ。武士の情けだ、黙っててやるから見せろっ」

「神崎さん、星伽さん、峰さん、レキさんときて、今度はジャンヌさんかぁ。美人揃いだ、遠山君の女性遍歴。フプレター、ちょっと見せてよ」

などと言いつつ、左右からラブレターと決めつけた俺への手紙を取ろうとしてきやがる。

内容が何にせよ、人からの手紙を他人に見せちゃダメだろう。人として。

と思った俺は武藤を遠山家秘伝の頭突きで昏倒させ、不知火がその手当てをしてる間に情報科から脱出しだ。

ちょうど来ていた巡回バスに乗り、席で手紙を開けると――うっ。英語……じゃない、フランス語だ。それもめちゃめちゃ流麗な、レタリングの筆記体で書いてある。

あいつ、字うまいなぁ。絵は描けないくせに。
ていうか、読めるわけねーだろ。フランス語の、しかもこんな飾り文字。
と思ったら、文末に日本語で注意書きがあった。

『どうせお前は読めないと思うから、裏に日本語でも書いておく。』

……イラッ。
じゃあ最初っから日本語で書けよ。

『遠山キンジ殿
10月1日　夜0時
空き地島南端　曲がり風車の下にて待つ
武装の上、一人で来るように
ジャンヌ・ダルクより』

……なんだこれ。
指定の時刻は――明日、というか今夜だ。

不審に思って、バスを降りてすぐジャンヌに電話をすると……

『――遠山か。読んだようだな』

「ジャンヌお前、なんでわざわざ手紙なんだよ。おかげで武藤を葬る事になったんだぞ」

『あれは正式な書状――招待状、だからだ。お前も男なら、ちゃんと来い』

それだけ言うと、ジャンヌは詳細を語らず電話を切ってしまった。

もう一度かけると、出ない。

何と言うか……ちゃんと語ると、俺が来ないかもしれないと思っているみたいだな。

ますます怪しいぞ。

あまり気乗りはしなかったが、ジャンヌの態度に引っかかるものがあった俺は――

武藤……には断られたので、同じく車輌科に通っている武藤の妹から無免許でも乗れる2馬力の小型モーターボートを借りた

そいつで、真夜中に学園島から空き地島の南端へと渡る。一応、帯銃の上で。

錆びた梯子を伝って上った人工浮島の上は

暗い上に、濃霧に覆われていた。

不明瞭な視界の左右には、東西に整然と並ぶ風車の柱が続いている。

なんだか、不気味な風景だ。

その霧を掻き分けるようにして、俺は……曲がり風車と武偵高ではアダ名されている、4月に自分が飛行機をぶつけて曲げてしまった風力発電機の下まで歩いていく。

あの機体の残骸は解体・除去され、この辺も元の空き地に戻っているのだが　……ここを覆う、この霧……何か、違和感があるぞ。

自然に発生した霧ではないような気がする。

どこかで、同じ霧に包まれた事があるような……そうだ、イ・ウーでシャーロック・ホームズと戦った時に、アイソが『予習』と称して俺に被せたあの霧に似てる。

「遠山、こっちだ」

掛けられた声に振り向くと

少し離れた所に、白銀の鎧を着たジャンヌが立っていた。

魔剣・デュランダルの切っ先をまっすぐ地面に突き、杖のように立て、柄頭には手甲を填めた両手を重ねて乗せている。

「何だ　こんな所に、夜遅く呼び出して」

少し前にアリアに言われたような事を言いながら、ジャンヌに近づくと――

彼女の西洋甲冑は、かつて地下倉庫で戦った時よりも重装だった。あのとき着けていた胸当てや臑当てに加えて、スカート丈の草摺り、曲線的な肩当てまで着けている。

その端麗な顔にも、緊張感があるな。どうしたんだ。

「――間もなく0時です」

頭上から聞き慣れた声がしたので、顔を上げると

（……レキ？）

動かない風車のプロペラに、制服姿のレキが腰掛けていた。

見れば、いつもは肩に掛けているドラグノフ狙撃銃を体の前で抱えている。

こっちも――臨戦態勢とまではいかないまでも、かなり警戒感を高めている雰囲気だ。

「何なんだよ、お前たち……」

と、俺が眉を寄せた、その時。

――バッ――

曲がり風車を大きく円形に囲むように、複数の強力なライトが灯った。

眩しさに腕で目を覆った俺が、再び、周囲を見ると。

（……！　なんだ……コイツらは……！」

光に晒された霧に、俺たち以外にも幾つかの人影がある。

その姿形が、どれもこれも普通じゃない。

――異形の、集団、

そうとしか言いようがない不気味な連中が、半径50mぐらいの周囲に集っている。

その装いはみんなバラバラで、まるで仮装大会のコスプレ集団みたいだが……そういう

お遊びじゃない事は本能的に分かる　この鈍感な普段の俺にさえ。
――ヤバい。ヤバい。コイツらは、危険だ。
俺の脳裏に、イ・ウーの面々と戦ってきた記憶が次々と甦ってくる。
どいつもこいつも、あっち系の怪人・魔人・怪物の類だ。タダ者じゃない。
やろうと思えば、俺なんか指一本で殺せる。今すぐ。ここで。
たとえ俺がヒステリアモードでも、勝利は覚束ないだろう。そういうヤツらだ。
まるで、何人ものカナやシャーロックに囲まれているような危機感がある。
「――先日は藍幇の曹操姉妹が、とんだご迷惑をおかけしたようで　陳謝致します」
恭しく俺たちの方にお辞儀してきたのは、糸みたいに細い目をした男
張り付けたような笑顔に丸メガネをかけ、色鮮やかな中国の民族衣装を着ている。
そいつから離れた地面では――ゾゾゾ……と、黒い影が蠢いている。
おかしい。あの影はおかしい。上に物が無いのに影だけがあって、動いている。悪夢のような光景だ。
影は集まって人形になったかと思うと――地面から起きしがってきて、
「お前がリュパン4世と共に、お父様を殺した男か。信じがたいわね」
理子の甘ロリとは違う……白と黒を基調とした不吉なゴシック&ロリータ衣装に全身を包んだ、金髪ツインテールの少女になった　白い手には夜なのに黒いフリルつきの日傘を

持っており、背には蝙蝠のような形の――人きな、翼が生えている。
その翼が本物である事を示すように、バサッ、と一つ羽ばたいた後ろでは――
「――ヴンッ――」
と、別の人影が体から異様な音を上げた。
ここに集う面々の中で、そいつが一番でかい。3mはある巨人だ。その全身を現代的な装甲に覆い、多銃身回転砲を携え、肩には連装型のロケットランチャーまで搭載してるぞ。まるで二足歩行の戦車だ、ていうか人間なのかあいつは。それすら分からん。
その傍らでは、白い法衣にそのグラマーな身体を包み、十字架のような大剣を背負ったシスターと――漆黒のフード・人きなとんがり帽子・肩には大ガラスという、絵に描いたようなチビの魔女が、それぞれ垂れ目とツリ目で睨み合っている。
「仕掛けるでないぞ、遠山の。今宵はまだしゃ。儂も大戦は86年ぶりで気が立つがの」
なぜか俺の事を知っているようなふりで話しかけてきたのは――
梵字が描かれた藍色の和服を着た、アリアより小柄な女の子だった。
切れ長の鋭い眼は日本人っぽいが、長いその髪は濃い金髪、というかキツネ色だ。
日を被いたくなる事に、こいつの頭には2本の……猫のような、いや、キツネのような耳がピンと立っている。ピクッと動いたのを見るに、飾りじゃないらしい。
周囲には他にも、トレンチコートを着て長剣を背負った美形の白人男、トラジマ模様の

ネコ科動物のお頭つきも皮をワンピースにした原始人みたいな女の子、イヤホンから聴く音楽にノッてコキコキ体を揺する姿勢の悪いピエロ……様々な怪人が集結している。

そして視界の端に、きら、きら――と砂金が舞い――

霧の向こうから、2つの人影が見えてきた。

肌も露わな衣装を着た、片方の女は――ああ、アイツ……！

「ほほほ。トオヤマキンジ、久しぶりぢゃの」

砂礫の魔女、パトラ。

そして――濃紺に着色された大鎌を担ぎ、「ハーイ」ってカンジで俺に手を振る……

（カナ……！）

兄さんまで、現れた……！

防弾ロングコートに、編み上げブーツ――あれは、カナが武偵だった頃の戦闘装束だぞ。

ていうかカナ……『ハーイ』じゃねーだろ。授業参観に着た家族みたいなノリだ。

俺は苦虫を噛みつぶしたような顔で、周囲を改めて見回し――

額にジットリと滲んでいた脂汗を、手の甲で拭った。

俺はただ、平凡な人間になりたい。

それだけが願いの、ちっぽけな、つまらん高校生なのに。

この場にいるってことは、俺も――コイツらと同じ、『普通じゃない』人間の1人って

ことにされちまってんのか。

すっ――

と、アイスブルーの瞳で一同を見回したジャンヌが……

どうやら司会者らしく、凛とした声で語り出した。

「では始めようか。各地の機関・結社・組織の大使たちよ。宣戦会議――イ・ウー崩壊後、求めるものを巡り、戦い、奪い合う我々の世が次へ進むために」

――Go For The Next――

バラバラに唱和した怪人たちに、俺は半ばヤケクソ気味の睨み目を向ける。

今までの、『行け』『行け』と急かされた日々

Go――アリアのために走り。

Go――仲間たちのため、生き延びるために戦い。

Go, Go, Go――あれもこれも、片付けたつもりだったんだけどな。甘かったよ。

どうやら俺が平凡な男子高校生になるには

まだまだ、越えなきゃいけない「Go」があるみたいだぜ。どうやら。

あとがき

まだまだ広がる『緋弾のアリア』ワールド！　今度はスピンオフです！

皆さん元気ですかー!?　赤松は今日もみんなが引くぐらい元気ですよー！
お陰さまで『緋弾のアリア』はコミック版も2巻が発売となり、ケータイコンテンツも大好評配信中です。そして、前巻で発表されたTVアニメも鋭意制作中なところに……
さらに！　大人気マンガ誌『ヤングガンガン』で、『緋弾のアリア』の世界を別の視点から描くスピンオフ・マンガが、この秋から始まっちゃいます！　その名も……
『緋弾のアリアAA』！
原作は私が書いてます。アリアたちも続々登場させますので、目が離せませんよー！
あ、：AAといって、胸のサイズを思い浮かべたそこのあなた。それも正解です（笑）。
ザッツ・赤松イズムですー（!?）　詳細情報は……今しばらくお待ち下さいですのだ！

さてさて、『緋弾のアリアQ&Aコーナー』！　今回は、こちらにお答えしましょう！

■武偵高の購買とは……何を売っている、どういう所なのですか？

購買。キンジがよく言ってますねー、「この弾は購買で買った」とか。

これは武偵高直営の『購買部』という店舗群の事で、学食こと食品購買部、電機購買部、書籍購買部（ライトノベルも人気の商品です！）、2巻でアリアが対超能力者用の手錠を買っていた『装備品購買部』などが学園島に点在しています。

ですが、『購買』と聞いて武偵高の生徒が真っ先に思い浮かべるのは『火器購買部』。在日米軍や武偵企業から買い付けた銃が販売されている、学生向けでは日本屈指の有名なガンショップです。キンジが言ってるのも、たいていここですね。

ただし、ここで売られているのはあくまで既製品。入学したての1年生でもない限り、武偵高の生徒がここで買った銃をそのまま使うことはまずありません。

銃そのものの重さ、引き金の張力、LAM等のオプション追加……生徒たちは装備科の生徒に頼んで、銃を使用者個人の好みに合わせてカスタムしていくのが一般的です。

なぜなら武偵にとって、銃は命を預ける道具。その僅かな改造の有無で、生死が決まる事だってあるんです。だからみんな在学中にこだわりの一品を作り上げていき、ずっと使い続けて……ある時ふと、その銃と出会った購買を思い出し、昔を懐かしむのだそうです。

『購買』とは、武偵にとって——いずれそういう思い出になる、大切なお店なんですね。

といったところで紙面が尽きました。次もまた、本屋さんで再会しましょう。では！

2010年8月吉日　赤松中学

アリアもとうとう7巻！
7といえばラッキーセブン的なね。
めでたい(´▽`)ノ

今回は表紙がジャンヌということで、
「剣を持たせてほしい」という発注をいただきまして。
剣の柄の部分に文字が彫られている、という脳内設定
だったのですが、赤松先生がきちんと文章を
考えてくださいました！赤松先生有難うございます！

アリアはコミックの方も目が離せない感じで
私の細部のフワっとした絵をこよか先生がきちんと
絵にして下さってて感涙です。

さて今回もラストが大変なことになってたので次回が楽しみですー！

緋弾のアリア

Aria the Scarlet Ammo

風穴あけられたいの？

大ヒット
武装探偵学園アクション、
コミックス第2巻！

こよかよしの

原作：赤松中学　キャラクター原案：こぶいち
定価：550円（税込）
「月刊コミックアライブ」（毎月27日発売）にて大好評連載中！

TVアニメ化決定！

MF文庫 J

緋弾のアリアVII
キャスリング・ターン
火と風の円舞

発行	2010年8月31日 初版第一刷発行
著者	赤松中学
発行人	三坂泰二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒104-0061 東京都中央区銀座8-4-17
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2010 Chugaku Akamatsu

Printed in Japan ISBN 978-4-8401-3486-6 C0193

※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、固くお断りいたします。
※定価はカバーに表示してあります。
※乱丁本・落丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。
※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。
メディアファクトリー　カスタマーサポートセンター
電話:0570-002-001
受付時間:10:00～18:00(土日、祝日除く)

※この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは一切関係ありません

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト　株式会社メディアファクトリー
MF文庫J編集部気付　「赤松中学先生」係　「こぶいち先生」係

左記より本書に関するアンケートにご協力ください。

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待ち受けプレゼント!　★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。　★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。